対馬市文化財調査報告書　第９集

今屋敷家老屋敷跡

－対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１６

対馬市教育委員会

対馬市文化財調査報告書　第9集　今屋敷家老屋敷跡

二〇一六　対馬市教育委員会

対馬市文化財調査報告書　第９集

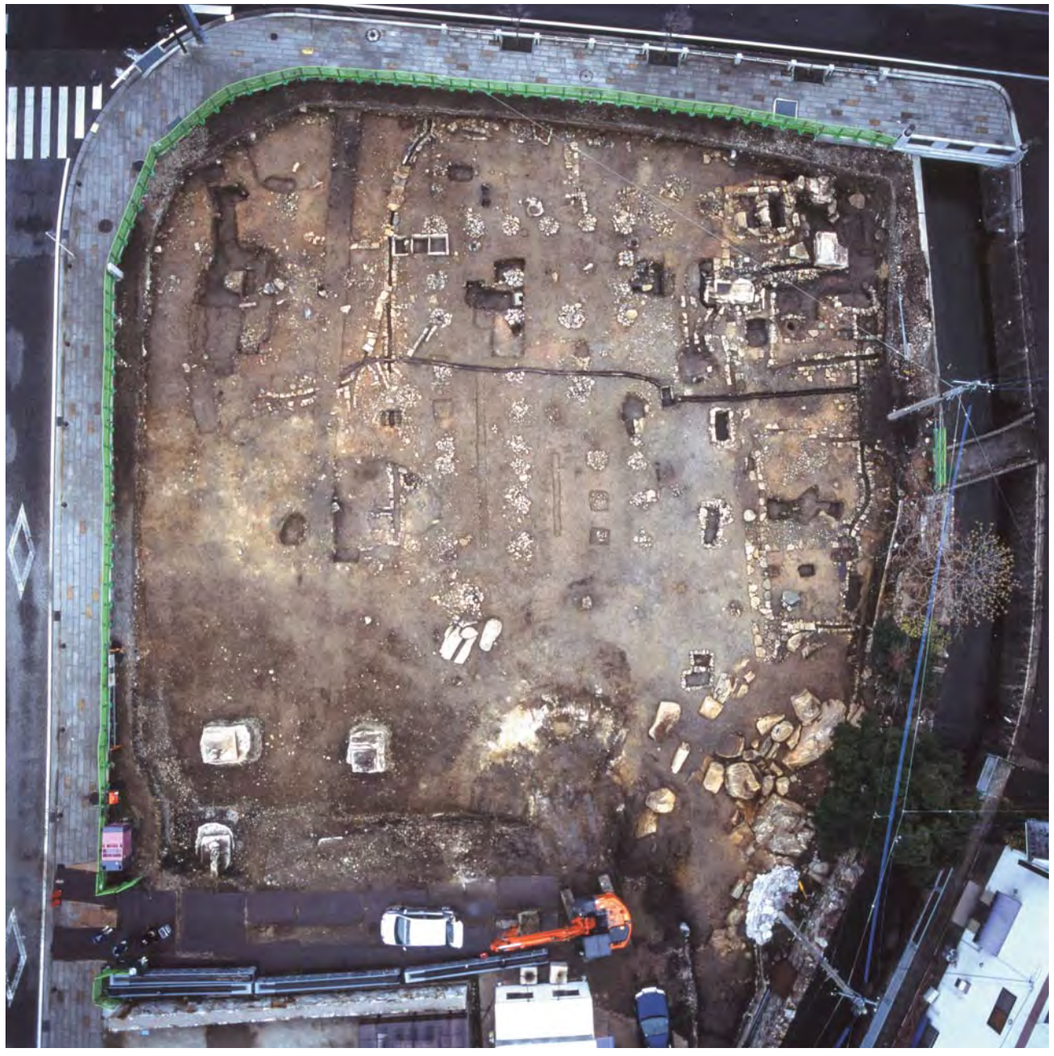
今屋敷家老屋敷跡

－対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

２０１６

対馬市教育委員会

巻頭カラー①　遺跡全景（調査前・東から）



巻頭カラー②　１面目遺構出土状況

巻頭カラー③　１面目出土建物跡推定線

巻頭カラー④　２面目出土蔵跡（北から）

巻頭カラー⑤　３面目出土遺構（SD41ほか・東から）

巻頭カラー⑥　遺跡全景（完掘状況・南から）

序　　文

本書は、平成24年度に対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事に先立ち実施しました、今屋敷家老屋敷跡の発掘調査報告書です。

今屋敷家老屋敷跡は、対馬市厳原町今屋敷地区に所在しています。この今屋敷地区は、大永６年（1526）に宗盛賢（宗氏14代当主。後の将盛）が築いた「池ノ屋形」が、それまでの「中村屋形」（対馬市厳原町中村地区）に対して、「今屋敷」と呼ばれたことが地名の由来となっています。

享禄元年（1528）に宗氏一族の宗盛治が起こした反乱により、池ノ屋形は焼失してしまいますが、盛賢は新たに清水山山麓の金石原に金石屋形（後の金石城）を築きます。今屋敷地区は、この新城の登城口に位置しており、対馬藩上級家臣の屋敷が軒を連ねる城下町中心地として発展しました。

今回の調査地点は、対馬藩家老の古川家の屋敷地があったとされる場所で、文化８年（1811）の朝鮮通信使易地聘礼の際には井上美濃守の宿所としても利用された場所です。

今回の調査では、古川家の屋敷跡と推定される遺構が発見されたほか、多数の遺物が発見されました。

本報告書の成果が、対馬の歴史解明、特に厳原城下町の形成過程やその様相を解き明かす一助となることを期待します。

最後に、今回の調査にあたって多大なご協力をいただいた地元今屋敷地区の皆様、並びにご指導ご助言を賜りました関係各位に深く感謝申し上げ、発刊のあいさつといたします。

平成28年３月

対馬市教育委員会
教育長　梅　野　正　博

例　　言

1．本報告書は、都市再生整備計画事業対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事に伴って行われた埋蔵文化財発掘調査の記録である。
2．調査地は、長崎県対馬市厳原町今屋敷672番地１ほかである。
3．調査は、対馬市教育委員会が主体となり、発掘調査支援業務を株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店に委託した。
4．現地調査は、平成24年10月９日から平成25年４月12日まで行い、遺物整理・報告書作成は平成25年６月から平成28年３月まで行った。
5．報告書の編集・執筆は対馬市教育委員会文化財課主事村瀬達郎が行い、同課副参事兼係長尾上博一が監修した。
6．調査時の遺構遺物写真撮影、航空写真撮影、地形測量、グリッド設定、遺構実測、土層実測、各実測図の製図は株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店が行った。
7．出土遺物の実測、製図については、浦瀬千鶴、江口千夏、大浦千鶴、小松友子、竹中喜久子、村瀬が行った。
8．出土遺物の写真撮影については、尾上、村瀬が行った。
9．第３章において、出土遺物（土器、陶器、磁器類）の生産地や制作年代について、川口洋平氏（長崎県文化観光物産局世界遺産登録推進課）のご教示を受けた。記して感謝申し上げる。
10．本書関係の出土遺物、図面並びに写真類は、対馬市教育委員会が保管している。

凡　　例

1．本書で用いた遺構略号は、SA：礎石列、SB：建物跡、SC：石壁遺構、SD：溝、SE：井戸、SH：石組遺構、SK：土坑、SV：石列、SX：不明を表している。
2．挿図中の高さは、標高を示している。
3．座標値は、日本測地系を用いている。
4．本書における土層の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修財団法人日本色彩研究所色票監修）を使用した。

本　文　目　次

第１章　はじめに……1
　第１節　調査に至る経緯……1
　第２節　調査体制……4
　第３節　調査の方法と経過……5

第２章　遺跡の位置と環境……6
　第１節　地理的環境……6
　　第１項　位置……6
　　第２項　地形……8
　第２節　歴史的環境……9
　　第１項　対馬……9
　　第２項　厳原城下町……10

第３章　調査の結果……11
　第１節　基本層序……11
　第２節　遺構面別検出遺構……17
　　第１項　江戸時代後期……17
　　第２項　江戸時代前期後半……43
　　第３項　中世末～江戸時代前期前半……67
　　第４項　中世……89
　第３節　遺構面別出土遺物……95
　　第１項　近代～現代……95
　　第２項　江戸時代後期……98
　　１．2a 層 ……98
　　２．2b 層 ……103
　　第３項　江戸時代前期後半 ……105
　　１．3a 層 ……105
　　２．3b・c 層 ……113
　　第４項　中世末～江戸時代前期前半 ……120
　　１．4a 層 ……120
　　２．4b 層 ……125
　　第５項　中世 ……131
　　第６項　複数層からの出土遺物 ……133

第４章　まとめ ……135

挿図目次

図１　今屋敷家老屋敷位置図①（１／2,500）…１
図２　周辺遺跡位置図（１／10,000）……３
図３　今屋敷家老屋敷位置図②……７
図４　基本土層模式図……11
図５　土層観察用ベルト南壁基本土層実測図……13
図６　調査区東壁基本土層実測図……15
図７　遺構詳細図①……19
図８　遺構詳細図②……21
図９　遺構詳細図③……23
図10　遺構詳細図④……24
図11　遺構詳細図⑤……25
図12　遺構詳細図⑥……26
図13　遺構詳細図⑦……28
図14　遺構詳細図⑧……29
図15　遺構詳細図⑨……30
図16　遺構詳細図⑩……33
図17　遺構詳細図⑪……35
図18　遺構詳細図⑫……37
図19　遺構詳細図⑬……39
図20　遺構詳細図⑭……40
図21　遺構配置図①……41
図22　遺構詳細図⑮……45
図23　遺構詳細図⑯……47
図24　遺構詳細図⑰……48
図25　遺構詳細図⑱……49
図26　遺構詳細図⑲……50
図27　遺構詳細図⑳……51
図28　遺構詳細図㉑……53
図29　遺構詳細図㉒……55
図30　遺構詳細図㉓……57
図31　遺構詳細図㉔……60
図32　遺構詳細図㉕……61
図33　遺構詳細図㉖……63
図34　遺構配置図②……65
図35　遺構詳細図㉗……69
図36　遺構詳細図㉘……71
図37　遺構詳細図㉙……73
図38　遺構詳細図㉚……74
図39　遺構詳細図㉛……75
図40　遺構詳細図㉜……77
図41　遺構詳細図㉝……78
図42　遺構詳細図㉞……80
図43　遺構詳細図㉟……81
図44　遺構詳細図㊱……83
図45　遺構詳細図㊲……84
図46　遺構詳細図㊳……85
図47　遺構配置図③……87
図48　遺構詳細図㊴……90
図49　遺構詳細図㊵……91
図50　遺構配置図④……93
図51　出土遺物実測図①……96
図52　出土遺物実測図②……97
図53　出土遺物実測図③ ……100
図54　出土遺物実測図④ ……101
図55　出土遺物実測図⑤ ……102
図56　出土遺物実測図⑥ ……104
図57　出土遺物実測図⑦ ……108
図58　出土遺物実測図⑧ ……109
図59　出土遺物実測図⑨ ……110
図60　出土遺物実測図⑩ ……111
図61　出土遺物実測図⑪ ……112
図62　出土遺物実測図⑫ ……115
図63　出土遺物実測図⑬ ……116
図64　出土遺物実測図⑭ ……117
図65　出土遺物実測図⑮ ……118
図66　出土遺物実測図⑯ ……119
図67　出土遺物実測図⑰ ……122
図68　出土遺物実測図⑱ ……123
図69　出土遺物実測図⑲ ……124
図70　出土遺物実測図⑳ ……127
図71　出土遺物実測図㉑ ……128
図72　出土遺物実測図㉒ ……129
図73　出土遺物実測図㉓ ……130
図74　出土遺物実測図㉔ ……132
図75　出土遺物実測図㉕ ……134

表　目　次

表１　土層注記表……12
表２　出土遺物観察表①……95
表３　出土遺物観察表②……99
表４　出土遺物観察表③ ……103
表５　出土遺物観察表④ ……107
表６　出土遺物観察表⑤ ……114
表７　出土遺物観察表⑥ ……121
表８　出土遺物観察表⑦ ……126
表９　出土遺物観察表⑧ ……131
表10　出土遺物観察表⑨ ……133

写真図版目次

巻頭カラー①　遺跡全景（調査前・東から）
巻頭カラー②　１面目遺構出土状況
巻頭カラー③　１面目出土建物跡推定線
巻頭カラー④　２面目出土蔵跡（北から）
巻頭カラー⑤　３面目出土遺構(SD41ほか・東から）
巻頭カラー⑥　遺跡全景（完掘状況・南から）
写真１～６　１a・b 層出土遺物……139
写真７～12　２a 層出土遺物①　……140
写真13～18　２a 層出土遺物②　……141
写真19～24　２a 層出土遺物③　……142
写真25～30　２b 層出土遺物　……143
写真31～36　３a 層出土遺物①　……144
写真37～42　３a 層出土遺物②　……145
写真43～48　３a 層出土遺物③　……146
写真49～54　３a 層出土遺物④　……147
写真55～60　３b・c 層出土遺物①……148
写真61～66　３b・c 層出土遺物②……149
写真67～72　３b・c 層出土遺物③……150
写真73～78　４a 層出土遺物①　……151
写真79～84　４a 層出土遺物②　……152
写真85～90　４b 層出土遺物①　……153
写真91～96　４b 層出土遺物②　……154
写真97～102　４b 層出土遺物③……155
写真103～108　４b 層出土遺物④　……156
写真109～114　５a 層出土遺物　……157
写真115～117　層混在遺物　……158
写真118～125　１面目遺構写真①　……159
写真126～133　１面目遺構写真②　……160
写真134～141　１面目遺構写真③　……161
写真142～149　１面目遺構写真④　……162
写真150～157　１面目遺構写真⑤　……163
写真158～165　１面目遺構写真⑥　……164
写真166～173　２面目遺構写真①　……165
写真174～181　２面目遺構写真②　……166
写真182～189　２面目遺構写真③　……167
写真190～197　２面目遺構写真④　……168
写真198～205　２面目遺構写真⑤　……169
写真206～213　２面目遺構写真⑥　……170
写真214～221　３面目遺構写真①　……171
写真222～229　３面目遺構写真②　……172
写真230～237　３面目遺構写真③　……173
写真238～245　３面目遺構写真④　……174
写真246～253　３面目遺構写真⑤　……175
写真254～261　３面目遺構写真⑥　……176
写真262～269　４面目遺構写真①　……177
写真270～277　４面目・５面目完掘写真　……178

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経緯

調査地点の今屋敷家老屋敷跡は、その名のとおり対馬藩家老古川家の屋敷地があった場所である。古川家は、杉村家・平田家と並び「老職三家」と呼ばれ、江戸時代を通じて対馬藩家老を務めていた家柄である。古川家の屋敷は、文化８年（1811）の朝鮮通信使易地聘礼の際に、幕府大目付井上美濃守の宿所としても利用された。この屋敷と土地は、明治の末年頃までは古川家が所有していたようであるが、後に売却され、屋敷は「山や旅館」として利用され、長屋門は菓子店などの店舗が入り、いずれも平成４年に解体されるまで利用されていた。解体後の同地については、市が公有化するまで株式会社丸和の所有となっていた。この他、古川家屋敷地と推定される西側一画には、葬儀社「みどりや」のビルが建っていた。

調査地点の今屋敷地区を含む厳原城下町は、国指定史跡金石城跡、同史跡清水山城跡、同史跡対馬藩主宗家墓所（万松院）、国指定名勝旧金石城庭園などの史跡名勝が狭い範囲に集積している地区である。また、今屋敷地区・中村地区・宮谷地区には石垣と門で構成された武家屋敷が多く残り、厳原城下町の風情を伝えている。

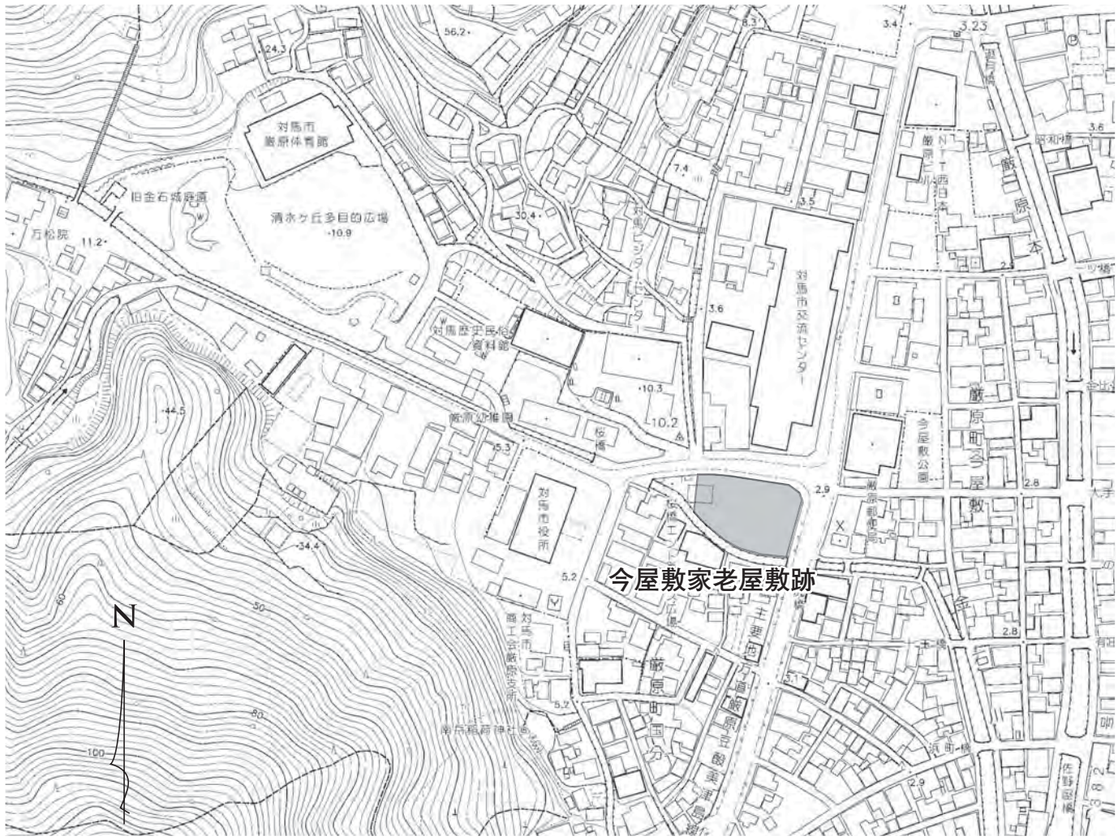


図１　今屋敷家老屋敷位置図①（１/2,500）

平成16年３月１日に６町合併によって誕生した対馬市及び合併前の旧厳原町の時代から、厳原城下町の歴史的な風景・資源を活かしたまちづくりが進められてきたが、一方で中心市街地における高齢化や自動車社会への対応のために、交通環境の改善が必要となるケースも発生してきた。

調査地点の今屋敷家老屋敷跡は、北に都市計画道路横町線が通り、東にも都市計画道路厳原豆酘美津島線が通り、この２つの道路は遺跡地の北東角で交差している。厳原豆酘美津島線は、対馬藩主宗家が江戸時代に整備した厳原城下町をほぼ南北に縦貫する馬場筋通りを踏襲しており、対馬島内においても最も交通量の多い路線の一つである。また、横町線は、厳原豆酘美津島線から対馬市役所（旧厳原町役場）へ向かう路線であり、同時に史跡金石城跡、清水山城跡、対馬藩主宗家墓所などへ向かう路線であるため、こちらも交通量が多い路線の一つである。どちらの路線も江戸時代の町割を踏襲した路線であったため、交通量に対しての道路幅が狭い路線であった。

この課題を解消するために、平成13年度及び平成15年度に両路線の拡幅工事が計画された。拡幅予定地は古川家の屋敷地があったと推定される場所に相当していたため、拡幅工事に先立ち、遺構の有無を確認するための発掘調査が、厳原町教育委員会及び長崎県教育委員会によってそれぞれ実施された。

平成13年度に厳原町教育委員会が実施した発掘調査によって、近世の整地土や石垣、谷状落ち込みなどの遺構が確認された。この調査結果と過去の土地利用の変遷から、試掘箇所以外にも良好な遺構が依存している可能性が高いと判断され、平成14年４月に「今屋敷家老屋敷跡」の名称で周知の埋蔵文化財包蔵地として遺跡に登録された。また、平成15年度に長崎県教育委員会が実施した発掘調査では、長屋門跡の遺構が確認されている。

調査後、厳原豆酘美津島線、横町線の両路線の拡幅工事が実施されたが、工事箇所から外れた遺跡地については、未舗装の状態で観光バス等の駐車スペースとして利用された。

この駐車スペースについて、平成22年度から平成26年度を事業期間とする第２期厳原城下町都市再生整備計画の中で、高次都市施設（観光交流センター）の建設が計画され、平成23年度から対馬市役所関係課(財政課、地域再生推進本部、観光物産推進本部、建設課、文化財課。いずれも当時の課名)による協議が開始された。建設計画では、遺跡地のほぼ全域にわたって建物の建設が計画されたため、遺跡地全面の発掘調査を実施し、詳細な記録を作成した後、建設工事に着手するという方針が採用された。

この方針に基づき、平成24年９月25日から平成25年４月12日まで発掘調査を実施した。発掘調査に関する予算については、第２期厳原城下町都市再生整備計画事業を担当する建設課が執行し、調査業務について文化財課が担当した。その後の遺物整理及び報告書の作成作業については、文化財課の単独事業として実施した。

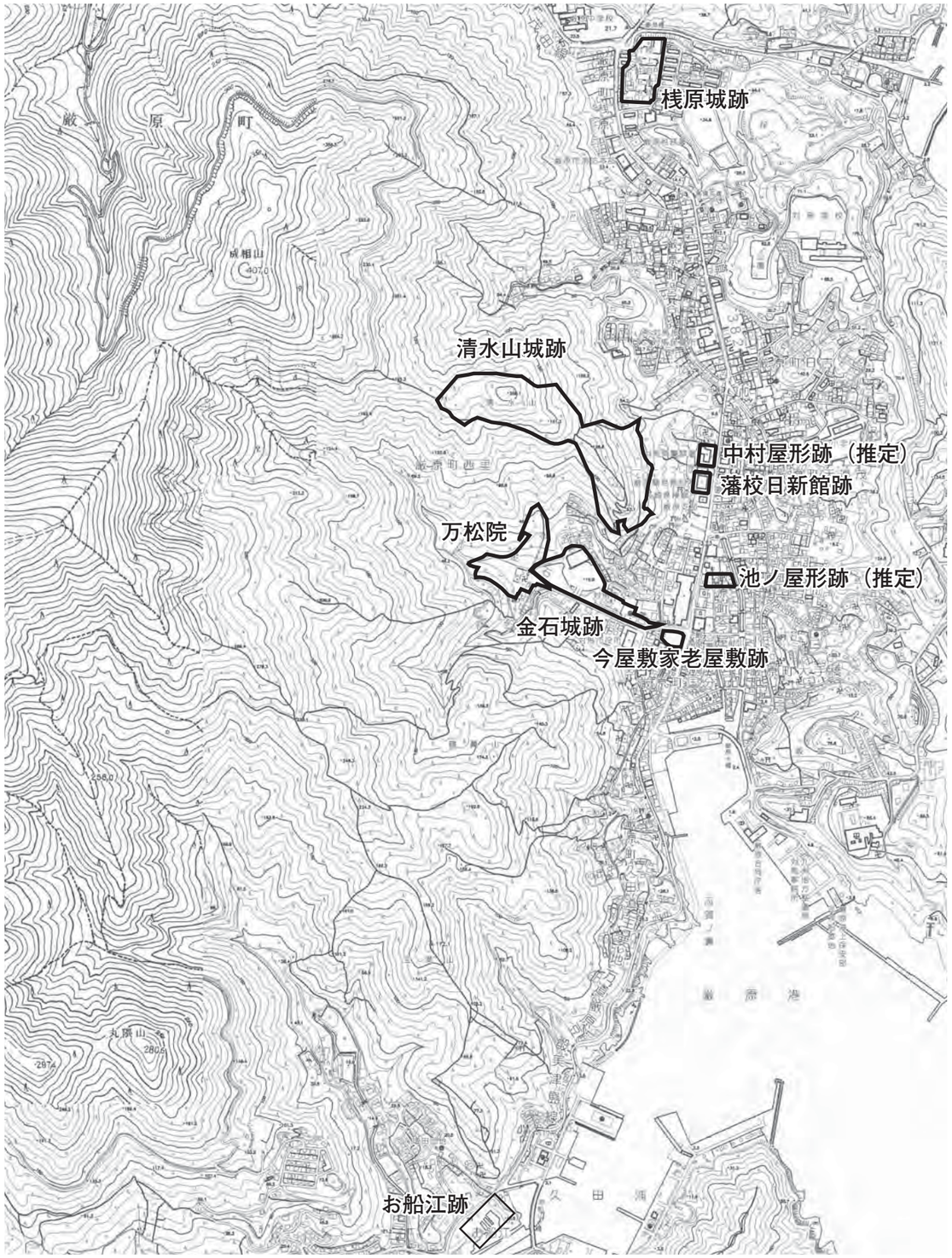


図２　周辺遺跡位置図（１/10,000）

第２節　調査体制

本報告書の作成について、以下の体制で実施した。

なお、整理作業について平成25年度は、緊急雇用創出事業臨時特例基金事業を活用して実施した。

【調査主体者】　対馬市教育委員会

【調査責任者】　対馬市教育委員会　教育長　梅野　正博

【事務局】

平成24年度～25年度（発掘調査作業）

教育委員会文化財課

課長	梅野　菊次（平成24年度）
	平江　俊哉（平成24年度～25年度）
参事兼係長	阿比留　伴次（平成24年度）
副参事兼係長	田中　淳也
	尾上　博一（設計担当）
主事	村瀬　達郎（現場担当）

【発掘調査支援業務受託者】

株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店

支店長	山口　勝也
現場代理人	大坪　正典
調査員	提　浩一朗
	立神　勇志

平成25年度～27年度（整理作業、報告書刊行作業）

教育委員会文化財課

課長	平江　俊哉（平成25年度）
	小島　克喜（平成26年度～27年度）
副参事兼係長	田口　憲一（平成27年度）
	田中　淳也
	尾上　博一（監修）
主事	村瀬　達郎（編集）
整理員	大浦　千鶴（平成25年度　緊急雇用創出事業臨時特例基金事業にて雇用）
	小松　友子（平成25年度　緊急雇用創出事業臨時特例基金事業にて雇用）
	江口　千夏（平成25年度　緊急雇用創出事業臨時特例基金事業にて雇用）
	竹中喜久子
	浦瀬　千鶴

第３節　調査の方法と経過

まず、調査区北東部から重機による表土の除去作業を開始し、その後、作業員の手作業による清掃を実施した。次に、調査地区内に一辺10m の方眼を設定し、基準点として木杭を設置した。基準点から南北軸にアラビア数字を割り振り、東西軸にアルファベットを割り振り、その組み合わせでグリッドの位置を表示した。

重機による掘削は表土のみとし、以下はツルハシ・ねじり鎌を用いた人力掘削を順次上面から実施して掘り下げていった。なお、排土の除去及び運搬については、重機を用いて行った。

土層の堆積状況を確認するために、調査区北側のＢ４グリッドからＤ４グリッドにかけて東西方向に土層確認用ベルトを残して掘削を行った。なお、土層確認は、このベルトの他に調査区東端壁面でも行った。

写真撮影については、遺構検出時及び完掘時、遺物の出土状況ならびに土層断面の観察時に行った。また、調査前及び１面目整地層完掘時、２面目整地層完掘時、５層完掘時の計４回にわたり、ラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。

調査に際しての測量及び写真の撮影、並びに図面の作製については、発掘調査支援業務受託者の株式会社埋蔵文化財サポートシステム長崎支店が担当した。また、遺物の取り上げ、ラベルの作成についても同じく同社職員が現場で実施したが、遺物の洗浄、ナンバリング、接合等の整理作業については、対馬市教育委員会文化財課が行った。

第２章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

第１項　位　　置

対馬島は、九州島と朝鮮半島との間に位置し、南北約82km、東西約18kmの南北に細長い形状をしている。北端の上対馬町鰐浦地区から韓国釜山までは最短距離で49.5km、南端の厳原町豆酘地区から福岡までは最短距離で132kmの位置にある。緯度は北緯34度42分～５分の間にあり、経度は東経129度30分～10分の間にある。島の西側は朝鮮海峡に面し、東側は対馬海峡に面しており、中央には西側から大きく湾入したリアス式海岸が特徴の浅茅湾がある。

平成16年３月１日に上対馬町、上県町、峰町、豊玉町、美津島町、厳原町（北から南へ列挙）の６町が合併し、１島１市となった。今回の調査地点、今屋敷家老屋敷跡は対馬市厳原町今屋敷地区にある。その厳原町は６町では最も南側に位置している。今屋敷地区を対馬全体での位置で捉えた場合、南北では南側約３分の１の位置にあり、東西ではほぼ東端に位置している。

今屋敷地区は、厳原市街地西部にそびえる清水山と国府嶽に挟まれた谷部の出口に位置している。東は厳原市街地を北から南に向かって流れる厳原本川を隔てて田渕地区及び大手橋地区と相対し、西北は清水山の麓で西里地区と相対し、西南は清水山麓から流れて厳原港に注ぐ金石川を隔てて国分地区と相対し、北は厳原八幡宮の前で中村地区と相対し、南は厳原本川、金石川の両川口の間で港に臨んでいる。

今屋敷家老屋敷跡は、国分地区との地区境となっている金石川沿いにあり、桜橋から江尻橋にかけての範囲に位置している。遺跡地東側には、厳原城下町のメインストリートであった馬場筋通りが南北に縦貫している。西側には対馬藩主宗家の居城・政庁であった金石城があり、古川家の屋敷地は家臣の屋敷としては最も金石城に近い場所に位置していた。

図３　今屋敷家老屋敷跡位置図②（縮尺任意）

第２項　地　　形

対馬市は、大小100を超える島々から構成されているが、有人なのは主島の対馬島のほかに、泊島、赤島、沖ノ島、島山島、海栗島の計６島のみである。全島を合わせた面積は、約709㎢で、その規模は本州、北海道、九州、四国を除いた日本の島としては６番目に大きな島である。

対馬島は、元々一つの大きな島であったが、寛文12年（1672）に対馬藩３代藩主宗義真（宗氏21代）によって大船越瀬戸が掘り切られ、次いで明治33年（1900）に日本海軍により万関瀬戸が掘り切られたため、南北３島に分断されたが、現在は橋梁で繋がっている。

島の中央部に西から大きく湾入している浅茅湾は、谷が沈降して形成されたリアス式海岸の特徴を表す島内随一の景勝地である。この浅茅湾以外にも舟志湾、仁田湾、三根湾などにリアス式海岸が形成されており、これらの入り組んだ海岸線の影響で、対馬の海岸線延長は915km にも及び、日本一の長さとなっている。

山地は、南部と北部に急峻な山地が分布し、中央の浅茅湾周辺にやや低い丘陵地帯が分布している。南部には、対馬最高峰の矢立山（標高648.5m）や、国指定天然記念物の原始林が分布する龍良山（標高558.5m）、同じく国指定天然記念物の原始林が分布し石英斑岩の岩肌が山頂に露出しているのが特徴の白嶽（標高519m）などの標高300m から500m ほどの山地が分布している。

北部には、国指定天然記念物の鳥類繁殖地が分布する御嶽（標高490m）を筆頭に、標高300m ほどの山地が所在している。中央浅茅湾の沿岸には、特別史跡金田城跡が所在する城山（標高276m）などの標高100m から200m ほどの山地、丘陵地帯が分布している。

分水嶺は、島全体として東側に寄っており、流域面積・流路距離などが発達している長流は西側に多く見られる。今屋敷地区がある厳原市街地には、市街地北部の上見坂を源流とする知首川と有明山系を源流とする砥石淵川が合流した厳原本川が南北に流れ、さらに有明山麓の金石と呼ばれる谷部を源流とする金石川の２つの川が流れている。調査地点の今屋敷地区は、この厳原本川と金石川に挟まれた位置に所在している。

第２節　歴史的環境

第１項　対　　馬

現在対馬市内で確認されている最も古い時代の遺跡は、上県町越高の越高遺跡で、縄文時代早期末頃に比定されている。この遺跡からは、西北九州で制作された縄文土器や松浦地方で産出した黒曜石が出土し、それと同時に朝鮮半島で制作された櫛目文土器が出土している。これは、当時の対馬に住む人々が対馬海峡や朝鮮海峡を越えた範囲で活動していたことを示している。この特徴は同じ縄文時代の遺跡である上県町志多留の志多留貝塚、峰町佐賀の佐賀貝塚、豊玉町廻のヌカシ遺跡などでも見ることができる。

さらに、弥生時代の遺跡である上対馬町古里の塔の首遺跡、峰町三根の井出遺跡、豊玉町佐保のシゲノダン遺跡、美津島町久須保のかがり松鼻遺跡などからも西北九州で制作された弥生土器や青銅器と同時に、朝鮮半島で制作された土器や船載青銅器が発見されている。このような海峡を越えての交易活動を行う対馬の人々の様子を的確に記したのが、『魏志』倭人伝にみられる「土地は山険しく、深林多く、道路は禽鹿の径の如し。千余戸有るも、良田なく、海物を食して自活し、船に乗りて南北に市糴す。」という記述である。

『魏志』倭人伝に記述のある対馬の国邑がどこにあったかはまだ分かっていないが、遺跡の分布や出土遺物等の分析から、有力勢力がいた地域を時代ごとの変遷で推察すると、弥生時代中期～後期前半にかけては三根湾沿岸に、後期後半～終末期にかけては浅茅湾北岸の仁位周辺に、終末期～古墳時代にかけては浅茅湾南岸の雞知周辺にそれぞれ有力勢力がいたと推定することができる。

この内、雞知周辺には島内唯一の前方後円墳をもつ根曽古墳群や前方後方墳をもつ出居塚古墳などの畿内型古墳が集中しており、さらに天智天皇６年（667）には雞知に近い黒瀬に国防のために金田城が築かれるなど、雞知近辺に大和朝廷との強い繋がりをもつ豪族がいたことを伺うことができる。

『日本書紀』の天智天皇10年（671）11月条には「対馬国司、使を大宰府に遣わして言す」という記述があり、また天武天皇３年（674）３月条にも「対馬国司忍海造大国に言す。銀、初めて当国に出づと。即ち貢上る」との記述が見られる。金田城の築造時期との関係から推察すると、これらの記述に見られる国司は雞知周辺に居たものと思われるが、この後外襲の危険性が低下すると、国司は大宰府との往来に適した厳原町国分に移ったと見られている。

また、当初は国防の重要性から直接対馬へ赴任する者が多かったが、外襲の危険性が低下するにつれ、直接任国に赴任しない遙任国司が増加したとされている。その間に台頭したのが、在庁官人の阿比留氏で、国衙の官人と神職を兼ねて、島内各地に繁衍していった。

鎌倉時代に入ると、阿比留氏に替わり、大宰少弐の武藤氏との主従関係を背景に対馬地頭代となった宗氏が支配権を握るようになった。当初、宗氏の当主は筑前で活動しており、対馬には一族の中村宗香（宗宗香）を地頭代代官として派遣していた。この宗香は豊玉町仁位に館を築き支配を行ったと考えられている。

応永15年（1408）には、宗氏７代当主の宗貞茂が活動拠点を筑前から対馬に移し、峰町佐賀に屋形を築き、支配を行った。貞茂以後、８代貞盛、９代成職と３代にわたり佐賀屋形を中心に対馬支配を行ったが、10代貞国は襲封後、屋形を厳原町中村に移している。

第２項　厳原城下町

応仁元年（1467）に襲封した宗氏10代当主の宗貞国は、それまでの佐賀屋形に代わり新たに中村屋形（厳原町中村地区）を築き、ここを中心に支配を行う体制を構築した。貞国の襲封後、いつ頃に屋形の移転が行われたかについてははっきりしていないが、襲封から４年後の文明３年（1471）に成立した『海東諸国記』には、貞国居住地について「古于浦(＝国府浦)」と記されていることから、文明３年よりも早い時期には既に中村屋形が成立し、移転していたと推定される。なお、文明３年時点での古于浦（国府）の戸数について『海東諸国記』では、100余戸と記している。『海東諸国記』成立から５年後の文明８年（1476）に来島した朝鮮使節金自貞が記した使行録では、府中（国府）の戸数が250余戸と記しており、中村屋形を中心に城下町の整備が行われ、人口が急増している様子を知ることができる。

また、金自貞の使行録には中村屋形の様子も記されており、それによると「当主の屋形は、政務を執り行う前庁と、居住空間の後庁があり、屋敷の屋根は茅葺きで、屋敷の周囲には垣が巡らされており、垣の外側には深さ・幅ともに約３ｍの濠が巡らされている」と記録されており、堅牢な様子がうかがえる。その所在地については、現在の中村地区にある厳原八幡宮から太平寺までの間にあったと推定されている。

この中村屋形は10代貞国、11代材盛（きもり）、12代義盛（よしもり）、13代盛長（もりなが）と続いたが、大永６年（1526）に襲封した14代盛賢（もりかた）（後に将盛（まさもり）と改める）は、襲封の年に厳原本川の池地（あるいは河口の干潟）を埋め立てて、新たに「池ノ屋形」を築き、ここに移った。この池ノ屋形は、それまでの屋形である中村屋形に対して「今屋敷」と称され、これがこの地の地名の由来にもなっている。なお、池ノ屋形は落成からわずか２年の享禄元年（1528）に、宗氏一族の宗盛治が起こした反乱によって焼失している。その所在地については、現在の今屋敷地区にある池神社辺りにあったと推定されている。

反乱から逃れた当主の盛賢は、新たに清水山南麓の金石原に「金石屋形」を築き、ここに移った。金石屋形が築かれた場所は、旧嶋分寺があったと推定されている場所で、付近には宗氏10代当主貞国の頃に再興された国分寺があった場所でもあり、現在の今屋敷地区にある埋蔵文化財包蔵地金石城跡内にあったと推定されている。

盛賢は、天文元年（1532）に名を将盛と改めたが、天文８年に当主の座を叔父の晴康（はるやす）に譲り豊崎（とよさき）に隠居したとされる。当主は、15代晴康、16代義調（よししげ）、17代茂尚（しげひさ）、18代義純（よしずみ）、19代義智（よしとし）と続き、金石屋形を中心に支配が行われ、義智の時に江戸幕府が成立した。20代当主で２代藩主である義成（よしなり）の治世、寛永年間（1624～44）頃になると家臣の城下集住が進み、それまで以上に城下町の形成が進んだと考えられているが、当時の様子を描いた絵図などは残っておらず、また、万治２年(1659)、寛文元年(1661)、延宝５年（1677）と相次いで発生した大火などの影響もあり、江戸時代初期の頃までの厳原城下町の様相は分かっていない。現在の厳原市街地に繋がる町割は、寛文年間以降に形成されたものを基礎としているとされている。

明暦３年（1657）に襲封した21代当主（３代藩主）宗義真は、万治２年に阿須川を開削しそれを堀として利用した桟原城（さじきばらじょう）（桟原屋形）を築城し、この時西の浜の船着き場から桟原城まで通じる城下のメインストリートである「馬場筋通り（ばばすじどお）」も合わせて整備された。この通りの両側には対馬藩の上級家臣の屋敷が整備された。また、馬場筋通りを中心とした町割も進められ、城下町の整備形成が進んでいった。

さらに寛文９年（1669）には14代将盛以降居城として使われていた金石屋形を拡張し、櫓門などを整備して「金石城」と称するようになった。これ以後、金石城は藩主の政務所、桟原城は藩主の居城という役割分担が行われた。今回の調査地点である今屋敷家老屋敷跡は、上級家臣の屋敷が建ち並ぶ馬場筋通りに面し、かつ家臣の屋敷の中で最も金石城に近い場所に造営された屋敷でもあった。

第３章　調査の結果

第１節　基本層序

今屋敷家老屋敷跡には、平成４年に解体されるまで対馬藩家老古川家の長屋門が所在しており、門内には商店が入店して営業を行っていた。また、遺跡の北西部には葬儀社「みどりや」のビルが平成16年まで所在していた。さらに平成13年度～16年度にかけて数度の埋蔵文化財発掘調査が実施された。

これらの建造物の建設、解体並びに過去の発掘調査などの影響と考えられる攪乱が、調査区北側及び東側で多く散見された。

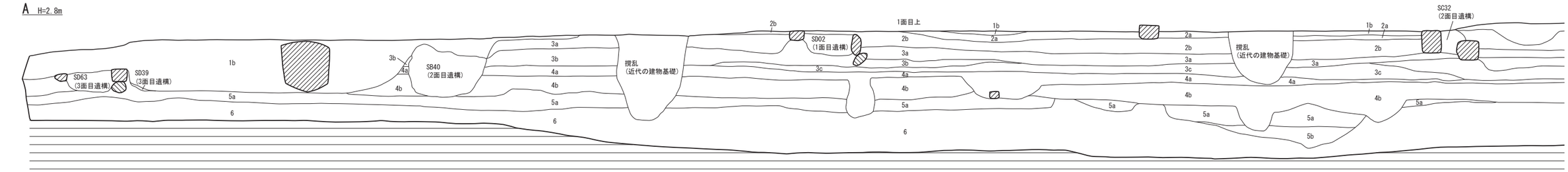
土層観察は、調査区の北側寄りに東西に横断する形で土層観察用ベルトを設定し、その南壁を対象に実施した。また、調査区の東側壁面も観察の対象とした。

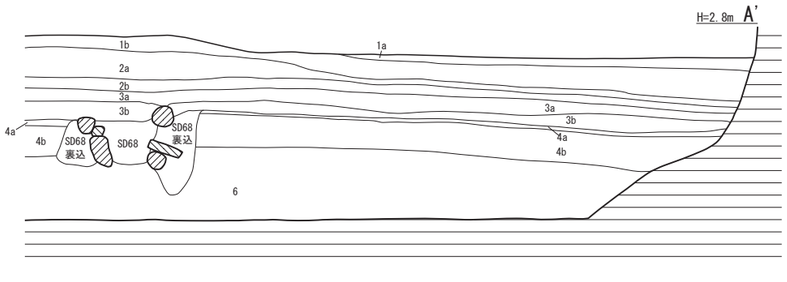
土層	年代
１a・b 層（造成土・攪乱）	近代～現代
２a 層（１面目整地層）	江戸時代後期
２b 層（造成土）	
３a 層（２面目整地層）	江戸時代前期後半
３b・c 層（造成土２）	
４a 層（３面目整地層）	中世末～江戸時代前期前半
４b 層（造成土３）	
５a 層（遺物包含層）	中世
５b 層（遺物包含層）	
６層（自然堆積層）	無遺物層

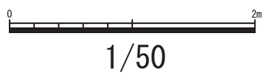
図４　基本土層模式図

土層	注記
1a層	橙色(7.5YR7/6)土。ややしまる。直径1cm～握りこぶし大の礫や瓦を多く含む。コンクリートも混入。近・現代の遺物を含む。
1b層	灰黄褐色（10YR5/2）土。しまりがある。直径1cm～握りこぶし大の礫を多く含む。炭化物をやや含む。近・現代の遺物を含む。
2a層	橙色（7.5YR6/6）土。しまりがある。比較的均質であまり礫を含まない。粘性あり。上面に直径2～4cm程の玉砂利をまばらに含む。炭化物はあまり含まない。瓦を含む。江戸時代後期の遺物を含む。
2b層	褐灰色（7.5YR4/1）土。直径2～4cm程の小円礫を含む。ややしまる。粘性は若干あり。おそらく、造成のためであろう。炭化物はあまり含まない。江戸時代後期及びそれ以前の遺物を含む。
3a層	明黄褐色（10YR6/6）土。しまりがある。比較的均質で、あまり礫を含まない。粘性あり。上面に直径2～4cm程の玉砂利（特にC－3グリッド付近に多い）が見られる。2a層よりも多い。炭化物及び赤色粒（焼土カ）を多く含む。瓦を含む。江戸時代前期の遺物を含む。
3b層	にぶい黄褐色（10YR5/4）土。ややしまる。礫は少ないものの造成土である。粘性は若干あり。炭化物をまばらに含む。江戸時代前期及びそれ以前の遺物を含む。
3c層	にぶい黄褐色（10YR5/4）土に直径1cm～握りこぶし大の円礫を多く含む。ややしまる。粘性は若干あり。炭化物多く含む。江戸時代前期及びそれ以前の遺物を含む。
4a層	橙色（5YR7/6）土に、直径5mm程の橙色土の赤味がかった土をまばらに含む。しまりがある。比較的均質であまり礫を含まない。上面に直径2～4cm程の玉砂利が目立って見られる。2a層より多い。炭化物及び赤色粒（焼土カ）をまばらに含む。中世末（16世紀後半）から江戸時代前期の遺物を含む。
4b層	褐灰色（10YR4/1）土。ややしまる。直径3cm～握りこぶし大の礫を多く含む。おそらく造成のためであろう。粘性は若干あり。炭化物が非常に多い。赤色粒（焼土カ）多く含む。中世が主体で江戸時代前期の遺物が混じる。
5a層	にぶい黄褐色（10YR5/3）粘質土。しまりが強く、均質。粘性は粘土に近い程強い。鉄分・マンガンを多く含む。中世の遺物（貿易陶磁器が目立つ）を含む。
5b層	にぶい黄橙色（10YR6/4）砂質土。砂が多く、ややしまり、均質。粘性はない。中世の遺物を含む。
6層	にぶい黄褐色（10YR5/3）砂・礫層。直径1～3cm程の小円礫（玉砂利に似ている）と直径3cm～人頭大の礫と砂により構成し、土は少ない。しまりがない。粘性はない。無遺物層である。

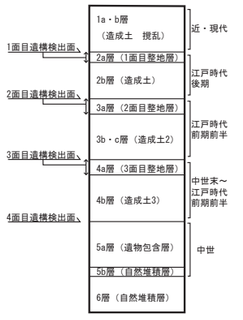
表1　土層注記表







土層観察用ベルト南壁基本土層模式図



1a層　橙色(Hue7.5YR7/6)土。ややしまる。径1cm～にぎりこぶし大の礫や瓦を多く含む。コンクリートも混入。近･現代の遺物を含む。
1b層　灰黄褐色(Hue10YR5/2)土。しまりがある。径1cm～にぎりこぶし大の礫を多く含む。炭化物をやや含む。近･現代の遺物を含む。

2a層　橙色(Hue1.5YR6/6)土。しまりがある。比較的均質であまり礫を含まない。粘性あり。2a層上面に径2～4cm程の玉砂利をまばらに含む。炭化物はあまり含まない。瓦を含む。江戸時代後期の遺物を含む。
2b層　褐灰色(Hue7.5YR4/1)土。径2～4cm程の小円礫を含む。ややしまり粘性は若干あり。おそらく造成の為であろう。炭化物はあまり含まない。江戸時代後期及びそれ以前の遺物を含む。

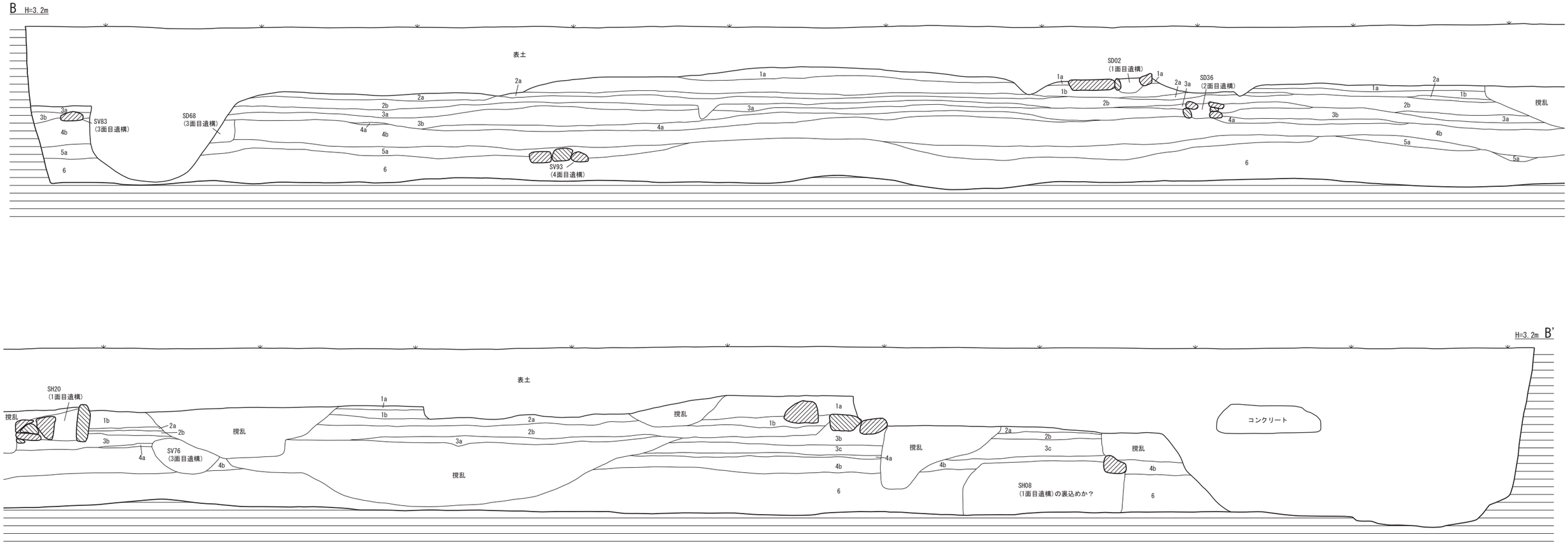
3a層　明黄褐色(Hue10YR6/6)土。しまりがある。比較的均質であまり礫を含まない。粘性あり。3aの層上面に径2～4cm程の玉砂利(特にC-3グリッドに多い)が見られる。2a層より多い。
3b層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)土。ややしまる。礫は少ないものの造成土である。粘性は若干あり。炭化物をまばらに含む。江戸時代前期及びそれ以前の遺物を含む。
3c層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)土に径1cm～にぎりこぶし大の円礫を多く含む。ややしまる。粘性は若干あり。炭化物を多く含む。江戸時代前期及びそれ以前の遺物を含む。

4a層　橙色(Hue5YR7/6)土に径5mm程の橙色(Hue2.5YR6/6)土の赤味がかった土をまばらに含む。しまりがある。比較的均質であまり礫を含まない。4a層上面に径2～4cm程の玉砂利が目立って見られる。2a層より多い。炭化物及び赤色粒(焼土？)をまばらに含む。中世末(16c後半)から江戸時代前期の遺物を含む。
4b層　褐灰色(Hue10YR4/1)土。ややしまる。径3cm～にぎりこぶし大の礫を多く含む。おそらく造成の為であろう。粘性は若干あり。炭化物が非常に多い。赤色粒(焼土？)を多く含む。中世が主体で江戸時代前期の遺物が混じる。

5a層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)粘質土。しまりが強く均質。粘性は粘土に近い程強い。鉄分・マンガンを多く含む。中世の遺物(貿易陶磁器が目立つ)を含む。
5b層　にぶい黄橙色(Hue10YR6/4)砂質土。砂が多くややしまり均質。粘性はない。無遺物層である。

6 層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/3)砂･礫層。径1～3cm程の小円礫(玉砂利に似ている)と径3cm～人頭大の礫と砂により構成しており土は含まない。しまりがない。無遺物層である。

図５　土層観察用ベルト南壁基本土層実測図



表土　灰白色(Hue2.5Y7/7)砂質土。しまりがない。主に真砂土であるが、礫を多く含む箇所もある。現代の遺物を含む。

1a層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の1a層と同じ。
1b層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の1b層と同じ。

2a層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の2a層と同じ。
2b層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の2b層と同じ。

3a層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の3a層と同じ。
3b層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の3b層と同じ。
3c層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の3c層と同じ。

4a層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の4a層と同じ。
4b層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の4b層と同じ。

5a層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の5a層と同じ。

6層　「土層観察用ベルト南壁基本土層実測図」土層注記の6層と同じ。

図6　調査区東壁基本土層実測図

第２節　遺構面別検出遺構

今回の調査では、４つの遺構面を検出し、各遺構面から合計100基の遺構を検出した。遺構は、礎石列が２基、建物跡７棟、石壁遺構10基、溝21本、井戸６基、石組遺構31基、土坑１基、石列９基、不明遺構13基を確認した。

ここでは、遺構面ごとにそれぞれの出土遺構を報告する。なお、遺構種別の表記については、「SA」などの略号を用いることとする。

第１項　江戸時代後期

今回の調査で確認された４面の遺構検出面のうち、最も新しい年代（江戸時代後期）の整地層である。この遺構面からは、建物跡３棟、溝13本、石組遺構６基、不明遺構７基の合計29基の遺構を検出した。

SB01（建物跡）

今回の調査で検出した建物跡遺構の中で最大である。規模は５間×２間（約11m×約６m）を基本とし、柱間の距離は約２m である。礎石は残存しておらず、根固め石のみが集石状に残る。根固め石の規模は約１m×約１m である。上面からの攪乱により、数箇所根固め石が欠損（欠失）している。

他遺構との切り合い関係は、SD18に切られていることから、SD18よりは古いと考えられる。隣接する SB24、SB25と共に遺跡の名称の由来となった対馬藩家老古川家の屋敷と推定される遺構である。

SD02（溝）

おおむね東西方向に直線的に走る溝である。西側で枝分かれしている（SD02c～f）。東側は近代のものと思われる土管が入れられており、攪乱されている（SD02a）。溝中央の蓋が残る部分（SD02b）は、１面目に属す江戸時代後期の遺構である。この SD02b 付近から枝分かれする溝（SD02g）は、SD02b との切り合い関係から SD02a～f の各溝よりも先行する時期のものと思われる。（ただし、SD02a～g の各溝は明確にどこからどこまでと区別することはできず、a～g の区分は説明しやすいように相対的に区分したものである）。SD02b の東端付近では、近・現代の土管が埋設されており、平瓦を用いて底を形成した部分も見られ、さらに埋土にはビニールやガラス片が混入していたことから、SD02については近・現代まで使用されていた可能性が高いと思われる。

石積みは主に２～３段を基本とするが、１段のみや４段積んでいる箇所も見られる。深さは約30cmで底面には部分的に石も見られるが、基本的には土で形成されている。石材は主に砂岩を用いているが、稀に頁岩が含まれている。遺物は陶磁器の他、ビニールやガラス片が混じっている。

SD03

東西方向にやや曲りを見せながら走る溝である。切り合い関係にある遺構は SD10、SD11、SD12と、SX15である。SD10、11と SX15とは交わる溝の状況から同時期の遺構と考えられる。SD12からは切られているため、SD03の方が古いと考えられる。

側壁に利用されていた石材は、砂岩の他に頁岩が用いられている。石積みは主に板石状の角礫を使用しており、稀に円礫を配している箇所も見られる。積み方は基本的に２段で構成しているが、礫の大きさにより１段あるいは３段の部分も見られる。遺物は陶磁器や瓦片が出土している。

SX04（不明遺構）

SX05と隣接して検出された不明遺構である。遺構内部から近・現代の陶磁器や瓦片の他、歯ブラシやカビのため時期不明の古銭が出土している。陶磁器のビンなども出土していることから、現代近くまで利用されていた可能性があり、SX05と共に（同時期に）廃棄された遺構と考える。

SX05

SX04と隣接して検出された不明遺構である。甕の内部からは、甕の上部や近・現代の陶磁器片が出土しているが、SX04よりは陶磁器片が少ない。（甕上部と共に廃棄されたものと考えられる）。

SX06

SB01の根固め石の間を切るような位置で検出した不明遺構である。甕の底部中央は欠損していた。甕内部には、上部片が入れられており、本遺構が廃棄された際に入れられたものと思われる。SB01の検出面を切っていることから、SB01より新しい時期の遺構である可能性があるが、内部から陶磁器などの遺物は検出できなかった。

SX07

本遺構は、平成15年度の確認調査時に検出されていた集石状の不明遺構である。近世後期の遺物を含むものの、周囲の１面目検出面より高い検出面から出土した。そのため、江戸時代後期に属しているとしても、SB01、SB24、SB25よりは新しい遺構と考える。

SH08（石組遺構）

Ｃ－６グリッドとＢ－６グリッドにまたがる位置から検出された石組遺構である。用途は、穴蔵もしくは井戸と思われる。中央の石積みは、本来北側に積まれていたものの積み直しと考えられる。石積みの背後には裏込めが施されていた。また、その周囲には、褐色粘土で周りを覆われている。検出面の関係から築造期（旧）は江戸時代後期以降で、（新）はそれより新しいと考えられる。

SD09

基本的に南北に直線的に走る溝である。北端は削平されており、南端も残存状況が悪いが、２段の石積みにより止められている。石積みは２段を基本とし、大きさにより１段から３段の部分がある。石材は砂岩を中心とし、ごく稀に頁岩が混じる。SX14と東側で接しているが、同時期もしくは仕切られていることから考えて、SX14より新しいと思われる。

SD10

南北方向に直線的に走り、SD03と直交する溝である。SD03とは同時期と考えられる。また、SD03と交わる部分の石組の状況や埋土、出土遺物の状況から考慮しても、やはり同時期と考えられる。底面には直径３～６cmの円礫が多く見られる。石積みは１～２段を基本とし、石材は主に砂岩を使用しているが、まばらに頁岩が混じる。遺物は陶器や古銭の他、キセルの吸口が混じっていた。

SD11

SD03の中央部分から南側へ延びる１m弱程の溝である。SD03と接する部分の石組の状況や埋土から同時期のものと考えられる。SD03に比べて１段高い構造となっていることから、SD03から溢れる水を隣接する金石川へ排水する機能を有していた可能性がある。

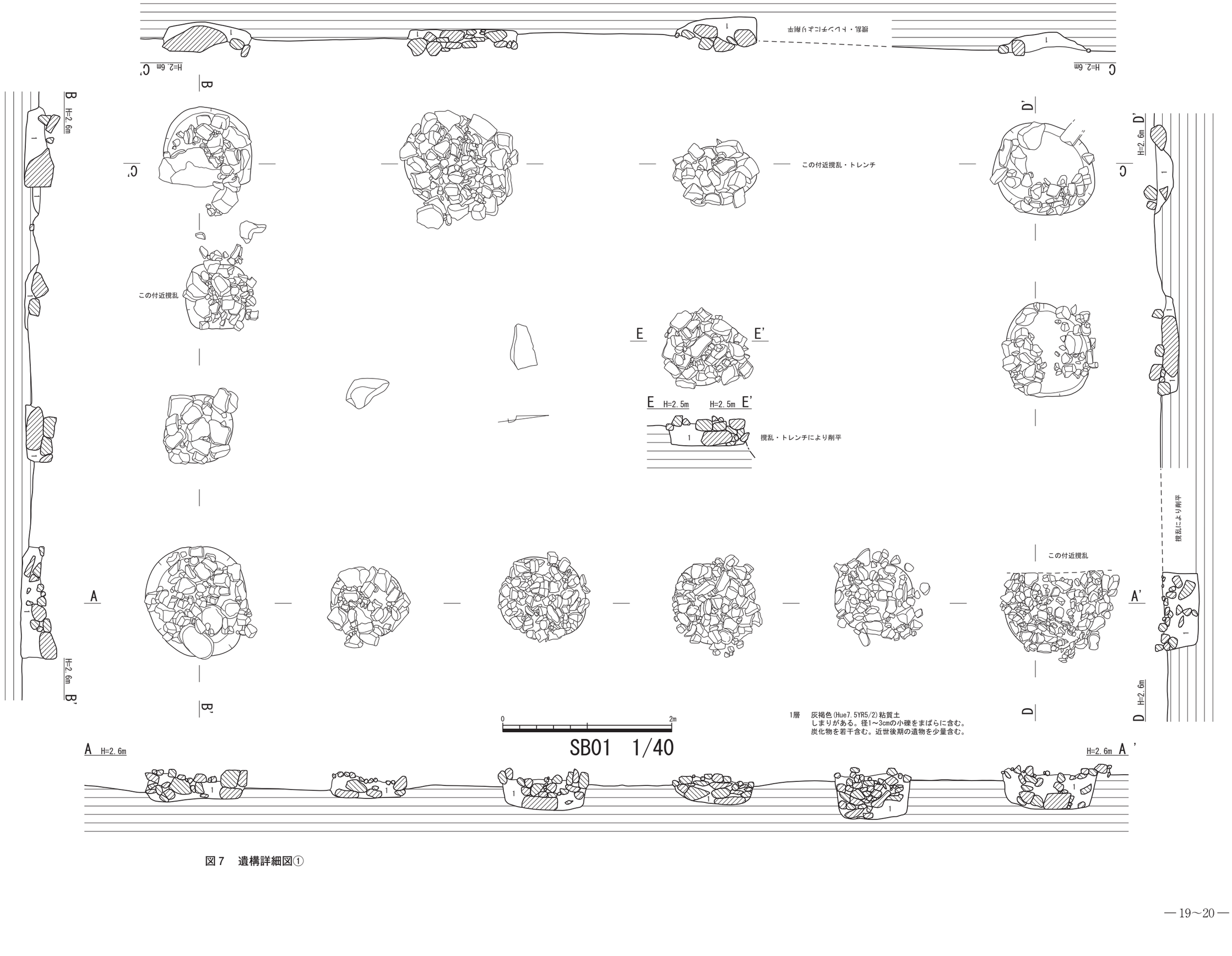
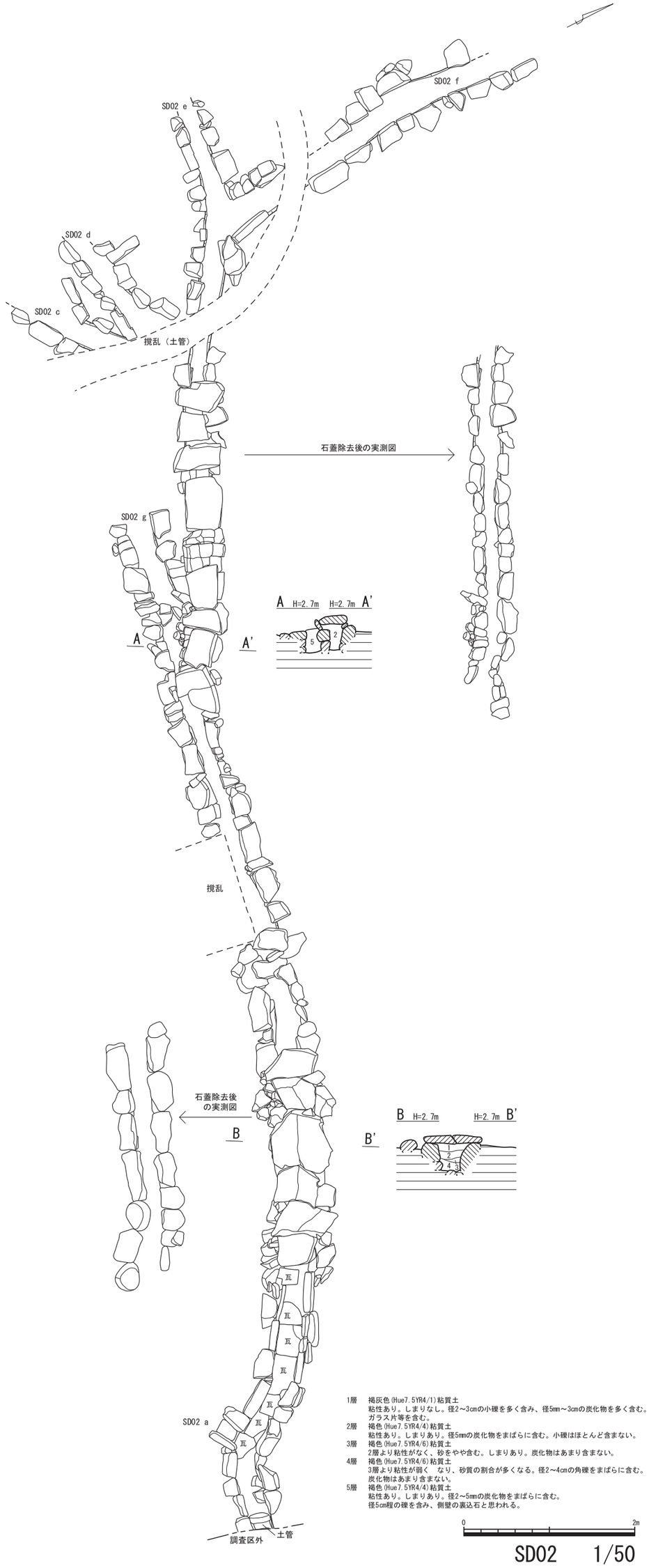

C
H=2.6m
C'
撹乱・トレンチにより削平
D
H=2.6m
D'
B
H=2.6m
B'
この付近撹乱・トレンチ
この付近撹乱
E
E'
E H=2.5m
H=2.5m E'
撹乱・トレンチにより削平
撹乱により削平
この付近撹乱
A
A'
A H=2.6m
H=2.6m A'
0
2m
SB01 1/40
1層 灰褐色(Hue7.5YR5/2)粘質土
しまりがある。径1～3cmの小礫をまばらに含む。
炭化物を若干含む。近世後期の遺物を少量含む。

図7　遺構詳細図①

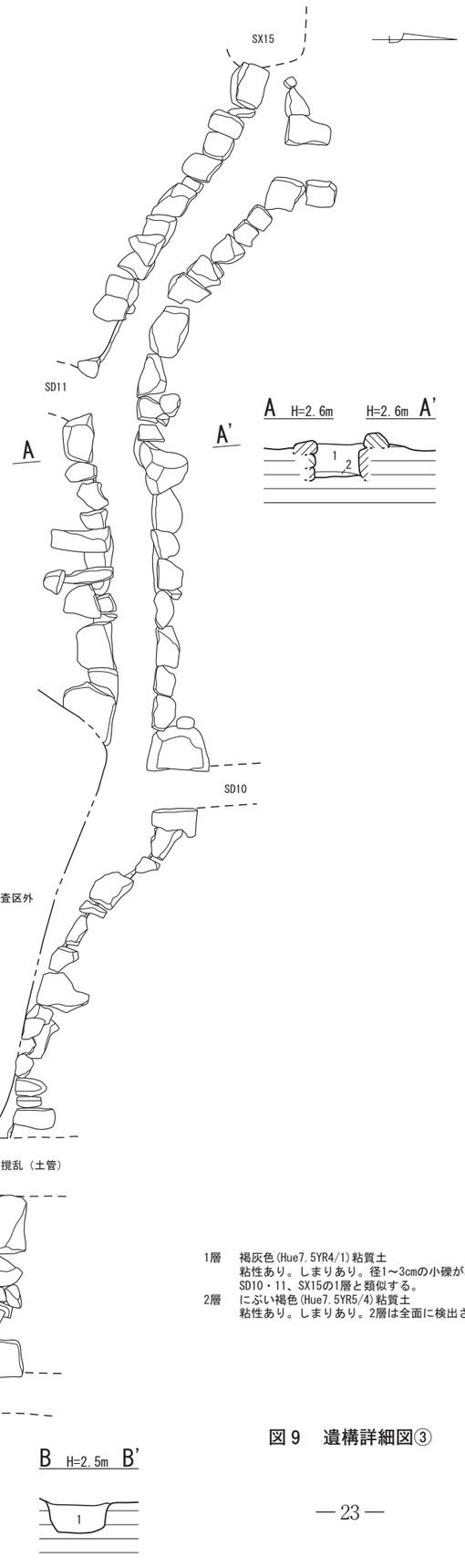
図８　遺構詳細図②



1層　褐灰色(Hue7.5YR4/1)粘質土
粘性あり。しまりなし。径2～3cmの小礫を多く含み、径5mm～3cmの炭化物を多く含む。
ガラス片等を含む。
2層　褐色(Hue7.5YR4/4)粘質土
粘性あり。しまりあり。径5mmの炭化物をまばらに含む。小礫はほとんど含まない。
3層　褐色(Hue7.5YR4/6)粘質土
2層より粘性がなく、砂をやや含む。しまりあり。炭化物はあまり含まない。
4層　褐色(Hue7.5YR4/6)粘質土
3層より粘性が弱く　なり、砂質の割合が多くなる。径2～4cmの角礫をまばらに含む。
炭化物はあまり含まない。
5層　褐色(Hue7.5YR4/4)粘質土
粘性あり。しまりあり。径2～5mmの炭化物をまばらに含む。
径5cm程の礫を含み、側壁の裏込石と思われる。

0　2m

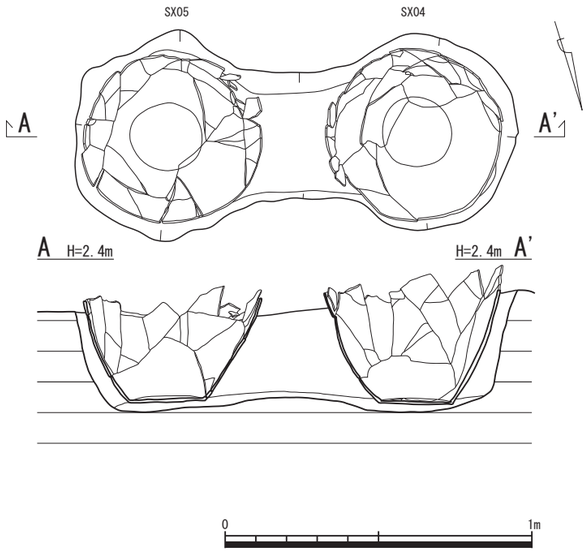
SD02　1/50



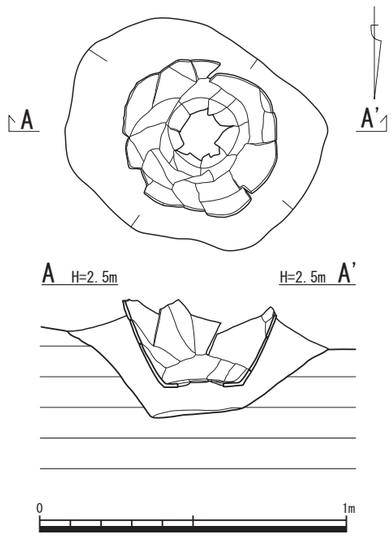
SD03　1/40

1層　褐灰色(Hue7.5YR4/1)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。径1～3cmの小礫がわずかに含まれる。
　　SD10・11、SX15の1層と類似する。
2層　にぶい褐色(Hue7.5YR5/4)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。2層は全面に検出されず部分的に堆積している。

図９　遺構詳細図③



SX04, SX05 1/20

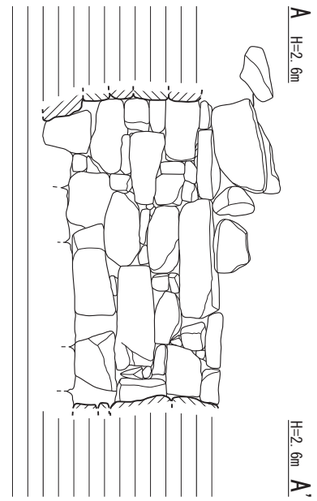


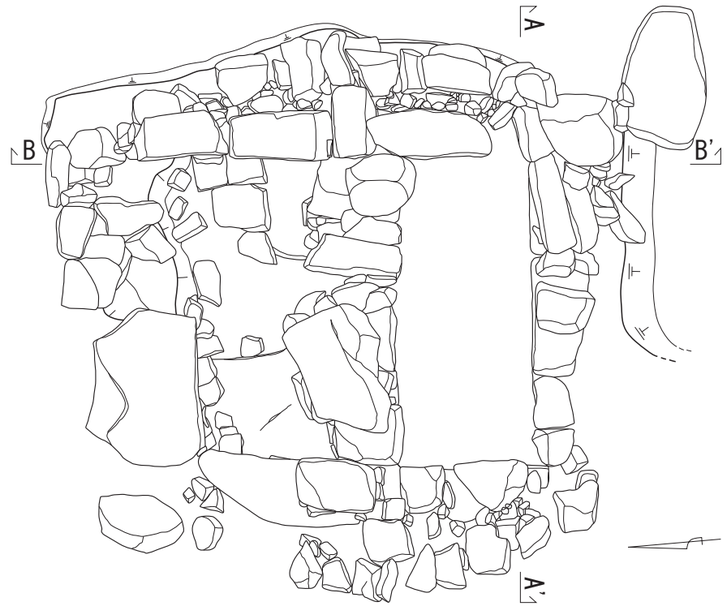
SX06 1/20

1層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。
まばらに集石状に固まり、径2～7cmの小礫をやや含む。
また、炭化物も若干含む。近世後期の遺物を含む。

SX07 1/40

図10　遺構詳細図④





SH08 1/40

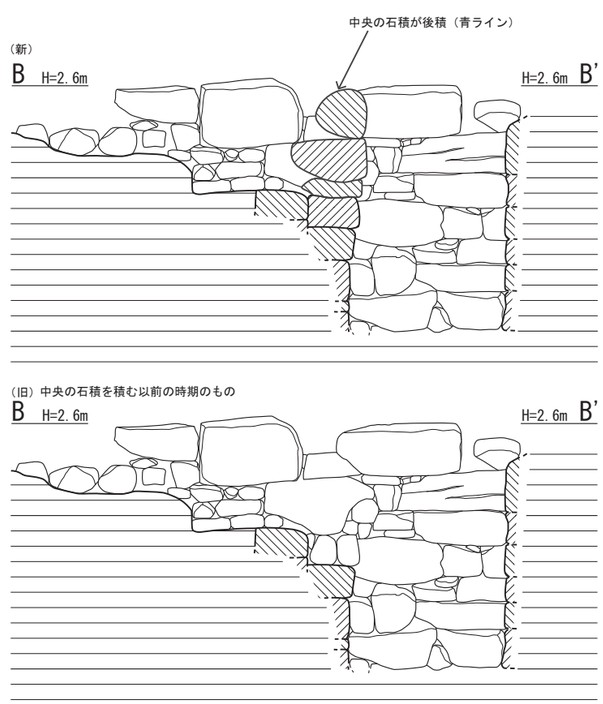


図11　遺構詳細図⑤

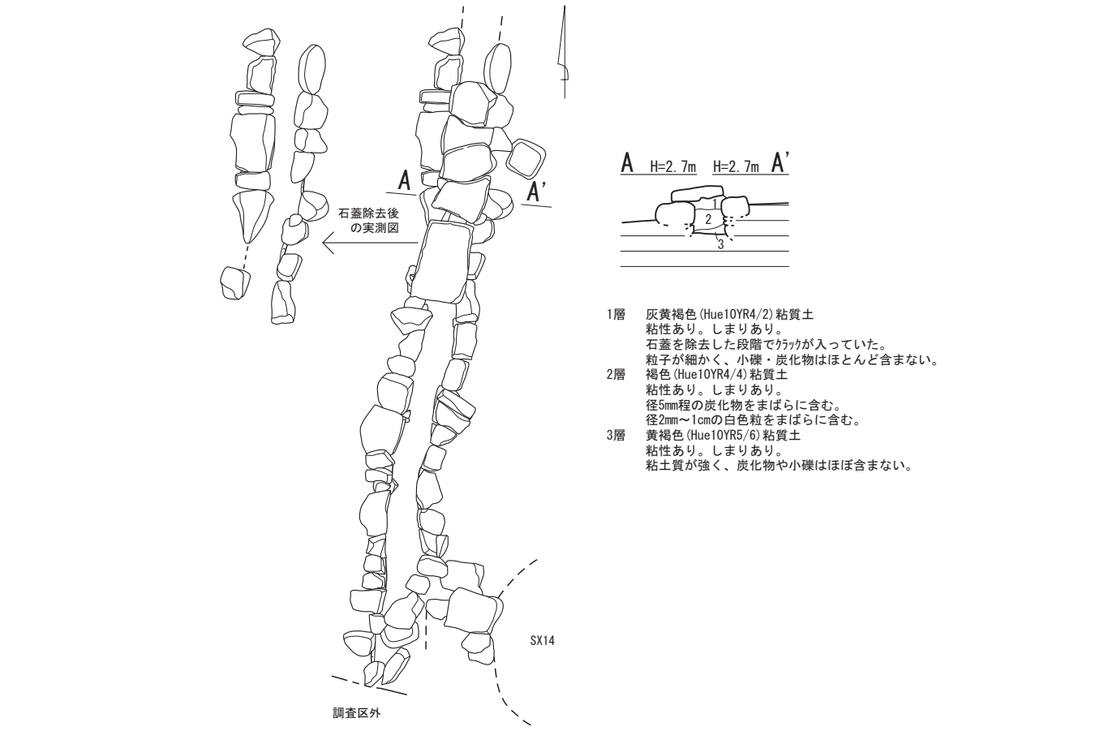


図12　遺構詳細図⑥

SD12

南北方向に直線的に走る溝である。SD03を切る関係にあることから、SD03より新しいと考えられる。北側は攪乱が著しく、さらに北側へ遺構が延びていたかどうかは確認することができなかった。石積みは北端近くは１段のみの角礫により構成しているが、金石川近くでは３～５段を積んでいて、しっかりと組まれている。石材は砂岩を中心として稀に頁岩が見られる。遺物は陶磁器が出土した。

SD13

南北方向に直線的に走る溝である。南端は段の落ちで切られている。また、北端は礫により止められている。他遺構との切り合い関係は、SD23を切っていることから、SD23よりは新しいと考えられる。また、SD22とは遺構同士が接しているが、石積みの状況や埋土の類似性から同時期の可能性がある。側壁の石積みは１～３段積まれており、石材は砂岩の角礫を中心として、一部頁岩が混じる。側壁の下部や底面には礫は見られない。遺物は陶磁器が出土した。

SX14

溜枡であった可能性が考えられる不明遺構である。東西に接するSD09とSX15とは側壁状の石積みにより仕切られているが、埋土の状況などから同時期の可能性がある。ただし、仕切られているという点で考えると、SX14は役割を終えているということになり、SX14の方が古いという可能性もある。北側部分の石積みは基本的に２段である。石材は主に砂岩が利用されているが、北東部分には板石状の頁岩が利用されている。遺物は陶磁器のほか、近・現代のものと思われる陶磁器、ガラス片が底面付近まで含まれていた。

SX15

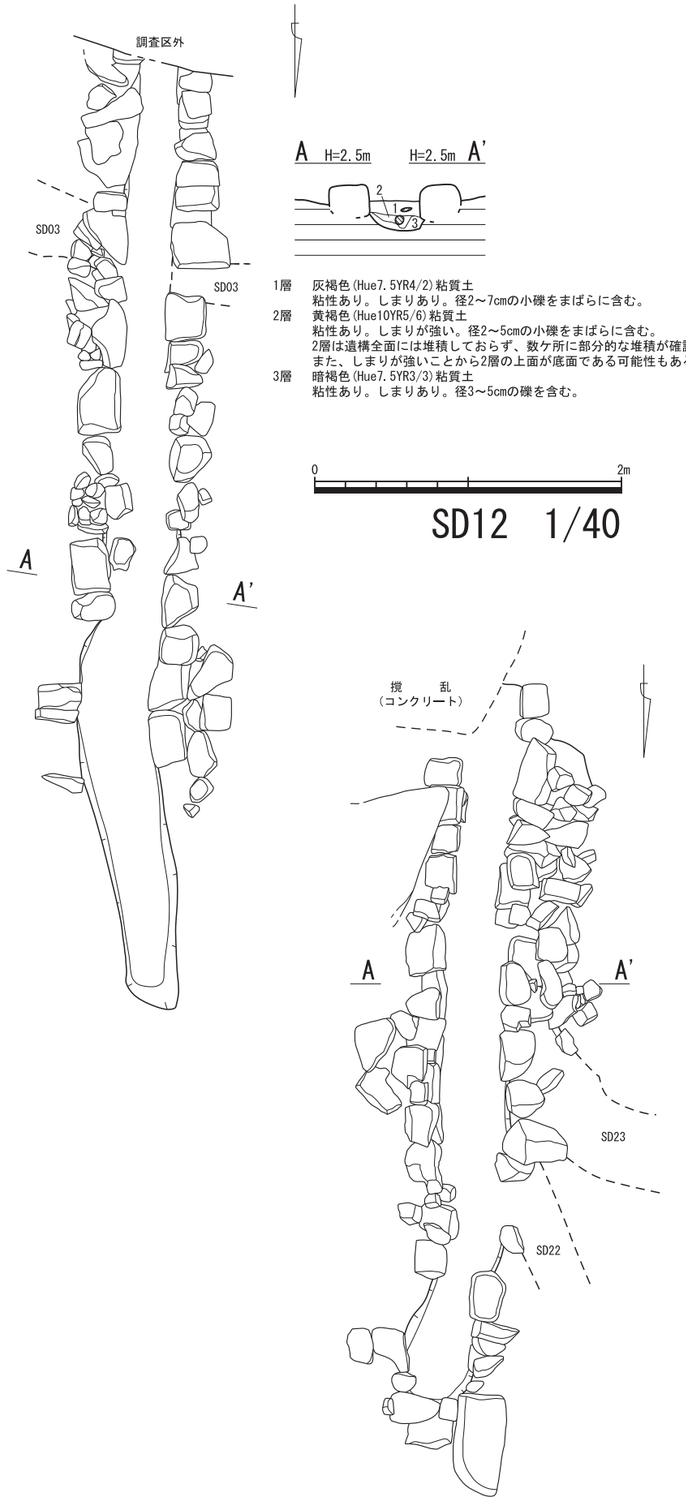
西側に接するSX14と同時期、もしくは新しいと考えられる不明遺構である。東側に接するSD03とは、接する部分の状況や埋土の類似性から同時期と考える。南側の側壁状の石積みは２～４段で、砂岩を用いている。

SH16

C－６グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。切り合い関係にあるSD03を切っていることから、SD03より新しいと考えられる。石積みは根石から数えて13段積みで、積み方は粗い。特に東側上部の積み方が粗く、積み直した可能性もある。砂岩の角礫を中心として、厚さ６～８cm程の板石が使用されている部分や稀に頁岩の円礫も使用されている。西側最下部の根石には大型の円礫が用いられている。遺物は陶磁器、古銭が出土した。

SX17

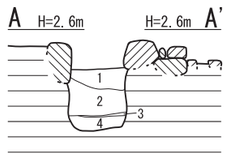
SD02近くで検出した不明遺構である。検出面もSD02とほぼ同じレベルであった。検出面下部10cm程は造成土と思われる褐色（Hue7.5YR4/6）粘質土で、礫や瓦片がまばらに入る。検出面から10cm程の深さに底面と思われる瓦片や直径２～５cm程の小礫を敷き詰めた面を検出した。この面より下部には瓦片や小礫が詰め込まれていたが、陶磁器類は混入していなかった。底面下部の埋土は赤褐色粘質土で、造成土と土質が類似していた。



1層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。径2～7cmの小礫をまばらに含む。
2層　黄褐色(Hue10YR5/6)粘質土
粘性あり。しまりが強い。径2～5cmの小礫をまばらに含む。
2層は遺構全面には堆積しておらず、数ケ所に部分的な堆積が確認される。
また、しまりが強いことから2層の上面が底面である可能性もある。
3層　暗褐色(Hue7.5YR3/3)粘質土
粘性あり。しまりあり。径3～5cmの礫を含む。

0　2m

SD12　1/40

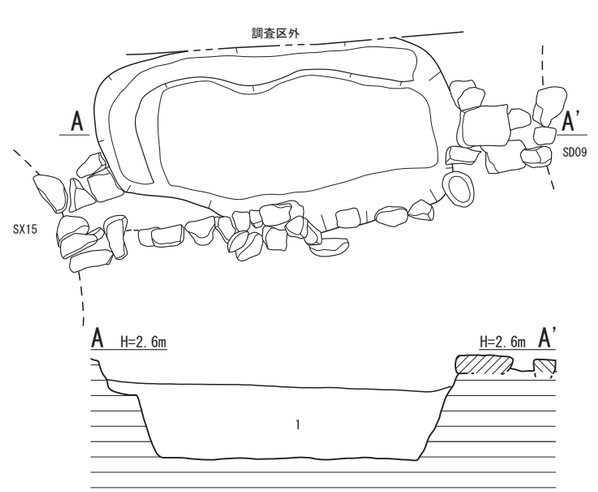


1層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)土
粘性ほぼなし。しまりあり。径2～5cmの礫をまばらに含む撹乱である。
2層　灰褐色(Hue7.5YR4/1)粘質土
粘性あり。しまりあり。径3～6cm程の礫を含む。
SD03・22の1層と対応する。
3層　黄褐色(Hue2.5YR5/6)粘質土
粘性あり。しまりあり。部分的な堆積であり全面には見られない。
4層　黒褐色(Hue10YR3/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。径1～4cmの小礫をまばらに含む。

0　2m

SD13　1/40

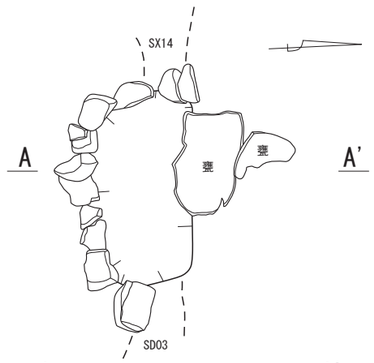
図13　遺構詳細図⑦

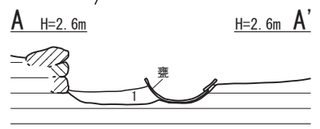


1層　灰黄褐色(Hue10YR4/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。
径2～4cm程の礫をまばらに含む。
径1～3cm程の炭化物をまばらに含む。

0　2m

SX14　1/40

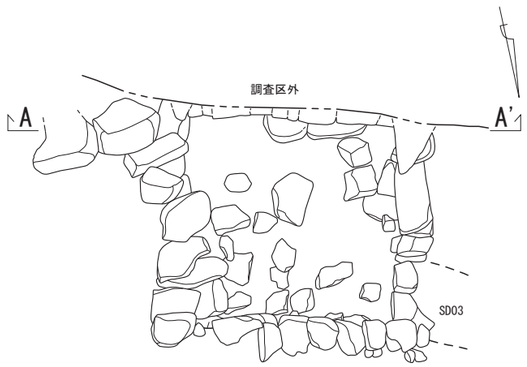


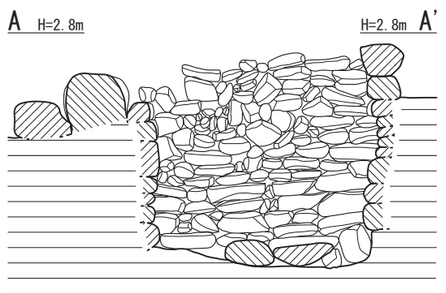


1層　褐灰色(Hue7.5YR4/1)粘質土
粘性あり。しまりあり。
炭化物(径2cm程)が部分的に見られる。
SD03・10・11の1層と類似する。

0　2m

SX15　1/40





0　2m

SH16　1/40

図14　遺構詳細図⑧

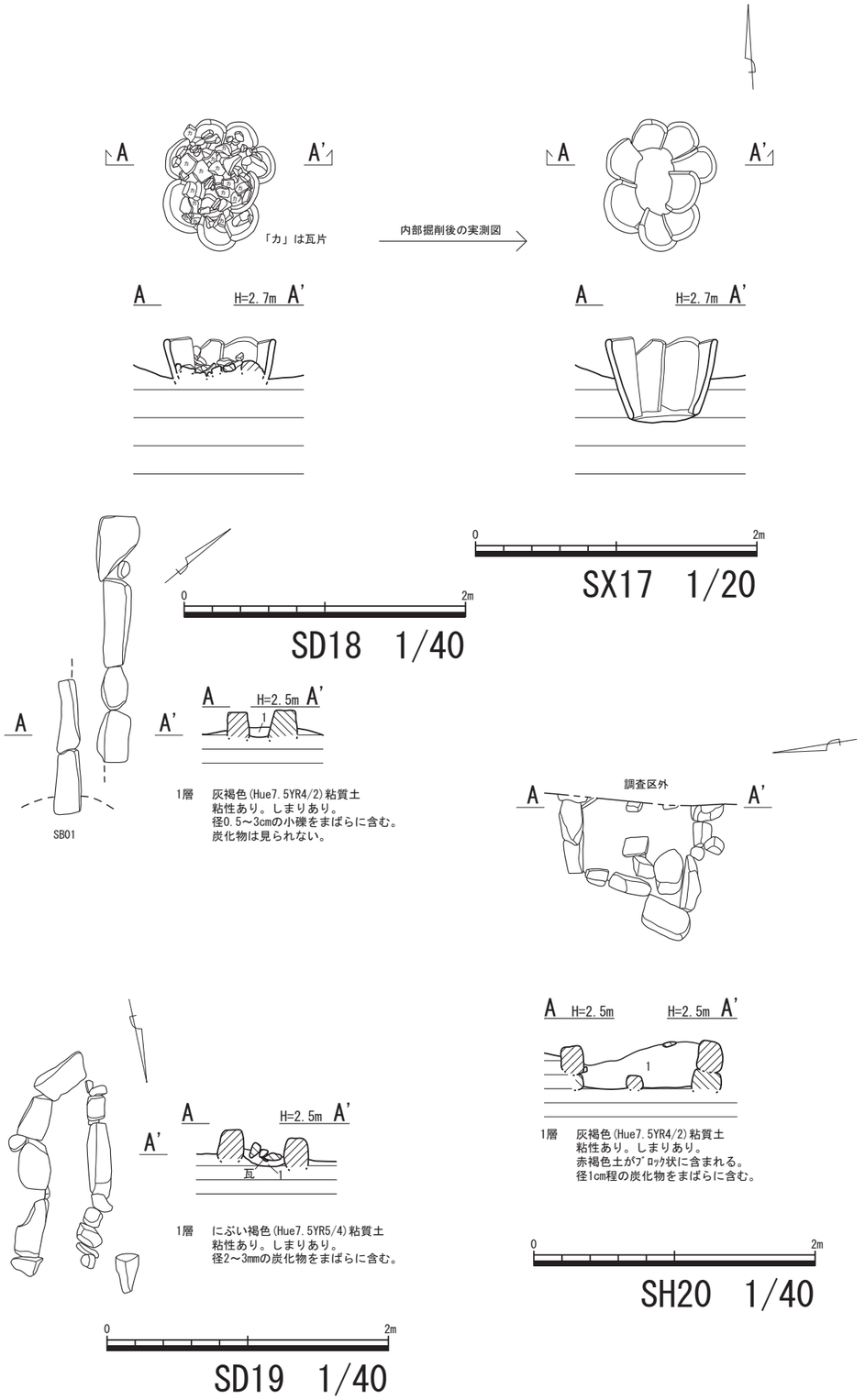


図15　遺構詳細図⑨

SD18

北西方向から南東方向に走る溝だが、残存状況が悪い。SB01を切ることから、SB01より新しいと考えられる。石積みは板状の角礫１段のみで構成している。石材は主に砂岩が利用されており、頁岩は１点のみである。遺物は陶磁器が数点出土した。

SD19

ほぼ南北に走る溝であるが、残存状況が悪い。溝内の上面には直径10cm～20cm 程の礫が多く確認され、底面近くになると礫はあまり見られなくなった。側壁の石積みは基本的に１段であるが、部分的に２段残っている箇所もある。石材は砂岩を中心とし、頁岩が混じる。遺物は平瓦が出土した。

SH20

Ｂ－５グリッドで検出した方形を呈する石組遺構で、東側は調査区外へ延びている。石積みは１～２段で積まれていて、積み方は粗い。石材は砂岩を中心とし、稀に頁岩が混じる。遺物は江戸時代後期から近・現代のものを検出した。これら近・現代の遺物は後世に攪乱されたものが混入したものと考えられる。

SD21

ほぼ東西方向に走る溝である。遺構の東西端は攪乱により削平、欠損している。SD22と接しており、側壁の一部を共有している。SD21はSD22より浅く、埋土にも違いが見られる。側壁の石積みは基本的に１段であるが、礫の大きさにより２段の部分も見られる。側壁の石材は砂岩を中心とし、稀に頁岩が混じる。遺物は陶磁器が出土した。

SD22

北西から南東方向に走る溝である。西端付近ではSD21と側壁を共有している。また、SD03とは接する箇所の石積みの具合や埋土の類似性から、同時期の遺構である可能性がある。中央は攪乱により欠損しており、西端もまた欠損している。石積みは基本的に２～３段である。石材は砂岩を中心とし、稀に頁岩が混じる。遺物は陶磁器や瓦が出土した。

SD23

ほぼ東西方向に走る溝である。西端は後世に削平され、中央部分も攪乱されている。東端でSD13に切られていることから、SD13より古いと考える。基本的に側壁は１段積みであるが、部分的に２段積みの箇所も見られる。石材は主に砂岩を用いているが、まばらに頁岩が含まれる。

SB24

１面目で検出した建物跡では、SB01に次ぐ規模の建物跡である。規模は、５間×推定２間（約10.4ｍ×約4.8m）で、柱間は約１～２ｍである。礎石は残存しておらず、根固め石のみ集石状に残る。大半が上面を攪乱されているが、いくつか残存状況が良好なものが残っており、その規模は約１ｍ×約１ｍである。SB01及びSB25と共に対馬藩家老古川家の屋敷を構成していた建物の一つと考える。

SB25

１面目で検出した建物跡では最も小さいものである。規模は２間×１間（約５ｍ×約３ｍ）で、柱間は約２ｍである。礎石は残存しておらず、根固め石のみ集石状に残る。大半が上面を攪乱されているが、１つのみ残存状況が良く、その規模は約１ｍ×約１ｍである。

なお、遺構は新しい建物の礎石に切られている。SB01、SB24と共に対馬藩家老古川家の屋敷を構成していた建物の一つと考える。

SH26

Ｄ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。石積みは根石から数えて６段積んでおり、形は扁平なものが多い。遺構の性格は不明である。

SH27

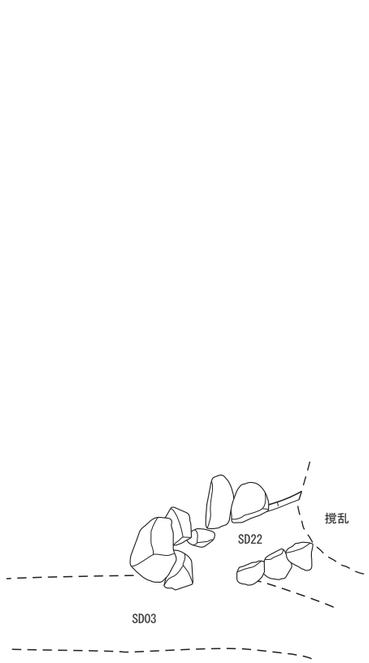
Ｄ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。石積みはおよそ直径10cm 程の礫を粗く積み、根石から数えて３～８段積んでいる。遺構の性格は不明である。

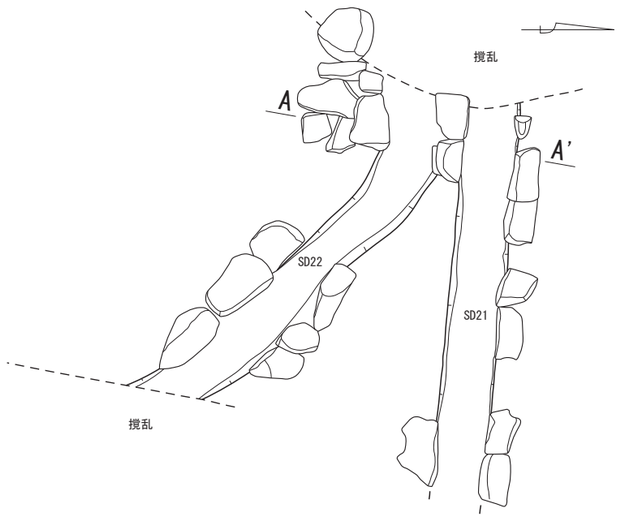
SH28

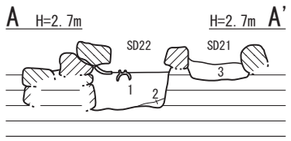
Ｅ－５グリッドで検出した長方形を組み合わせたような石組遺構である。石積みは根石から数えて１～３段を積んでおり、扁平な石が多い。中央に石積みを行い、区画しているため長方形を組み合わせたような形状をしている。SH28は他の石組遺構に比べて深さが浅いのが特徴である。遺構の性格は不明である。

SD29

東西方向に数石のみ確認できた溝である。石積みは１～２段であり、石材は砂岩を中心とし、稀に頁岩が混じる。遺物は陶磁器が出土した。



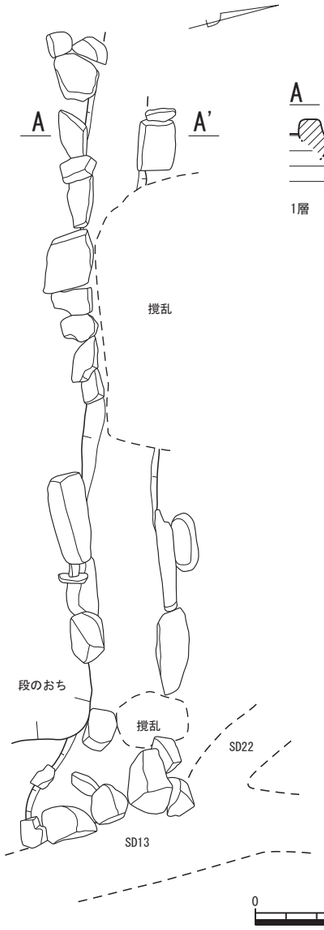


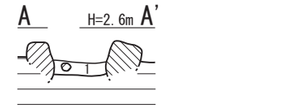


1層　灰褐色(Hue7.5YR4/1)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。
　　径1cm程の炭化物をまばらに含む。小礫はあまり含まない。
　　SD03の1層、SD13の2層と対応する。
2層　にぶい褐色(Hue7.5YR5/3)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。
　　小礫・炭化物は含まない。
3層　灰褐色(Hue7.5YR4/1)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。
　　径2～3cmの小礫を多く含み、径1cm程の炭化物をまばらに含む。

0　2m

SD21・22　1/40





1層　にぶい黄褐色(Hue10YR5/4)粘質土
　　粘性あり。しまりあり。
　　径2～3mmの炭化物をまばらに含む。

0　2m

SD23　1/40

図16　遺構詳細図⑩

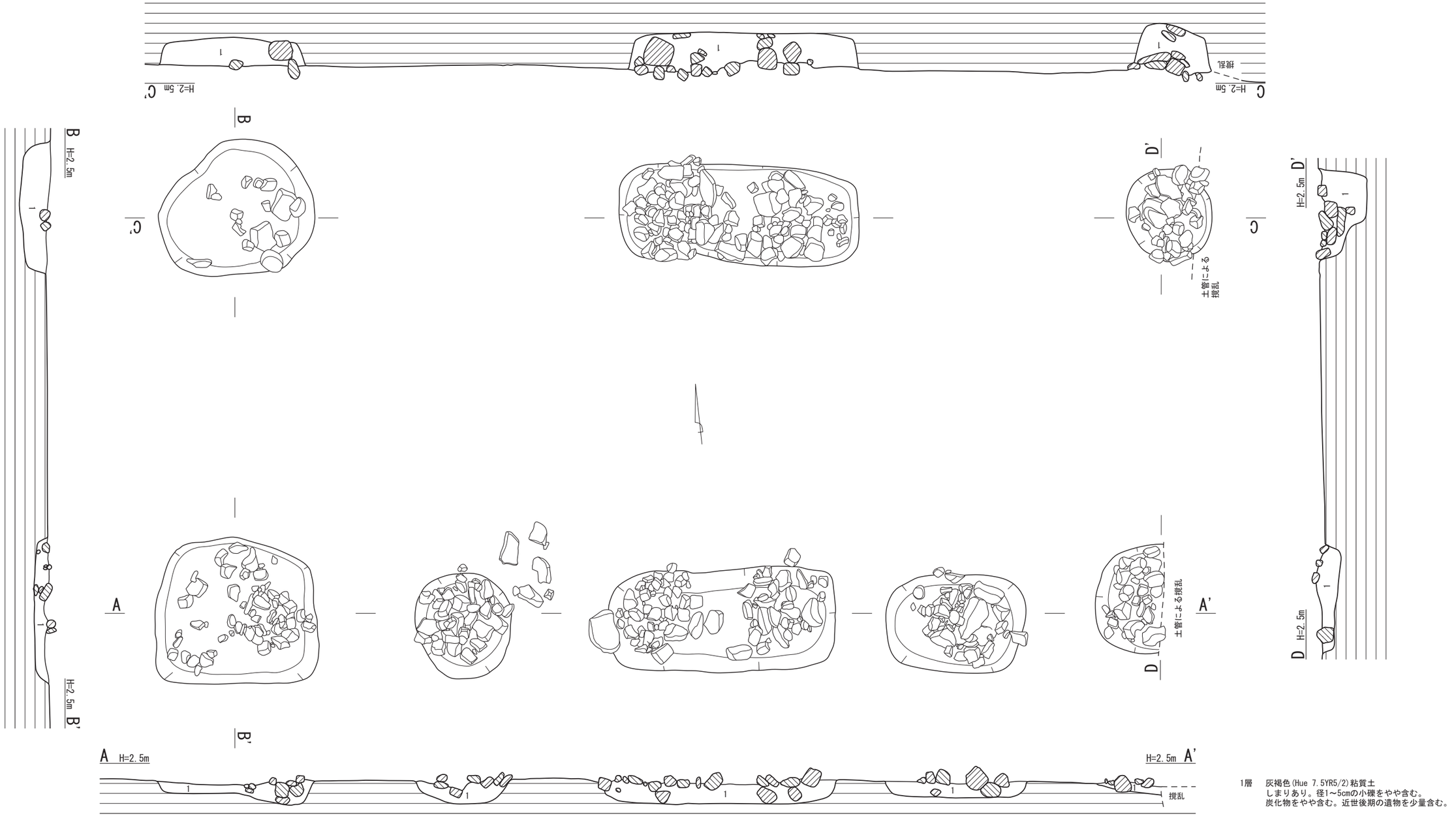

C
H=2.5m
C'
撹乱
D
D'
H=2.5m
土管による撹乱
B
B'
H=2.5m
A
A'
H=2.5m
土管による撹乱
1
1層　灰褐色(Hue 7.5YR5/2)粘質土
しまりあり。径1～5cmの小礫をやや含む。
炭化物をやや含む。近世後期の遺物を少量含む。
0
2m
SB24　1/40

図17　遺構詳細図⑪

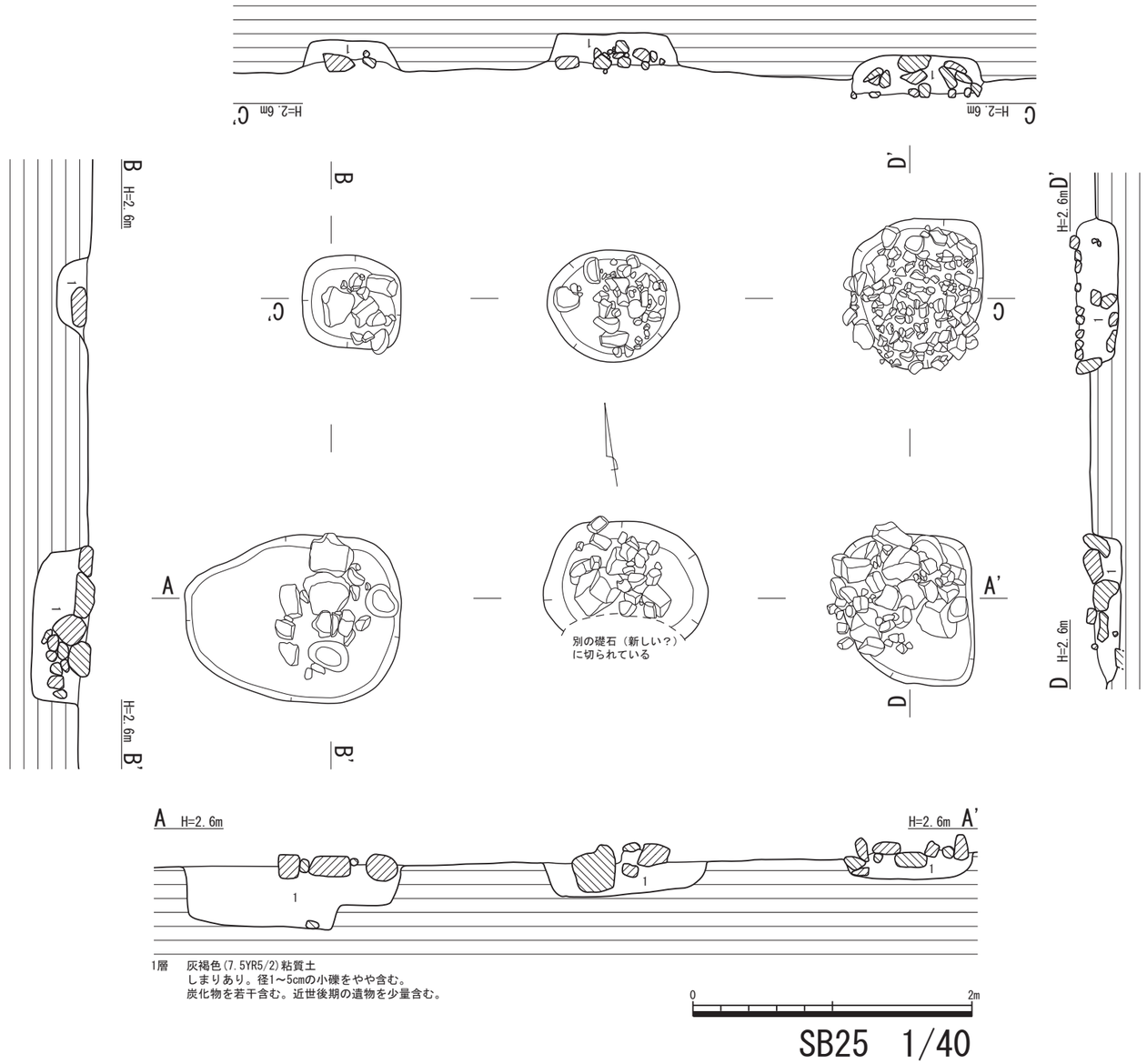
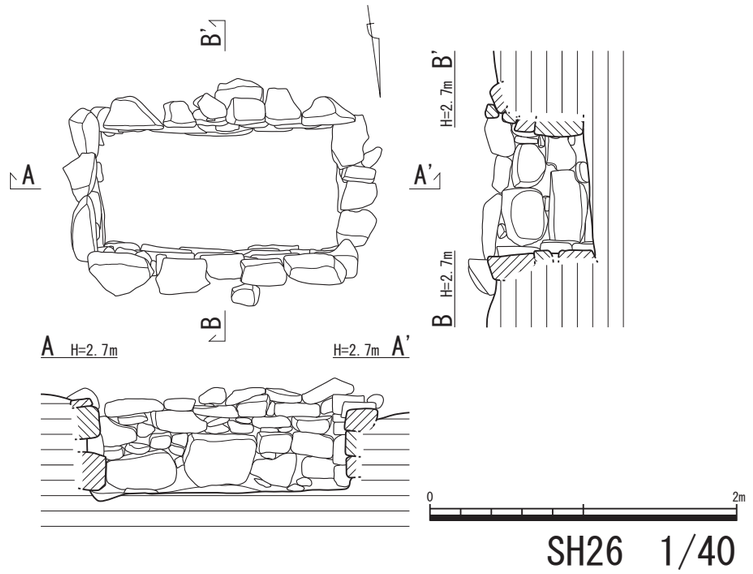
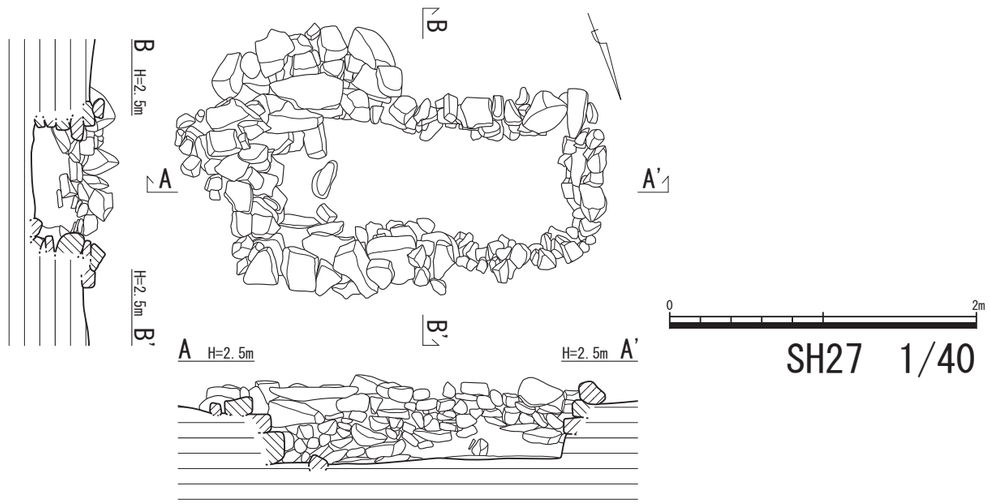

C H=2.6m
C' H=2.6m
B H=2.6m
B'
D H=2.6m
D'
A
A'
別の礎石（新しい？）
に切られている
A H=2.6m
A' H=2.6m
1
1層　灰褐色(7.5YR5/2)粘質土
しまりあり。径1～5cmの小礫をやや含む。
炭化物を若干含む。近世後期の遺物を少量含む。
0
2m
SB25　1/40

図18　遺構詳細図⑫

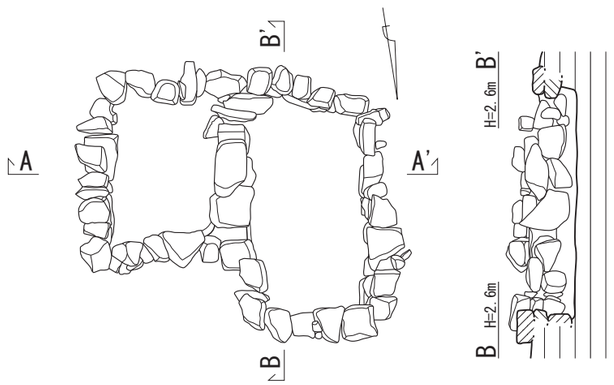


SH26　1/40

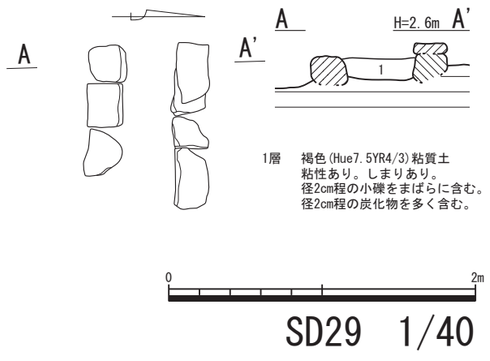


SH27　1/40

図19　遺構詳細図⑬



SH28　1/40



SD29　1/40

図20　遺構詳細図⑭

S=1/250

日本測地系

図21　遺構配置図①（1面目　1/250）

第２項　江戸時代前期前半

今回の調査で確認した４面の遺構検出面のうち、２番目に新しい年代（江戸時代前期後半）の整地層である。この遺構面からは、礎石列２基、建物跡３棟、石壁遺構７基、溝２本、井戸１基、石組遺構９基、石列６基、不明遺構１基の合計31基の遺構を検出した。

SE30（井戸）

Ｃ－６グリッドで検出した円形を呈する井戸である。他遺構との直接的な切り合い関係は見られないが、SE30の南側で検出されたSV51を切っている可能性がある。石積みは主に砂岩を用いている。扁平気味な石が多い。底面からは水が湧いた。遺物は陶磁器、瓦が出土した。

SH31

Ｃ－５・Ｃ－６グリッドにまたがって検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は不明瞭であるが、SC55に切られていると思われる。石積みは主に砂岩を１～４段比較的丁寧に積んでいる。遺物は陶磁器、瓦、土師器が出土した。

SC32（石壁遺構）

およそ南北に直線的に走る石壁遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、SD41（３面目）が下に走っていることから、SD41よりは新しいと考える。石積みは主に砂岩を用いて１～２段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SH33

Ｃ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、上面を攪乱により切られている。石積みは３～７段を積んでいる。石材は主に砂岩を用いており、比較的丁寧に積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。

SH34

Ｂ－５グリッドで検出した方形を呈する石組遺構である。SC38を切っていると思われる。石積みは６～７段を、比較的丁寧に積んでいる。石材は主に砂岩を用いている。遺物は陶磁器、古銭、瓦の他土師器の小皿が出土した。

SX35

Ｃ－５グリッドで検出した丸瓦を円形に組む不明遺構である。SC49を切っている。遺構の性格は不明である。遺物は検出できなかった。

SD36

東西に直線的に走る溝である。平面上ではSD68に切られているように見えるが、検出高がSD36の方が高いため、SD36の方が新しいと思われる。石積みは主に砂岩を用いており、１～３段積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。

SH37

B－５グリッドで検出した方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、造成の際に上面を削平されたのか残存状況が悪い。石積みは主に砂岩を用いており、１～２段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SC38

東西方向に直線的に走り、根石の一部のみ残存する石壁遺構である。他遺構との切り合い関係は、SH34に切られている可能性がある。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SB40

２面目からは３棟の建物跡を検出したが、他の２棟（SB50、SB60）が蔵跡と推定されるのに対し、唯一の建物跡である。規模は残存状況で２間半×２間（約５m×約４m）であるが、いくつか攪乱されている可能性もあり、元々２間×３間であった可能性もある。柱間は約２m である。礎石は残存しておらず、根固め石のみ集石状に残る。根固め石の規模は約１m×約１m である。また、上面からの攪乱により、数箇所根固め石の集石が欠損（欠失）している。他遺構との切り合い関係は、３面目の SD39を切っているため、SD39よりは新しいと判断する。

SV42

東西方向に直線的に並ぶ石列である。SV45と SV47とともに SB60を構成すると考える。つまり、SB60の基礎の一部である可能性がある。石積みは見られない。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SA43

東西方向に直線的に並ぶ礎石列である。本来は４石であったと考えられるが、東から２石目が欠損している。他遺構との切り合い関係は見られないが、SB60を構成すると考えられる SV42、SV47と並行に走る位置関係にあることから、SB60に関連する遺構である可能性がある。遺物は検出できなかった。

SD44

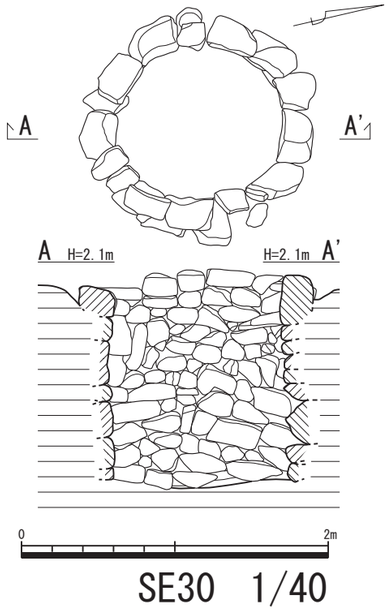
南北方向に直線的に走る溝である。他遺構との切り合い関係は見られないが、攪乱により切られている。石積みは主に砂岩を用いており、１～２段を積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。

SV45

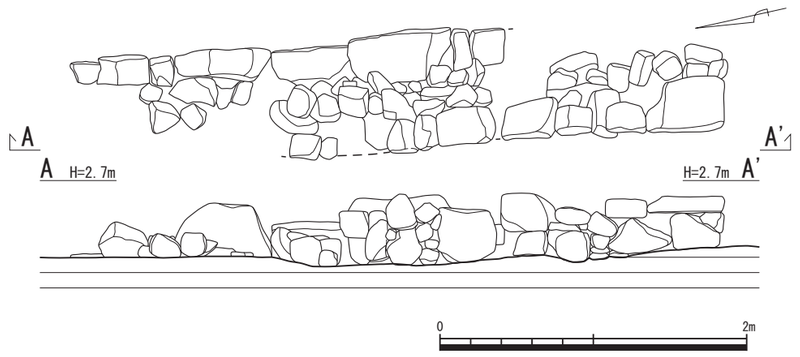
ほぼ南北方向に直線的に走る石列である。SV42と SV47とともに SB60を構成すると考える。つまり、SB60の基礎の一部である可能性がある遺構である。石積みは主に砂岩を用いており、１～２段を積んでいる。遺物は検出できなかった。

SV47

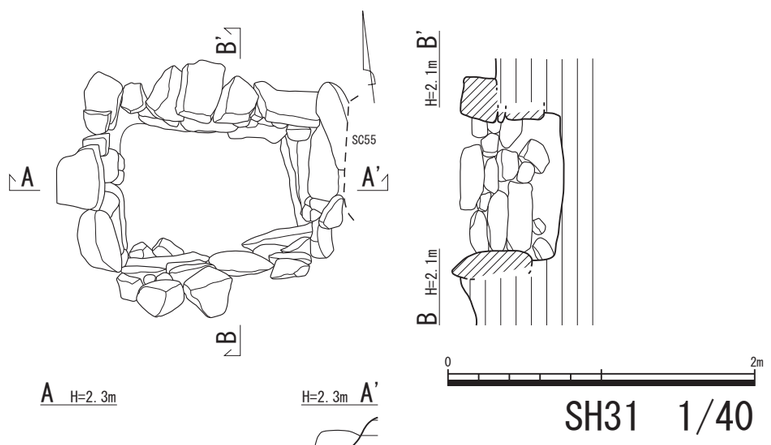
ほぼ東西方向に直線的に並ぶ石列である。SV42と SV45とともに SB60を構成すると考える。つまり、SB60の基礎の一部である可能性がある遺構である。石積みは主に砂岩を用いており、１～２段を積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。



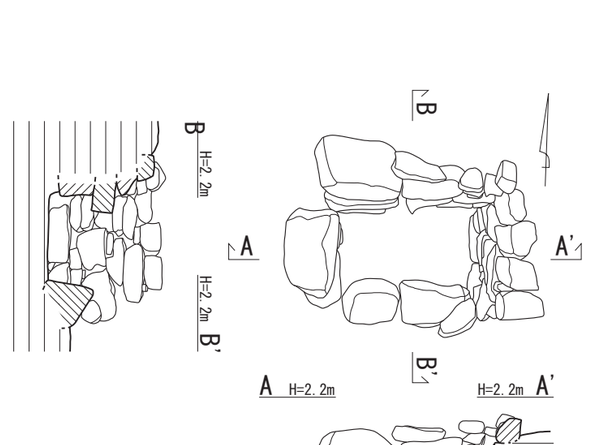
SE30　1/40



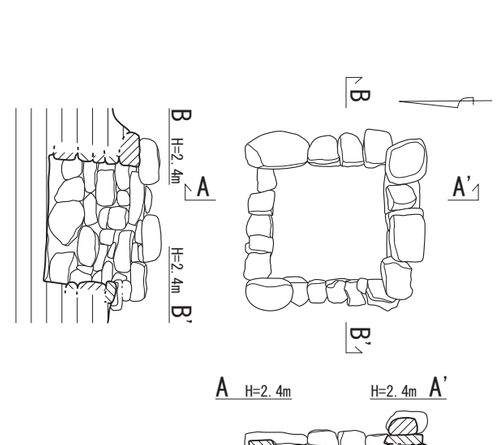
SC32　1/40



SH31　1/40

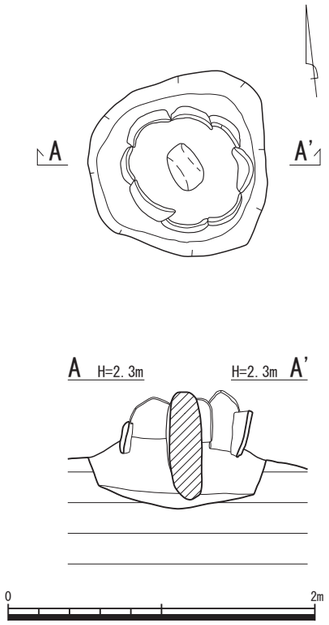


SH33　1/40

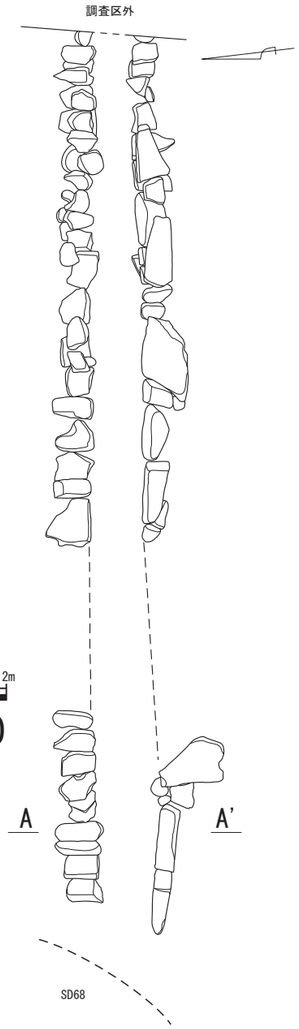


SH34　1/40

図22　遺構詳細図⑮



SX35　1/40

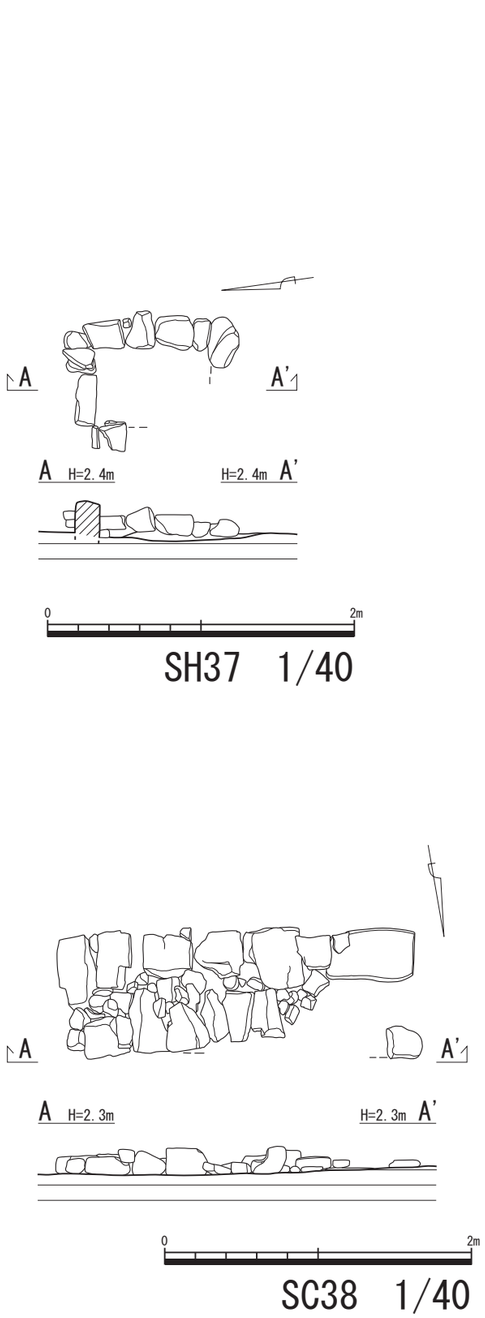


SD36　1/40

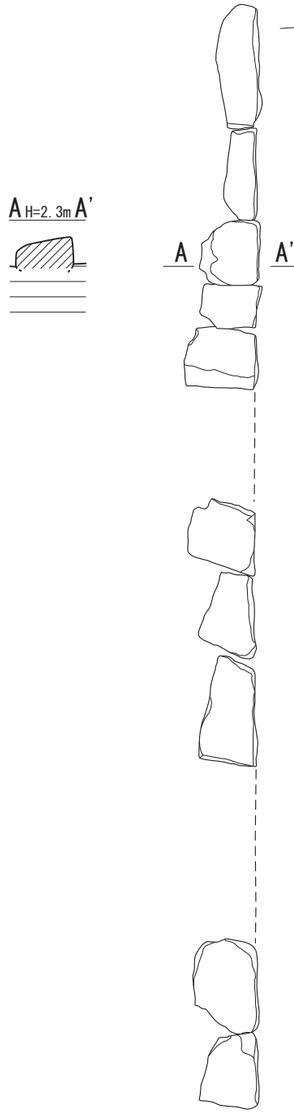
1層　灰褐色(Hue7.5YR5/2)粘質土
しまりあり。径0.5～1cmの炭化物や
径1～2cmの小礫をまばらに含む。
赤褐色粘質土のブロックをまばらに含む。

図23　遺構詳細図⑯

SH37 1/40

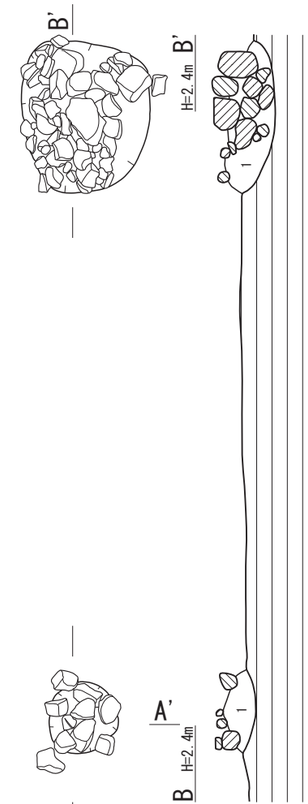


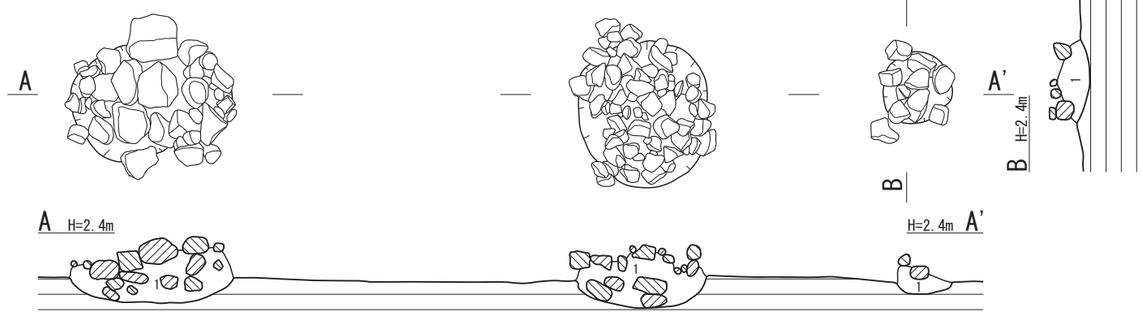
SC38 1/40



SV42 1/40

図24 遺構詳細図⑰





1層 灰褐色(Hue7.5YR5/2)粘質土
しまりあり。径1～5cmの小礫をまばらに含む。
遺物は陶磁器が出土しているが点数は少ない。

SB40 1/40

図25 遺構詳細図⑱

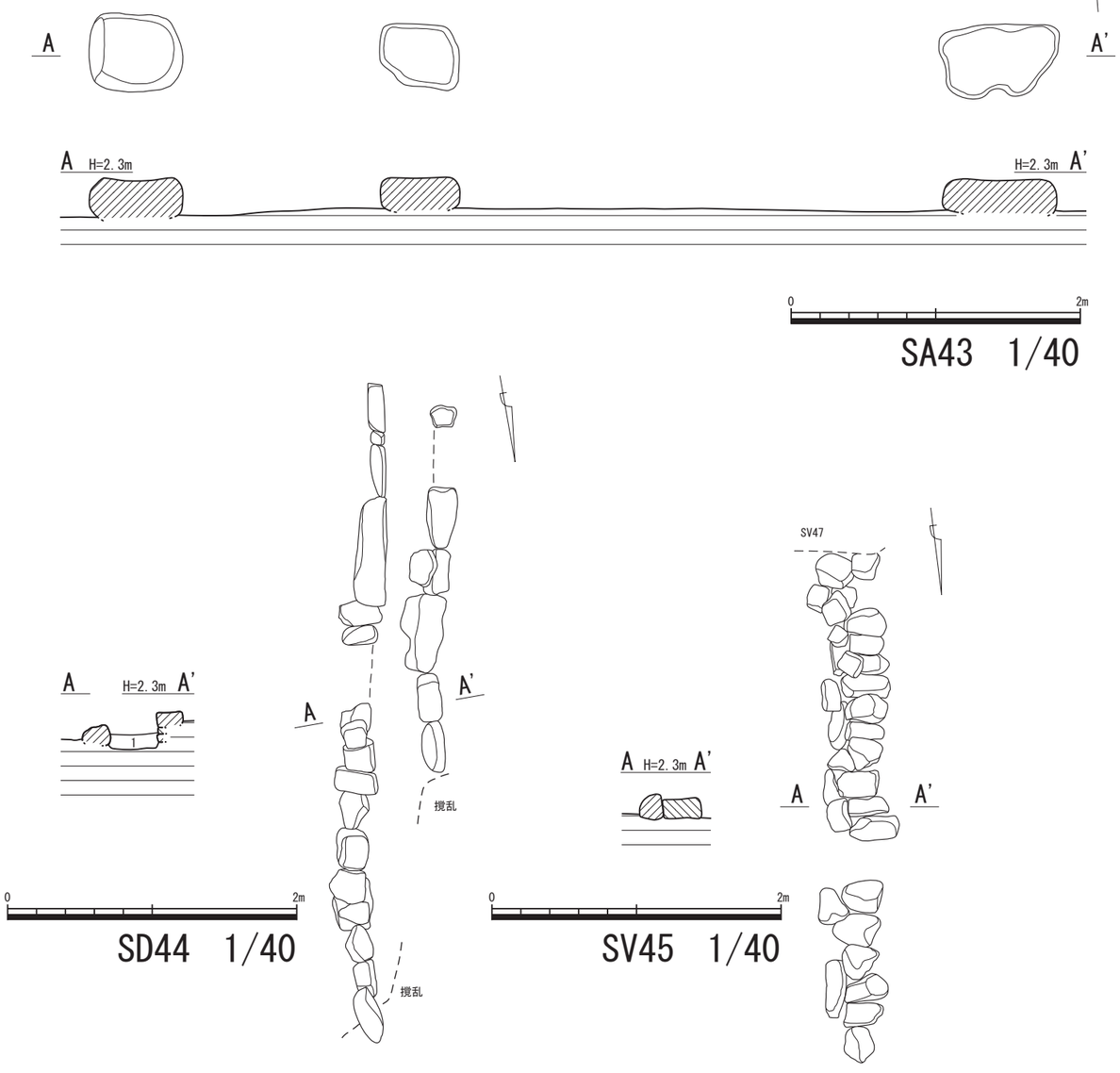


図26　遺構詳細図⑲

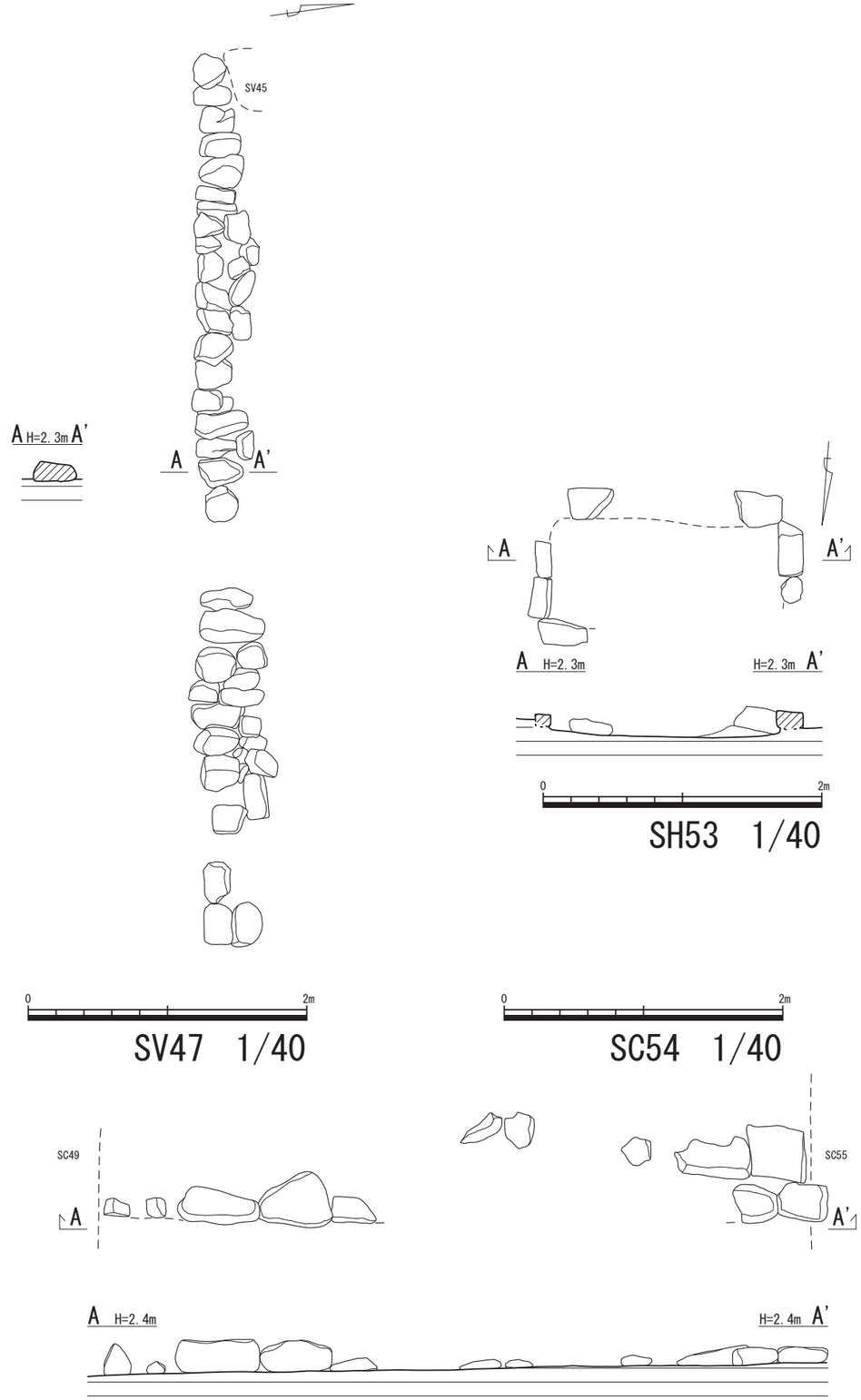


図27　遺構詳細図⑳

SA48

ほぼ東西方向に直線的に並ぶ礎石列である。他遺構との切り合い関係は見られないが、SB60（蔵跡）を構成すると思われるSV42、SV47、及びSA43と並行に走っており、同じ礎石列であるSA43とは対面する位置関係にあることから、SA48もSA43と同様にSB60（蔵跡）に関連する遺構である可能性がある。遺物は検出できなかった。

SC49

ほぼ東西方向に直線的に走る石壁遺構である。SC54と接している。石材は主に砂岩を用いている。上面は造成の際の影響か、削平されており、根石のみが残っている。遺物は検出できなかった。

SB50

D－6グリッドで検出した長方形を呈する蔵跡（土蔵カ）の基礎と考えられる遺構である。SC36、SC55の石壁と接しており、これらの遺構と同時期と考える。石積みは、主に砂岩を用いており、1～2段積んでいる。石積みで囲む内側は、全面に礫を30cm程詰めることにより、台状の基礎を作り上げている。SB60に比べて残存状況は良い。遺物は陶磁器、瓦が出土した。

検出面の所属時期から、金石城を中心として町割が進められた厳原城下町の様相を伝える貴重な建物跡である。

SV51

3石のみほぼ南北方向に直線的に残存する石列である。石積みではない。直線的な切り合い関係は見られないが、北側にあるSE30に切られている可能性がある。遺物は検出できなかった。

SH52

C－6グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは、北側と東側に大きな1石の礫を用いて壁を形成しており、南側と西側は3～5段積んでいる。石材は主に砂岩である。遺物は陶磁器が出土した。

SH53

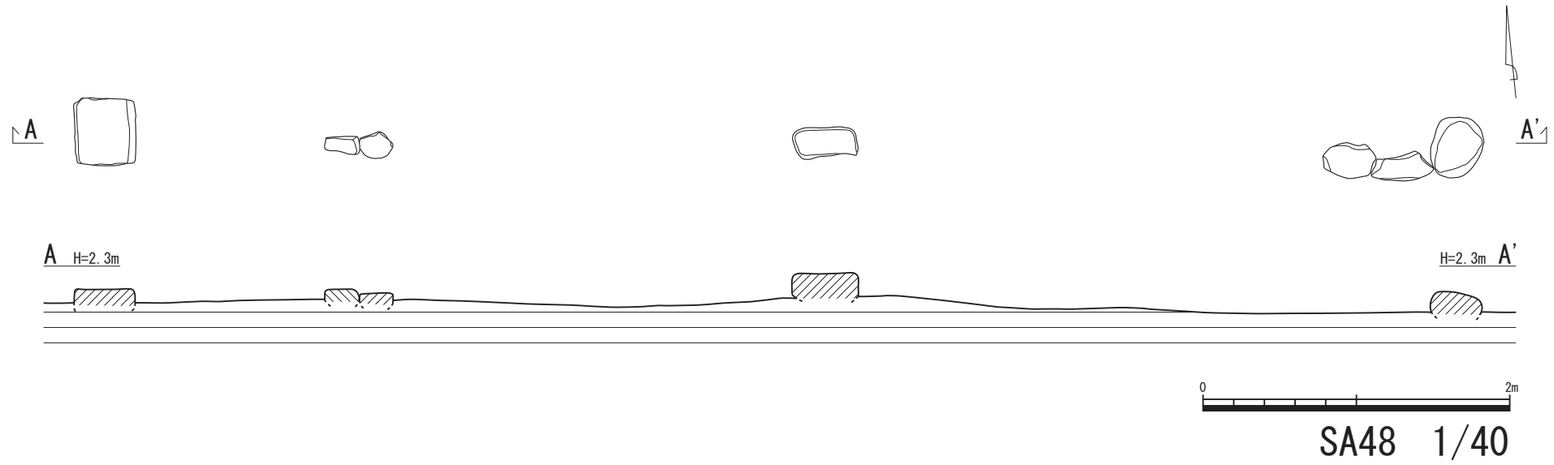
C－5グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。攪乱により上面を欠損している。他遺構との切り合いはなく、攪乱にのみ切られている。石積みは根石の1石のみ残る。石材は砂岩である。遺物は検出できなかった。

SC54

ほぼ南北方向に直線的に走る石壁遺構である。SC49、SC55と接しており、両遺構をつなぐ形となっている。上面は削平されており、根石のみが残存している。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SC55

東西方向に直線的に走る石壁遺構である。SC54が直交してぶつかり、SC50に接している。残存状況が悪いため不明瞭であるが、SH31を切っている可能性がある。攪乱によって一部が切られている。石積みは、上面が攪乱されており、根石のみのものから3段近く積むところもある。遺物は検出できなかった。



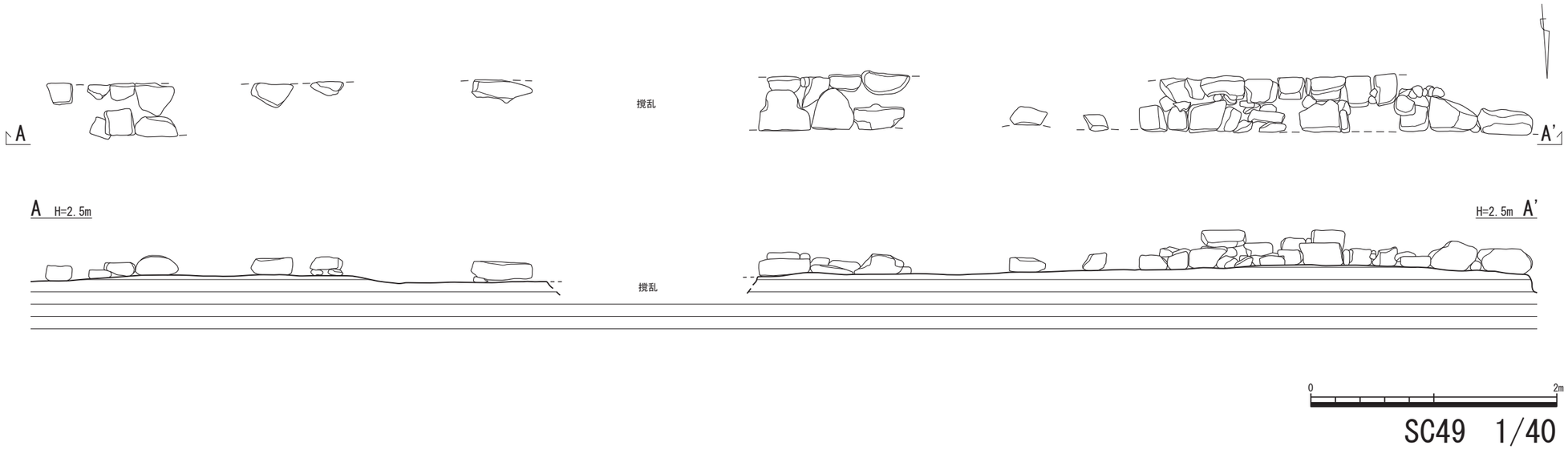
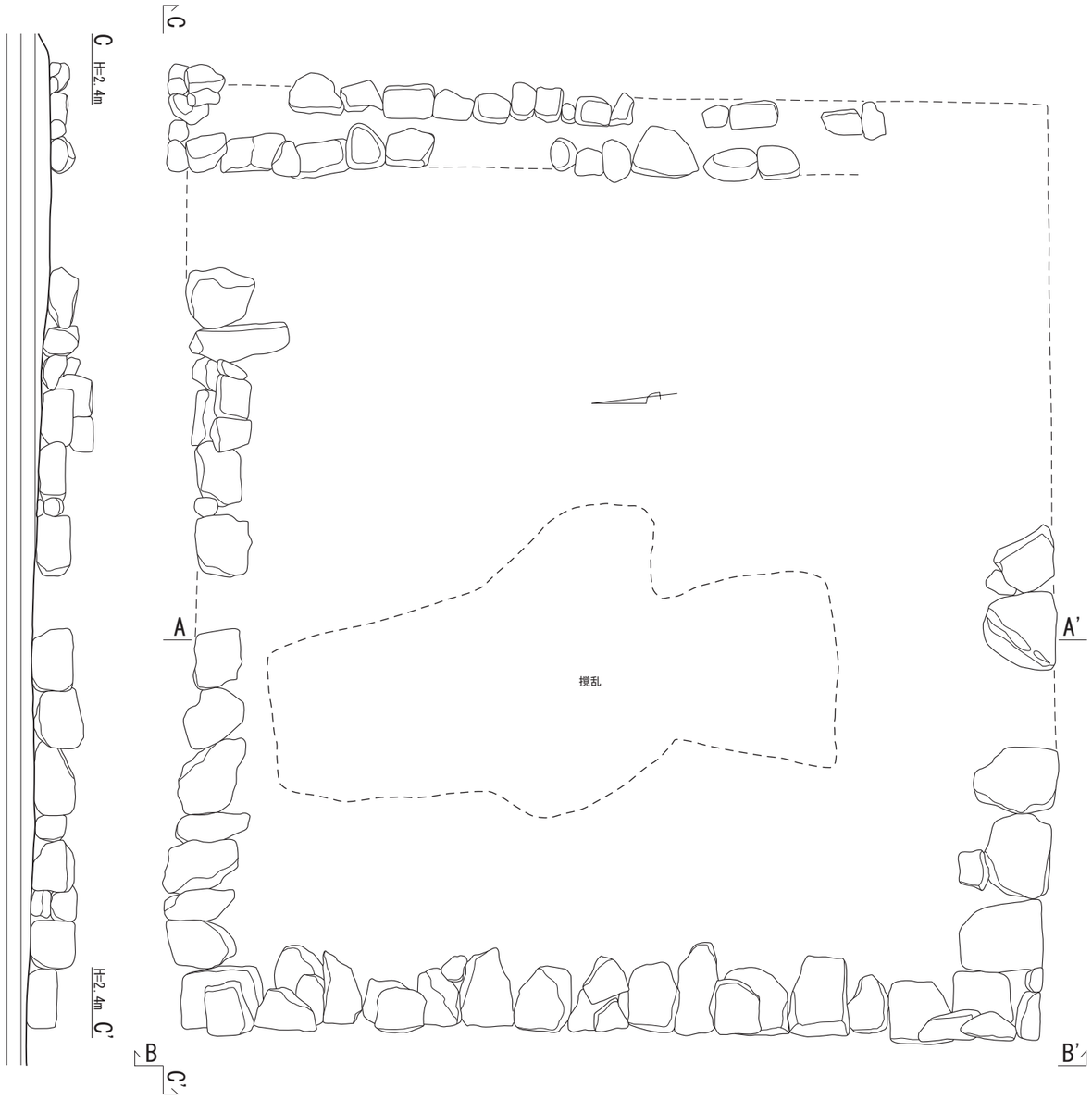


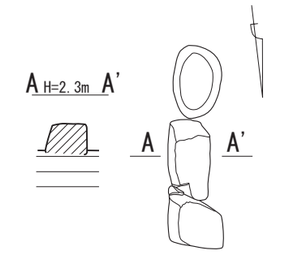
図28　遺構詳細図㉑



0 2m

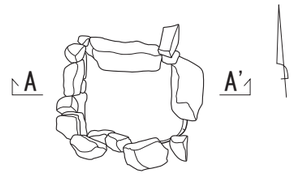
SB50 1/40

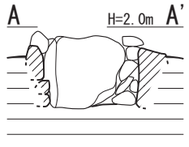
1層 赤褐色(Hue5YR4/6)粘質土
粘性あり。しまりあり。
径4～8cm程の円礫を多く含む。
径5mm～2cmの炭化物をまばらに含む。



0 2m

SV51 1/40





0 2m

SH52 1/40

図29 遺構詳細図㉒

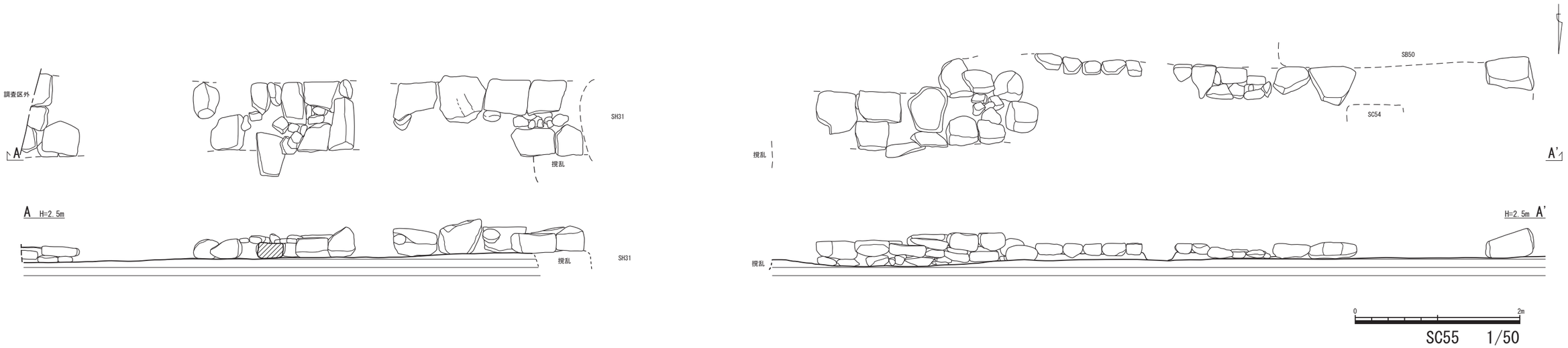


図30　遺構詳細図㉓

SC56

東西方向に直支援的に延びる石壁遺構である。SC57とSB50に接している。両遺構とは同時期と考える。石積みは主に砂岩を用いて１～２段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SC57

ほぼ南北方向に直線的に走り、SC56に繋がる石壁遺構である。SC56とは同時期に属すと考える。中央に大礫が残るが、元々あった大礫を除去することなく、当時その上に石壁を積んでいたと思われる。石積みは砂岩を用いて１～２段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SV58

ほぼ南北に直線的に残る石列である。ただし、石積みではない。他遺構との切り合い関係は見られない。遺物は検出できなかった。

SH59

Ｄ－５・Ｅ－５グリッドにまたがり検出した長方形を呈する石組遺構で、２面目で検出した石組遺構の中では、残存状況が良好な遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いて５～９段積んでいて、比較的丁寧に積まれている。遺物は陶磁器や瓦が出土した。

SB60

SV42、SV45、SV47で構成する建物跡（土蔵跡）と考える。SA43、SA48は、SB60と軸が揃うため、本遺構に関係する遺構である可能性が考えられるが、明確ではない。SB60は構造的にSB50と類似する建物基礎であると考えるが、東側石列（もしくは石積）及び中央栗石は欠損しており、SB50と比較すると非常に残存状況が悪い。石材は主に砂岩を用いている。遺物の出土はないが、SB60を構成するSV47からは陶磁器が出土した。

SV64

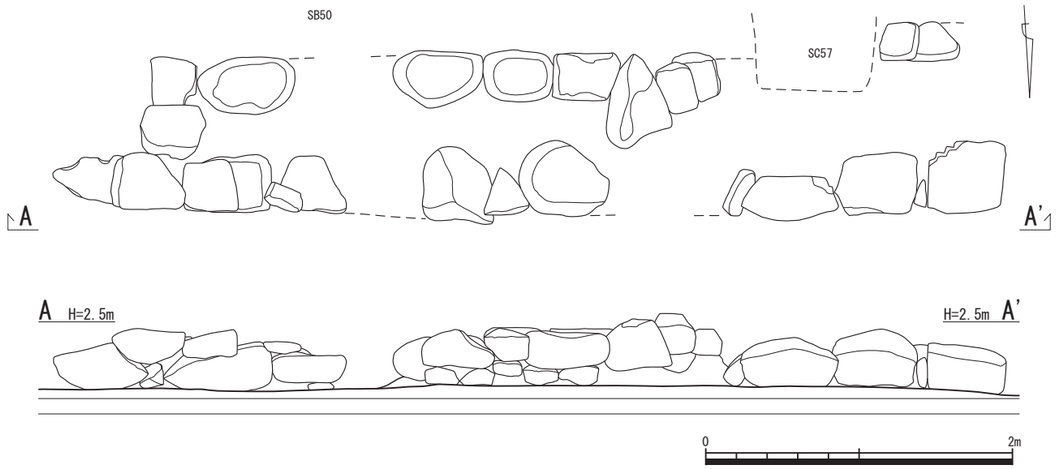
ほぼ南北方向に直線的に走る石列である。ただし、石積みではない。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SH66

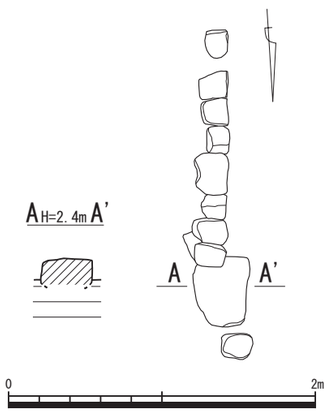
Ｄ－６グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いて２～４段を丁寧に積んでいるように見えるが、残存状況が悪い。遺物は陶磁器や瓦が出土した。

SH67

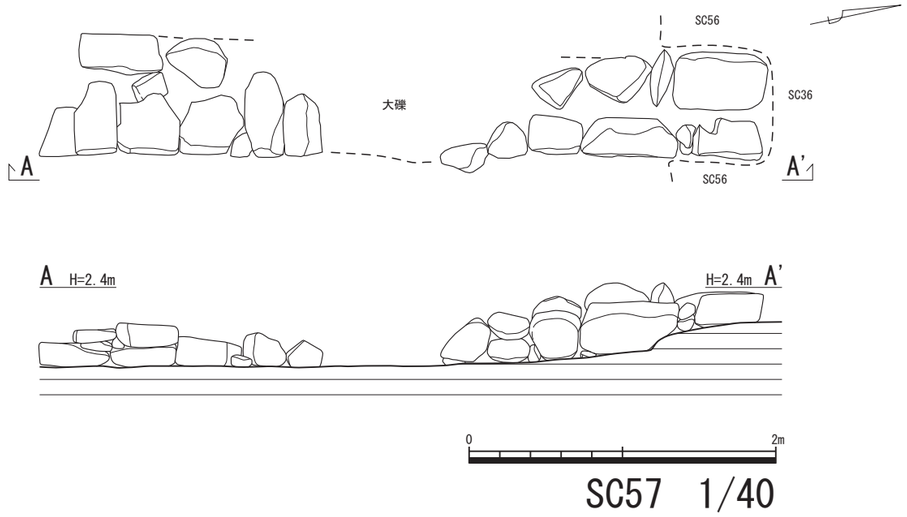
Ｅ－６グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。石積みは主に砂岩を用いて１～３段積み、比較的丁寧に積んでいるが、残存状況が悪い。遺物は陶磁器が出土した。



SC56　1/40

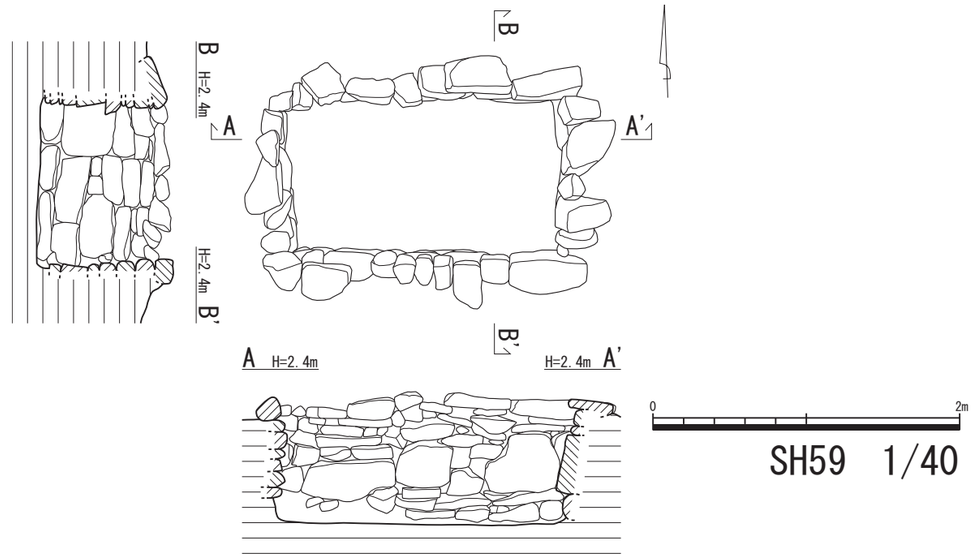


SV58　1/40



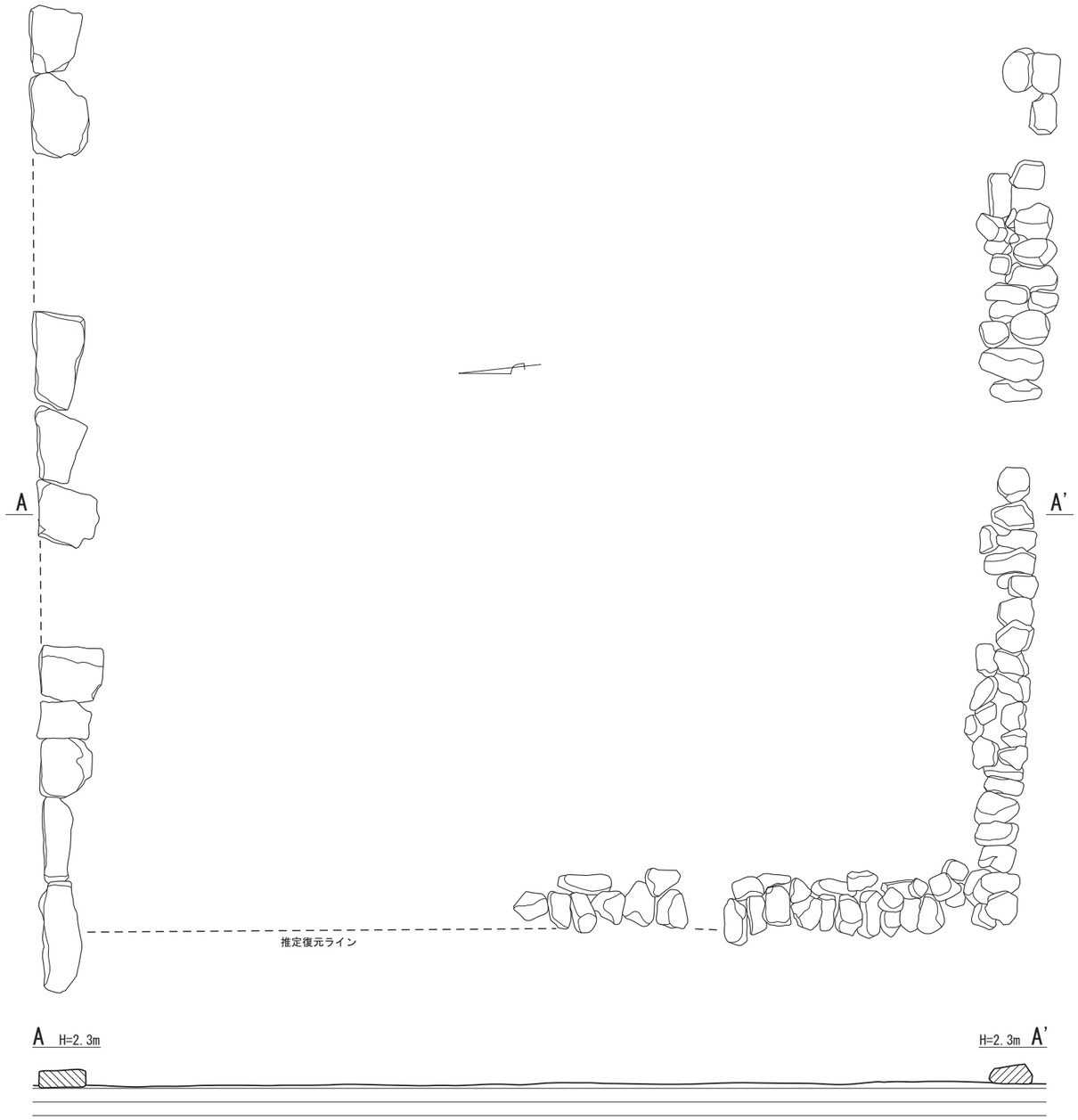
SC57　1/40

図31　遺構詳細図㉔

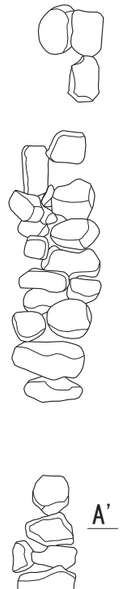


SH59　1/40

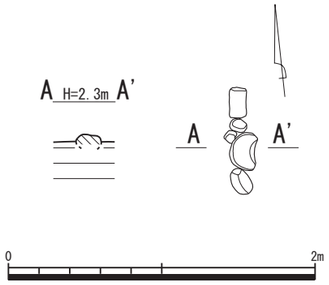
図32　遺構詳細図㉕



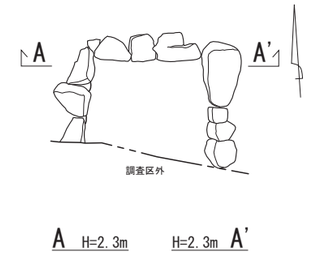
SB60　1/40



SV64　1/40



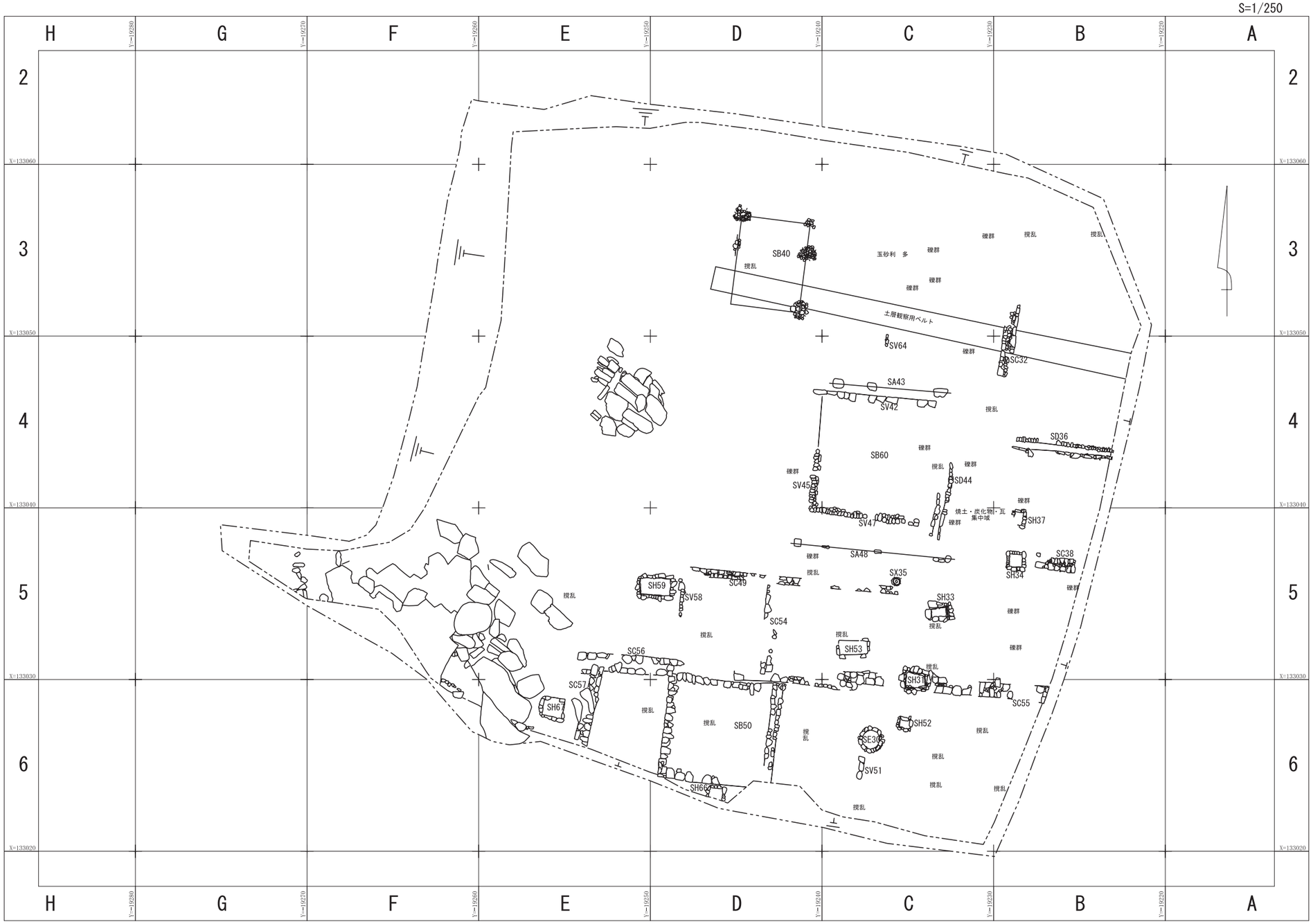
SH66　1/40



SH67　1/40

図33　遺構詳細図㉖

S=1/250



日本測地系

図34　遺構配置図②（２面目　1/250）

第３項　中世末～江戸時代前期前半

今回の調査で確認した４面の遺構検出面のうち、３番目に新しい年代（中世末～江戸時代前期前半）の整地層である。この遺構面からは、建物跡１棟、石壁遺構３基、溝６本、井戸４基、石組遺構12基、土坑１基、石列２基、不明遺構２期の合計31基の遺構を検出した。

SD39

南北方向に直線的に走る溝である。他遺構との切り合い関係は、SD63に切られていて、SD41を切っている。また、SD62と交わっている。SD68との関係は、間が欠損しているため不明瞭ではあるが、繋がっていた可能性が高い。そのためSD39は、SD63より古く、SD41より新しい。ただし、SD39とSD63の間を礫で分断する以前は繋がっていて、同時期に使用されていた可能性も考えられる。石積みは主に砂岩を用いて１～２段積んでいる。遺構全体の残存状況は悪い。遺物は軒丸瓦や白磁、染付などの陶磁器が出土した。

SD63

南北方向にSD39と並行して走る直線的な溝である。他遺構との切り合い関係は、SD62との間が残存していないため、両遺構の新旧関係は不明である。また、本遺構はSD39を切っているため、SD39よりは新しいと考える。なお、SD39と同様SD63も残存状況が悪い。石積みは主に砂岩を用いていて、根石の１段のみ残る。遺物は陶器が出土した。

SD41

およそ東西方向に直線的に走る溝である。他遺構との切り合い関係は、SD39、SD68に切られていることから、SD39及びSD68より古いと考える。また、SX65を切っていることから、SX65よりは新しいと考える。ただし、SD39、SD68及びSX65と本遺構との間を石で分断する前は、これらの遺構と同時期に存在し、共有していた可能性も考えられる。溝の石積みは１～３段積んでいて、主に砂岩を用いている。遺物は陶磁器が出土した。

SH46

Ｅ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、１～２段積んでいる。積み方は比較的丁寧である。遺物は陶磁器が出土した。

SD61

ほぼ南北方向に直線的に走る溝である。他遺構との切り合い関係はSD68と交わることから、SD68と同時期であると考える。遺物は検出できなかった。

SD62

東西方向に直線的に走る溝である。他遺構との切り合い関係はSD39に交わることから、SD39と同時期であると考える。遺物は検出できなかった。

SX65

D－４グリッドで検出した円形を呈する不明遺構である。検出時、形状から井戸と考えられたが、掘削してみたところ、浅かったことから井戸ではないと判断した。また、今回の調査で検出した他の石組遺構とも性格が異なっており、溝に接することから洗い場などの可能性も考えられる。他遺構との切り合い関係は、SD68に切られているが、切られる以前は同時期に属していて通水していた可能性がある。石積みは主に砂岩を用いていて、１～２段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SD68

C－３グリッド一帯を取り囲む区画溝である。SD39と同一遺構である可能性があるが、両遺構ともに残存状況が悪いため明確ではない。本遺構はSX89とSD41を切っているため、SX89、SD41よりは新しいが、分断される以前は繋がっていて、同時期に使用されていた可能性もある。SD68とSD39とで取り囲むことで区画溝として用いられており、SB85を中心とする建物を中心に、SV83、SH80、SH86、SX65、SX89、SD41などで構成される屋敷地を取り囲んでいたと思われる。屋敷地西側に位置するSD39と東側に位置するSD68との間の距離は約20mあり、中世末～江戸時代前期前半における金石城下町の屋敷地の規模を掴む上で重要な遺構と言える。溝に用いた石積みは、１段のみ鏡石の手法を使用する箇所と、２～４段に石積みを行う箇所とみられる。石材は主に砂岩を用いているが頁岩が混じっている。遺物は陶磁器が出土した。

SH69

C－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは砂岩を用いて１～３段積んでいて、比較的しっかりと積まれた石組遺構である。遺物は陶磁器が出土した。

SH70

C－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、SH72と接している。石積みは主に砂岩を用いて３～７段積んでいる。積み方は比較的丁寧である。遺物は陶磁器が出土した。

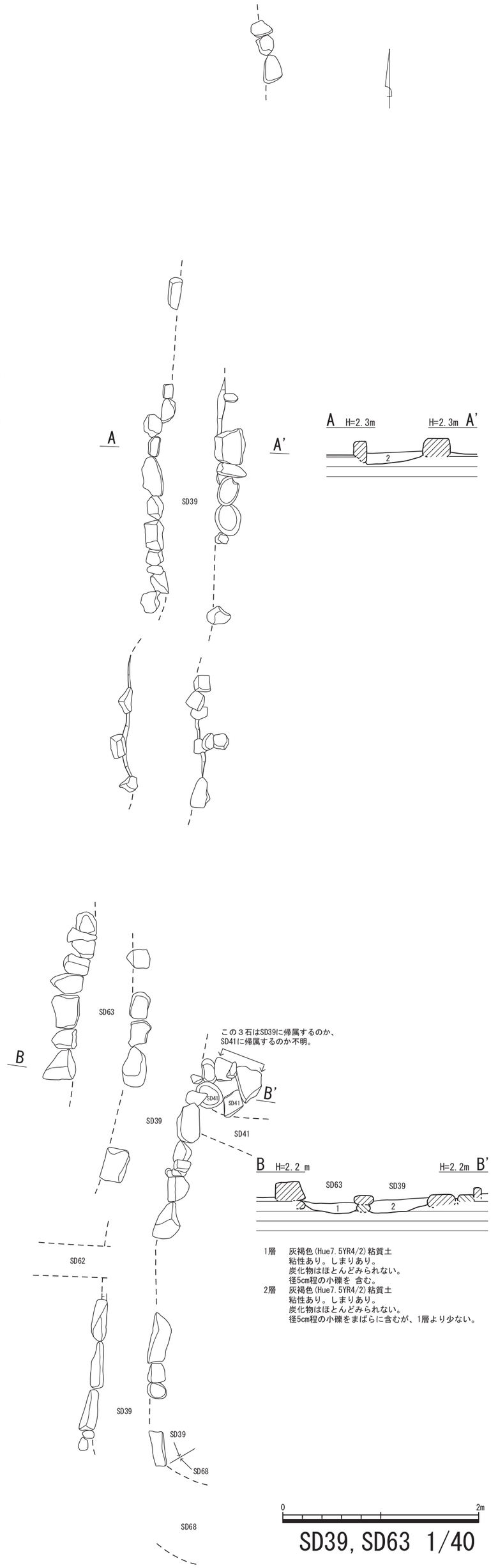
SH71

C－５グリッドで検出した方形を呈するこぶりな石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いて４～６段を摘んでいる。積み方は比較的丁寧である。遺物は検出できなかった。

SH72

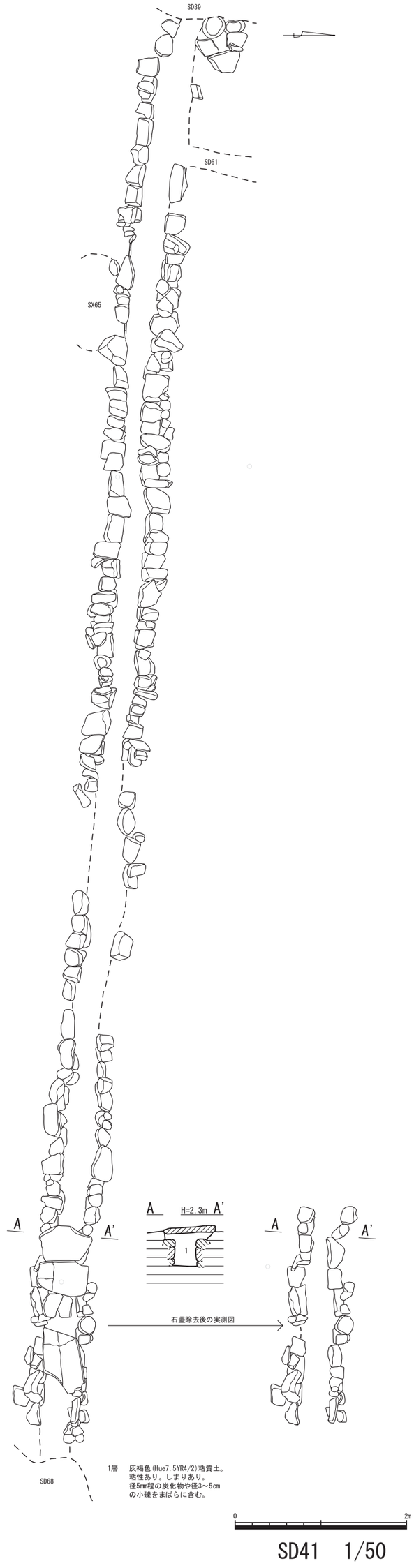
欠損前は方形を呈していたと推定される石組遺構である。残存状況が悪く、北東角と西側の石積み２箇所を欠損している。他遺構との切り合い関係は西側にSH70が隣接している。石積みは主に砂岩を用いていて、大きな石を１石鏡石のように使用するところと、２段積むところが見られる。積み方は比較的粗い。遺物は陶磁器が出土した。

図35　遺構詳細図㉗



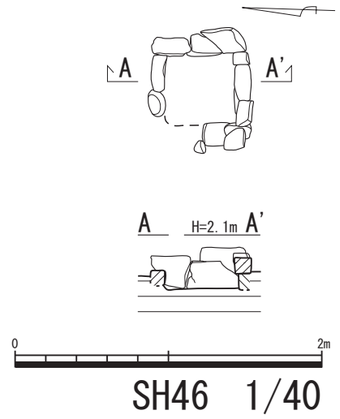
1層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。
炭化物はほとんどみられない。
径5cm程の小礫を 含む。
2層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土
粘性あり。しまりあり。
炭化物はほとんどみられない。
径5cm程の小礫をまばらに含むが、1層より少ない。

SD39, SD63 1/40

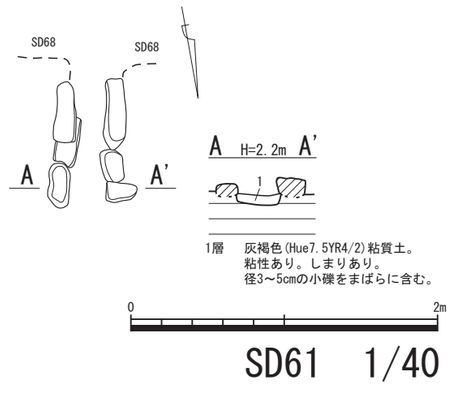


SD41　1/50

図36　遺構詳細図㉘

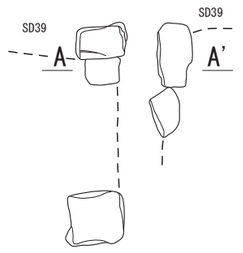


SH46　1/40



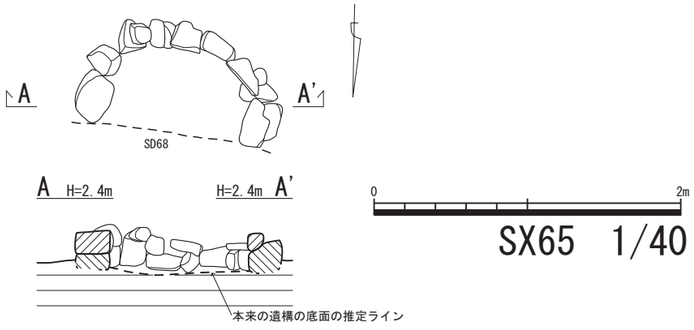
1層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土。
粘性あり。しまりあり。
径3～5cmの小礫をまばらに含む。

SD61　1/40



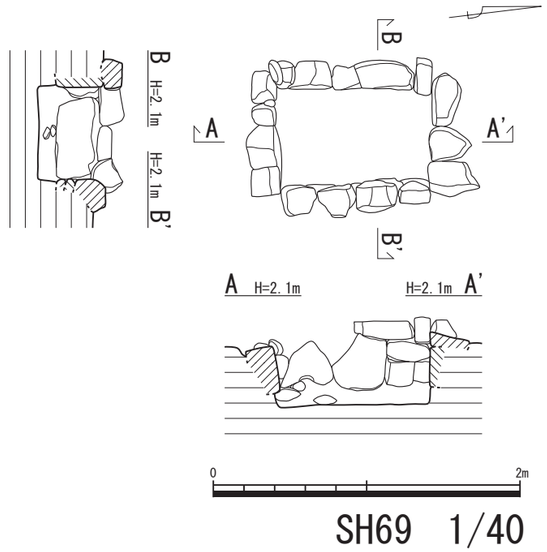
1層　灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土。
粘性あり。　しまりあり。
径1～3cmの炭化物や径5cm程の小礫をまばらに含む。

SD62　1/40



SX65　1/40

図37　遺構詳細図㉙


B
H=2.1m
H=2.1m
B'
B
A
A'
B'
A H=2.1m
H=2.1m A'
0
2m
SH69 1/40

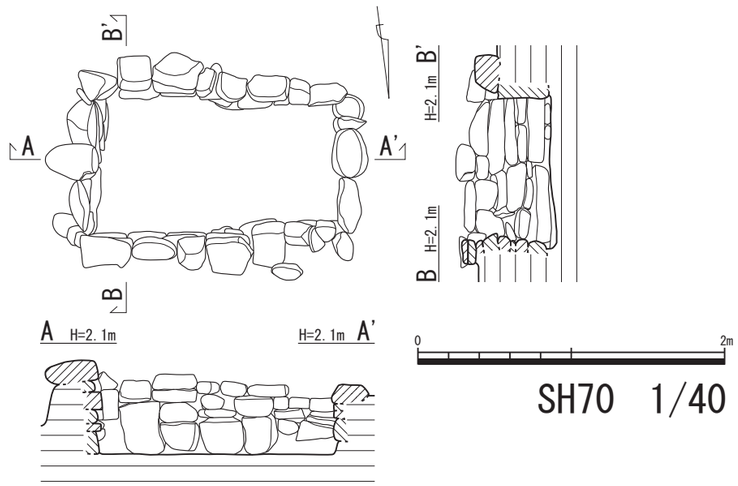

B'
A
A'
B
H=2.1m B'
B H=2.1m
A H=2.1m
H=2.1m A'
0
2m
SH70 1/40

図38　遺構詳細図㉚

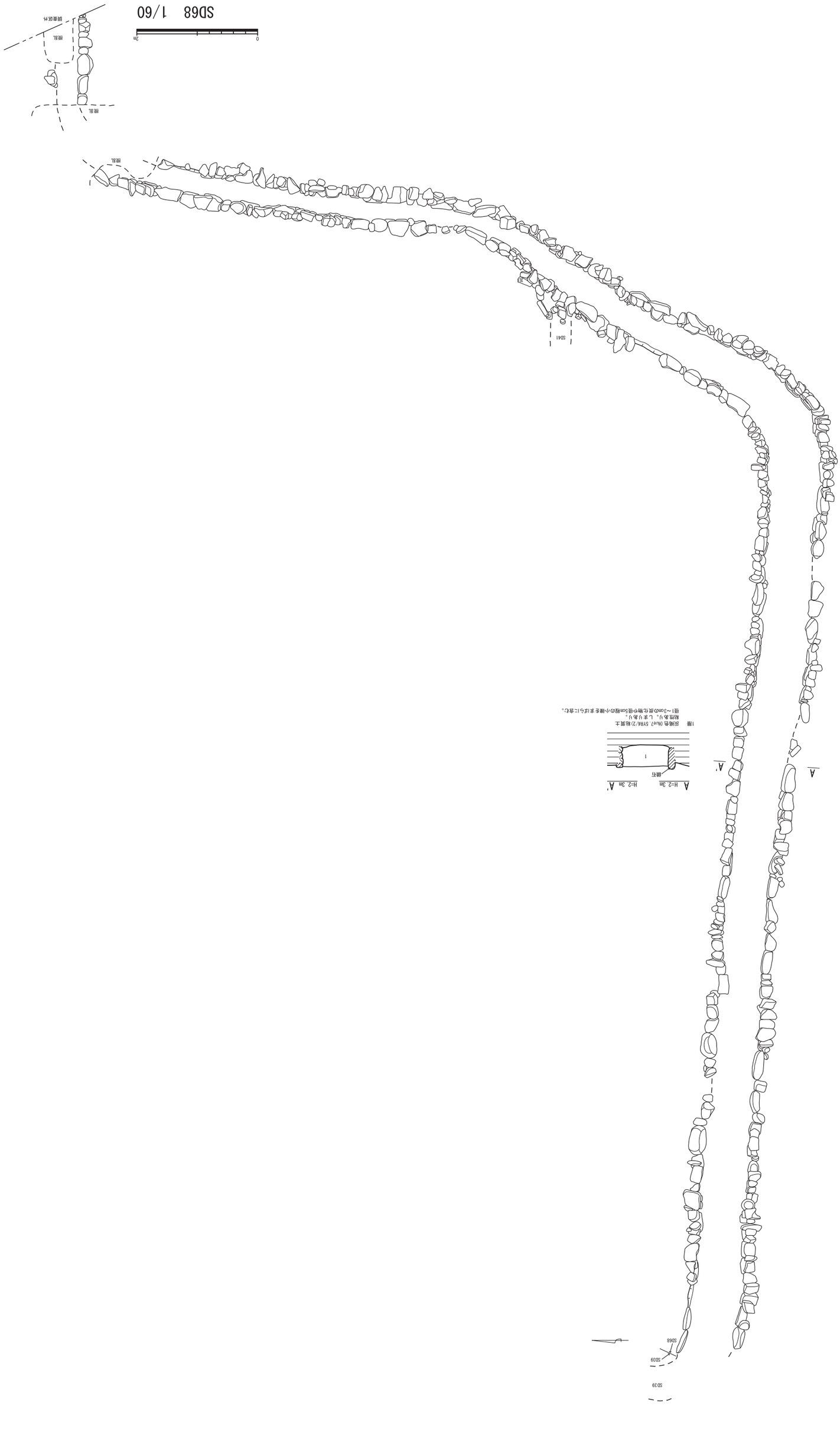
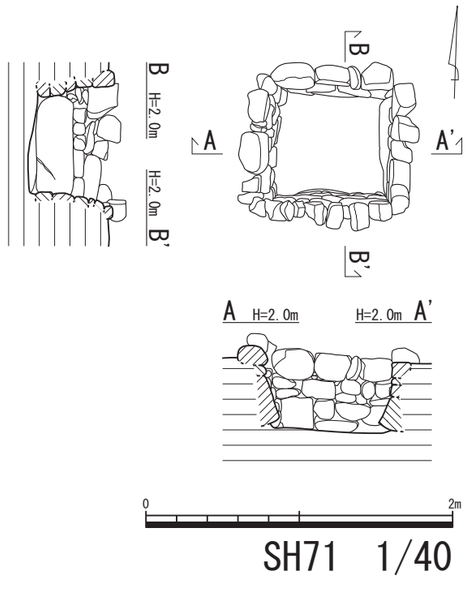

SD68 1/60
SD41
SD39
SD68
A
A'
A H=2.3m
H=2.3m A'
1層 灰褐色(Hue7.5YR4/2)粘質土
粘性あり、しまりあり。
径1～3cmの炭化物や径5cm程の小礫を非ばらに含む。

図39 遺構詳細図㉛


B
A
A'
B'
B H=2.0m
H=2.0m B'
A H=2.0m
H=2.0m A'
0
2m
SH71 1/40

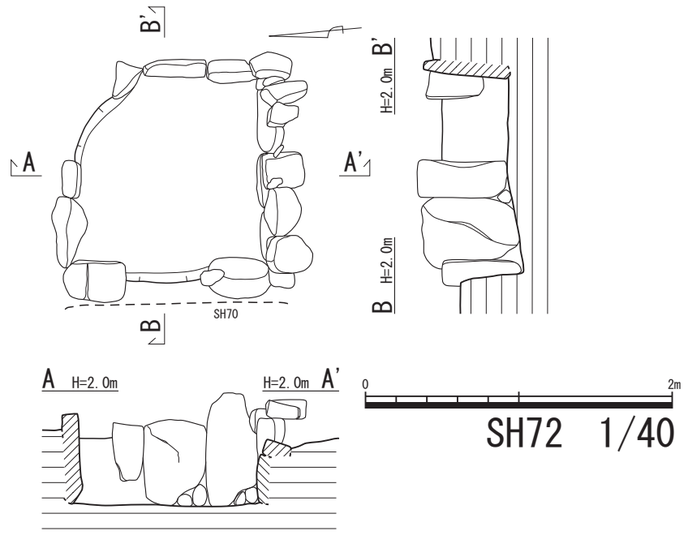
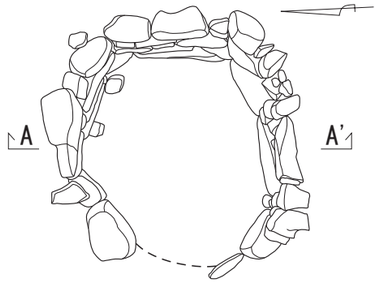
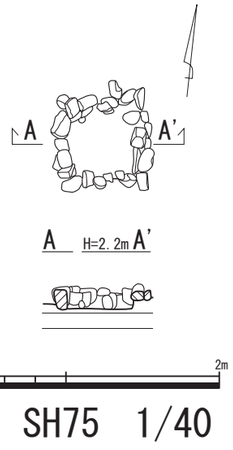

B'
A
A'
B
SH70
B' H=2.0m
B H=2.0m
A H=2.0m
H=2.0m A'
0
2m
SH72 1/40

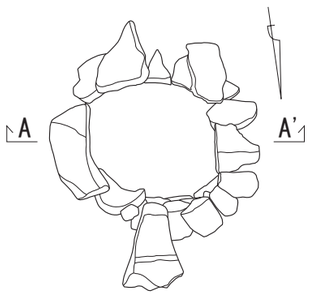
図40　遺構詳細図㉜

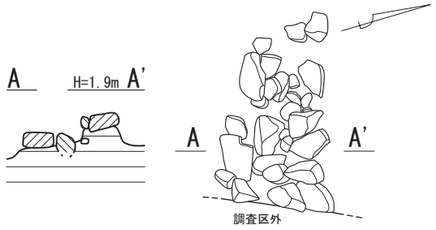


SH73　1/40

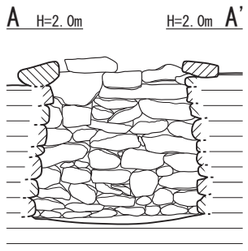


SH75　1/40





SV76　1/40



SE74　1/40

図41　遺構詳細図㉝

SH73

一見すると井戸にも見えるが、むしろ方形の石組遺構に類似する円形の石組遺構である。西側を攪乱により切られている。石積みは主に砂岩を用いて３～６段積んでいる。積み方は比較的丁寧に積んでいる。井戸と比べると深さがなく浅い。遺物は陶磁器や瓦が出土した。

SE74

Ｃ－５・Ｃ－６グリッドにまたがり検出した井戸である。遺構下部ほど広くなる構造である。他遺構との切り合い関係は見られない。２面目検出面で検出したSE30と近い距離にある。石材は主に砂岩を用いている。遺物は瓦や陶磁器の他、加工痕のある木片が出土した。

SH75

Ｄ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、１～２段積んでいる。積み方は非常に粗いつくりである。遺物は検出できなかった。

SV76

北西から南東方向の調査区外に向かって直線的に走る石列である。石壁遺構の可能性もあるが、残存状況が悪く明確ではない。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SC77

およそ南北方向に直線的に走る石壁遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは根石のみ残り、主に砂岩を用いている。遺物は少量ではあるが、陶磁器が出土した。

SH78

Ｄ－６グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、５～10段以上を積んでいる。なお、小ぶりな石材を用いて無理に10段以上に積んでいる箇所もあるため、形状及び積み方は粗く見える。遺物は陶磁器が出土した。

SC79

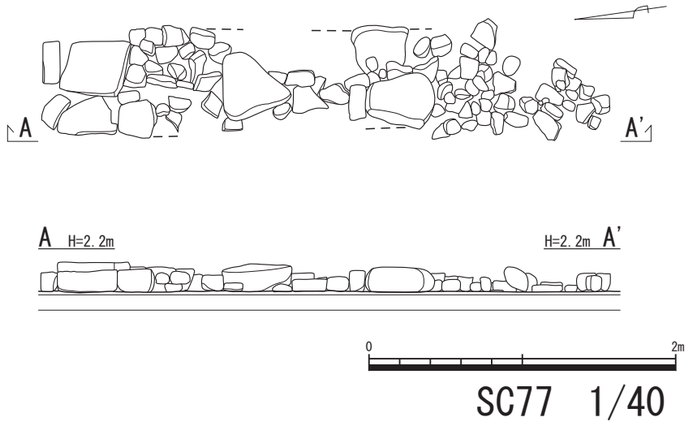
南北方向に直線的に走る石壁遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。主に砂岩を用いていて、根石のみが残存している。遺物は少量ではあるが、陶磁器が出土した。

SH80

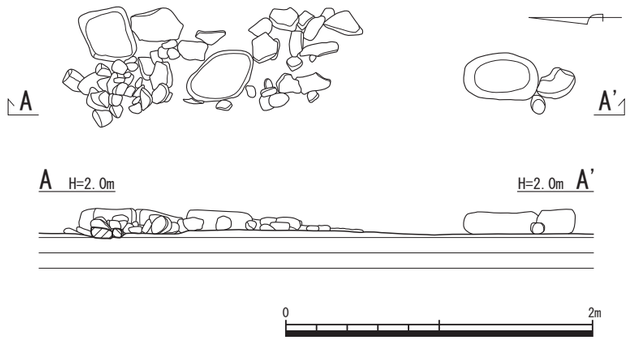
Ｂ－３グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、北側が攪乱によって切られている。石積みは主に砂岩を用いていて、１～３段積んでいる。遺物は検出できなかった。

SH81

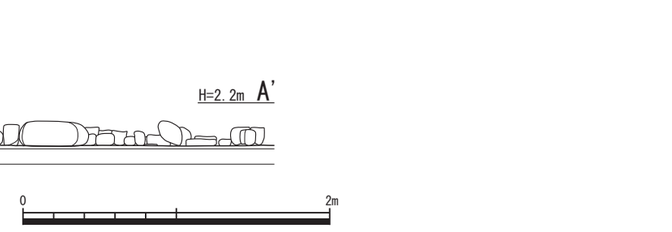
Ｂ－５グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られないが、東側は残存していない。造成の際の攪乱により欠失した可能性がある。石積みは主に砂岩を用いていて５～６段積んでいる。他の石組遺構と比べて石の積み方が粗い。遺物は陶磁器が出土した。



SC77 1/40

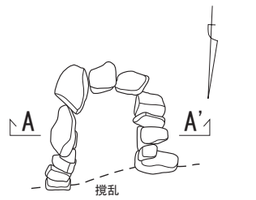


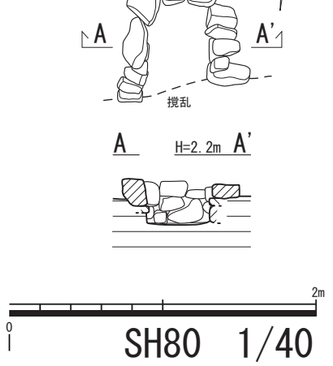
SC79 1/40



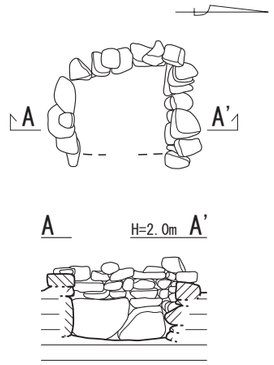
SH78 1/40

図42 遺構詳細図㉞

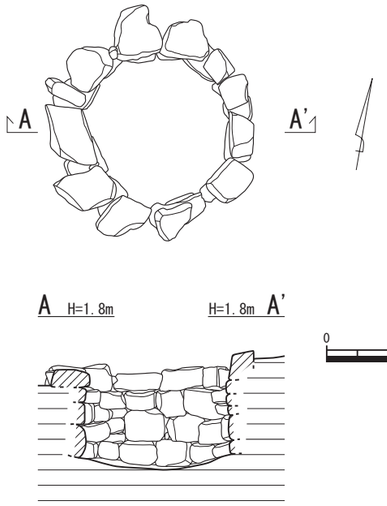




SH80 1/40



SH81 1/40



SE82 1/40

図43 遺構詳細図㉟

SE82

Ｅ－３グリッドで検出した円形を呈する井戸である。遺構上部は攪乱のため欠失している可能性がある。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みはやや粗い。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SV83

東西方向に直線的に並ぶ石列である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは見られず、遺物は検出できなかった。

SK84（土坑）

Ｃ－３グリッドで検出した長方形を呈する浅い土坑である。他遺構との切り合い関係は見られないが、SB85に隣接している。遺構の性格は明確ではない。遺物は少量ではあるが、陶器と鉄が出土した。

SB85

１間×１間（約２ｍ×約３ｍ）を検出した建物跡である。調査区北端に位置していて、北側の調査区外へ続く可能性がある。柱間の距離は、南北方向が約２ｍで、東西方向は約３ｍである。礎石は存在していない。根固め石も良好に残存しているのは、南西隅のみである。根固め石や柱穴の規模は約0.8mである。遺物は少量ではあるが、陶磁器が出土した。

SH86

Ｃ－３・Ｄ－３グリッドにまたがり検出した長方形を呈する石組遺構である。今回の発掘調査で確認された他の石組遺構と比較して、短軸に対して長軸が非常に長いのが特徴である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いて２～６段積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。

SE87

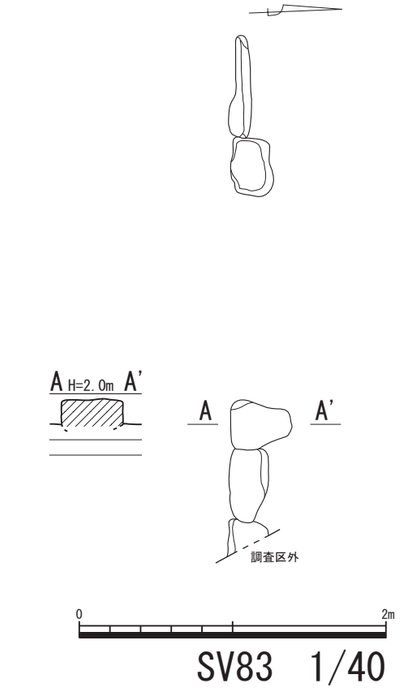
Ｂ－４グリッドで検出した円形を呈する井戸である。他遺構との切り合い関係は見られない。石材は主に砂岩を用いている。遺構下部ほど径が広く、遺構上部の方が径がやや狭い。遺物は検出できなかった。

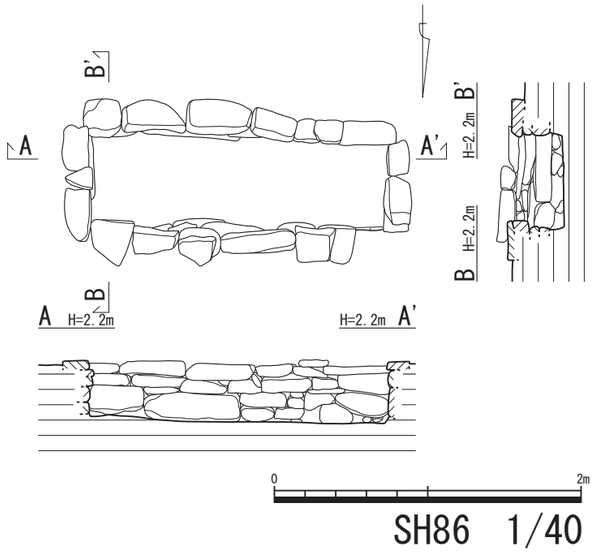
SH88

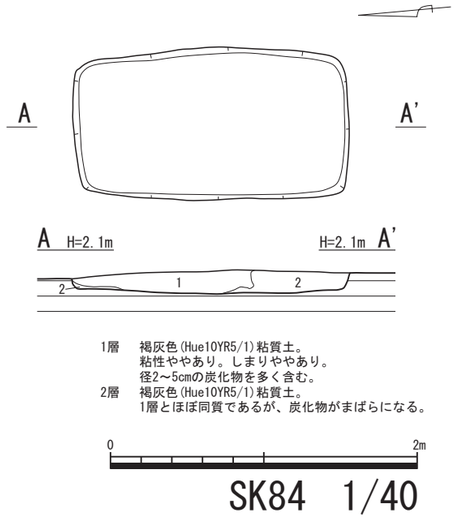
Ｃ－４グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。遺構の隅はやや丸みを帯びている。南西側の石積みが欠失している。石積みは主に砂岩を用いていて、２～３段を積んでいる。積み方は比較的丁寧である。遺物は検出できなかった。

SX89

Ｄ－４グリッドで検出した長方形を呈するであろう不明遺構である。石組遺構の可能性もあるが、SX65と同じように、溝（SD68）に接している。SX65と本遺構共に溝と接することから、洗い場のような性格で用いられていた可能性がある。他遺構との切り合い関係は、SD68に切られているため、SD68より古いと思われるが、SD68との間を石積みで区画する以前は、同時期に属していた可能性がある。石積みは主に砂岩を用いていて、１～２段積んでいる。積み方はやや粗い。遺物は陶磁器が出土した。







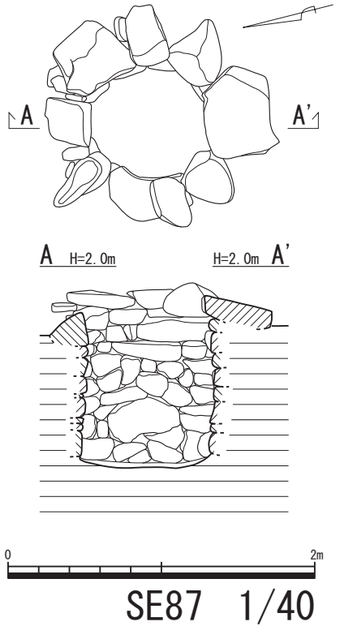
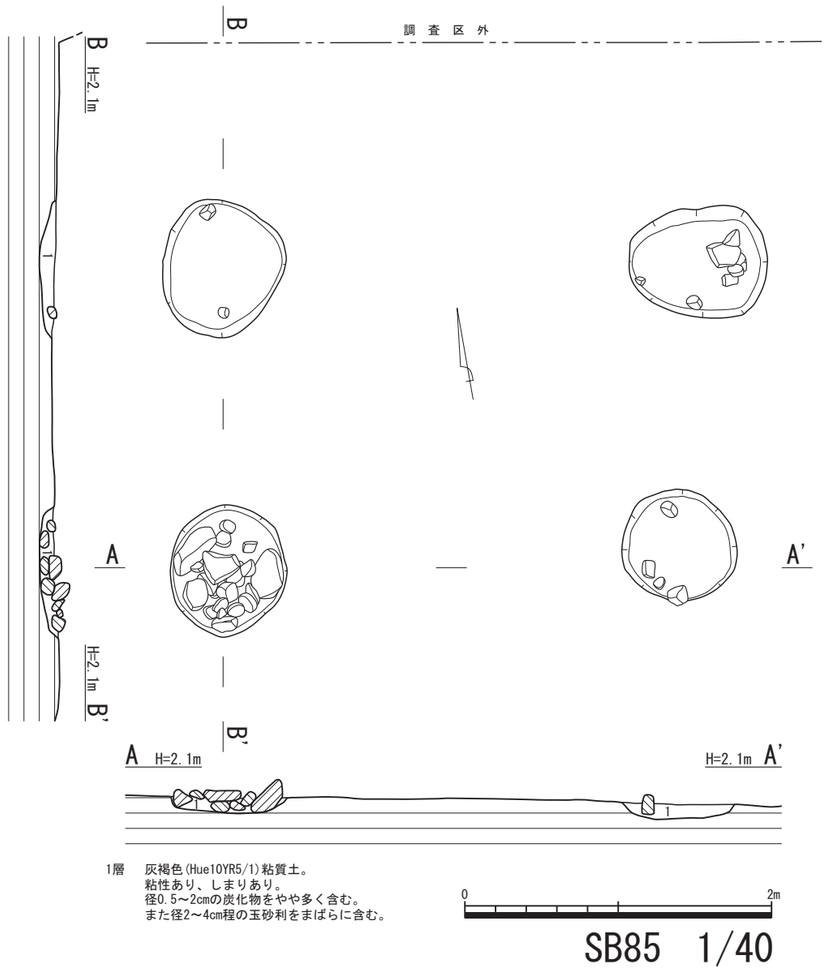


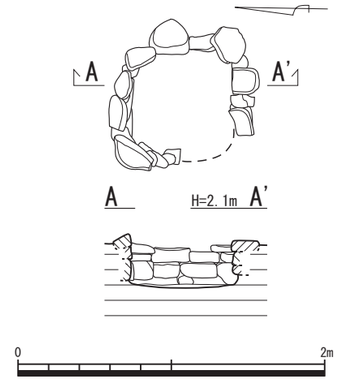
図44　遺構詳細図㊱



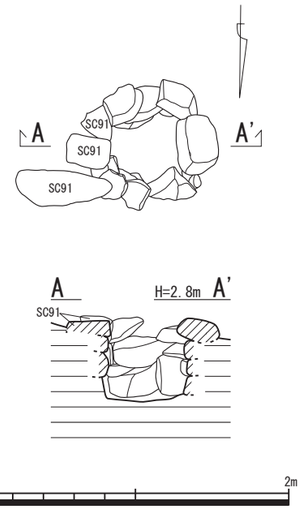
1層　灰褐色(Hue10YR5/1)粘質土。
粘性あり、しまりあり。
径0.5～2cmの炭化物をやや多く含む。
また径2～4cm程の玉砂利をまばらに含む。

0　2m

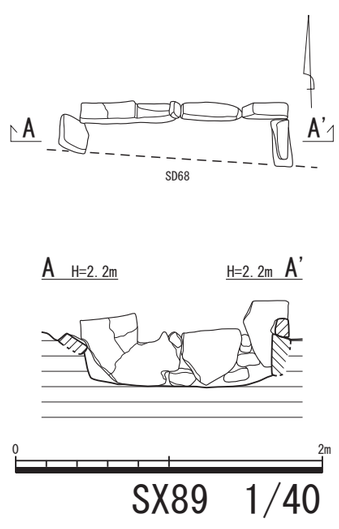
SB85　1/40



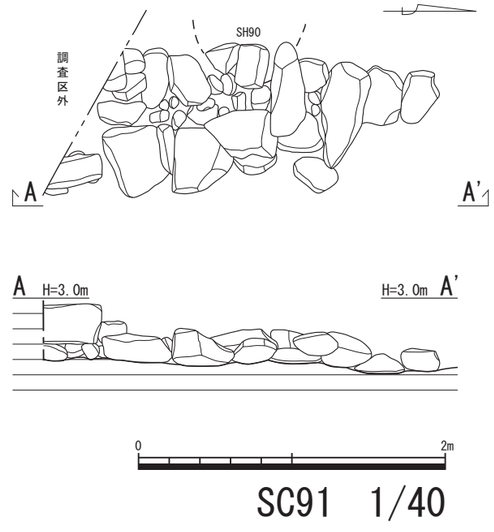
SH88　1/40



SH90　1/40



SX89　1/40



SC91　1/40

図45　遺構詳細図㊲

図46　遺構詳細図㊳

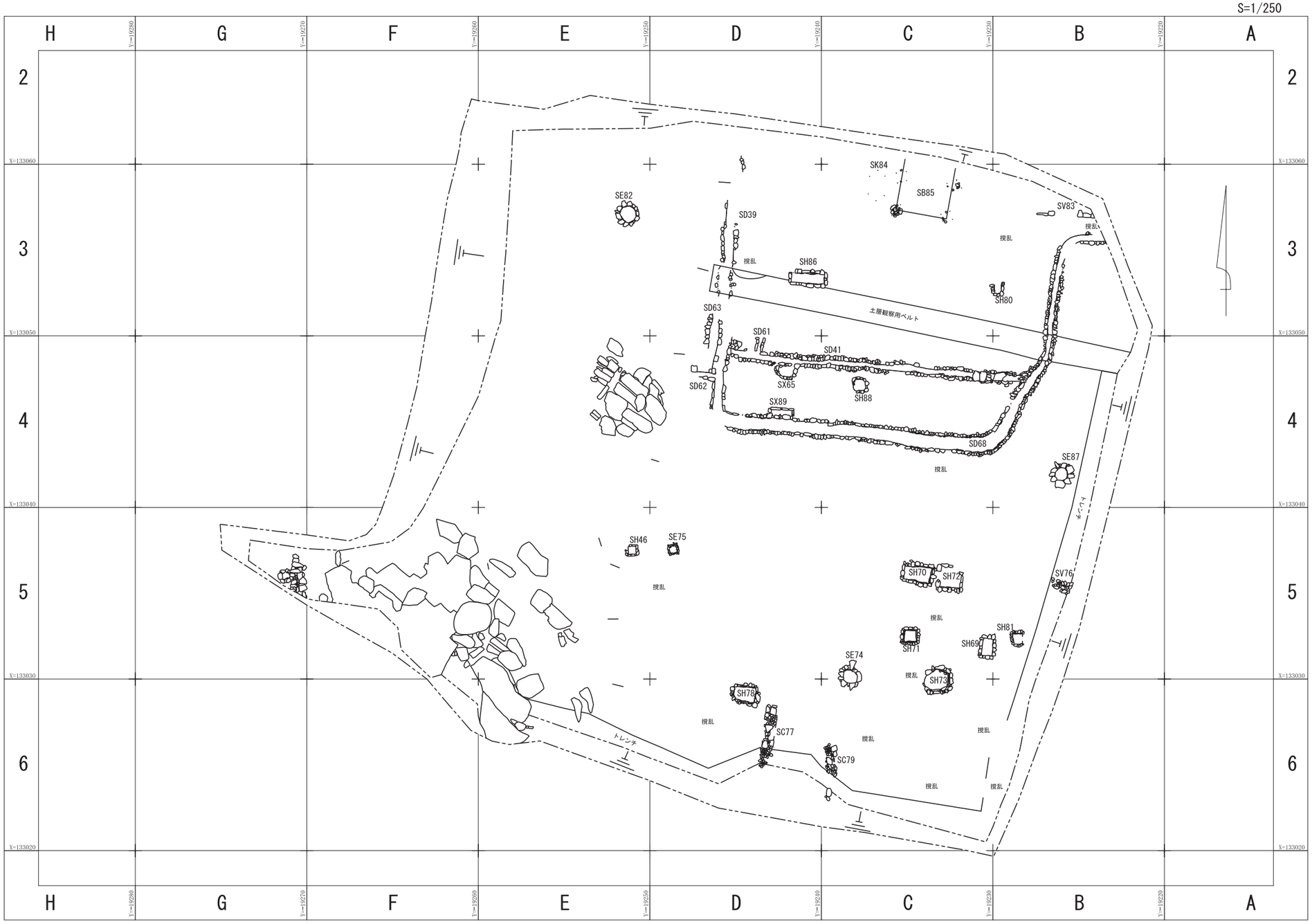
SH90

G－５グリッドで検出した方形を呈する小規模な石組遺構である。SC91が本遺構の東側を切っているため、SC91より古いと考えられる。石積みは主に砂岩を用いていて、３～４段積んでいる。積み方はやや粗い。遺物は陶磁器が出土した。

SC91

南北方向に直線的に並ぶ石壁遺構である。本遺構がSH90の東側を切っているため、SH90よりは新しいと考える。石積みは調査区南端において２～３段積まれていて、それ以外は根石が残存している。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

S=1/250



日本測地系

図47　遺構配置図③（3面目　1/250）

第４項　中　　世

今回の調査で確認した４面の遺構検出面のうち、最も古い年代（中世末～江戸時代前期前半）の検出面である。この遺構面からは、井戸１基、石組遺構４基、石列１基、不明遺構３基の、合計９基の遺構を検出した。

SH92

Ｂ－３グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。今回の発掘調査で検出した石組遺構の中では長軸の面で最大級である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、１～４段積んでいる。遺物は陶磁器が出土した。

SV93

南北方向に人為的に粗く積まれた石列である。他遺構との切り合い関係は見られない。石材は主に砂岩を用いている。遺物は検出できなかった。

SH94

Ｃ－３グリッドで検出した長方形を呈する石組遺構である。他遺構との切り合い関係は見られない。今回の発掘調査で検出した石組遺構の中では最大級で、丁寧なつくりをしている。石積みは主に砂岩を用いていて、１～４段を積んでいる。遺物は検出できなかった。

SE95

Ｄ－６グリッドで検出した円形を呈する井戸である。石積みは主に砂岩を用いていて、残存状況の良いところで４段を積んでいる。深さは40cm～50cm 程度で、井戸にしては浅いが、検出地点が海抜約１ｍであるため、浅くても井戸としての役割を果たせていたと推察される。遺物は陶磁器が出土した。

SX96

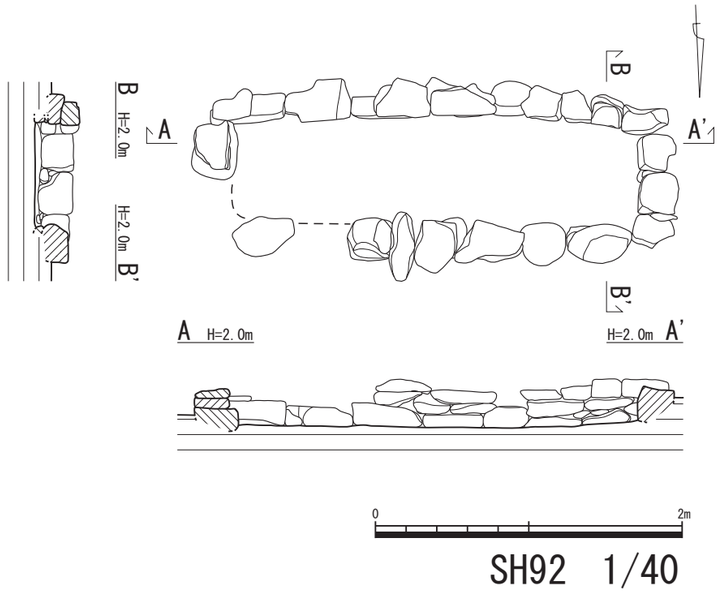
Ｄ－４グリッドで検出した不明遺構である。北西隅の礫は長さ40cm 程の石材を人為的に立てており、さらにこの石には人為的に空けられた孔が見られる。直径４cm～５cm 程の孔である。その石を取り囲むように３石の礫が見られる。遺物は検出できなかった。

SH97

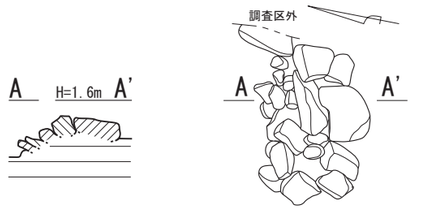
Ｄ－５グリッドで検出した石組遺構である。今回の発掘調査で検出した他の石組遺構と比較すると、つくりが非常に丁寧である。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、３～６段積んでいる。また、底には水が溜まる。遺物は検出できなかった。

SH98

Ｃ－５グリッドで検出した石組遺構である。残存状況が非常に悪く、長方形を呈していたであろうと考えられる。他遺構との切り合い関係は見られない。石積みは主に砂岩を用いていて、１～３段積んでいる。遺物は検出できなかった。

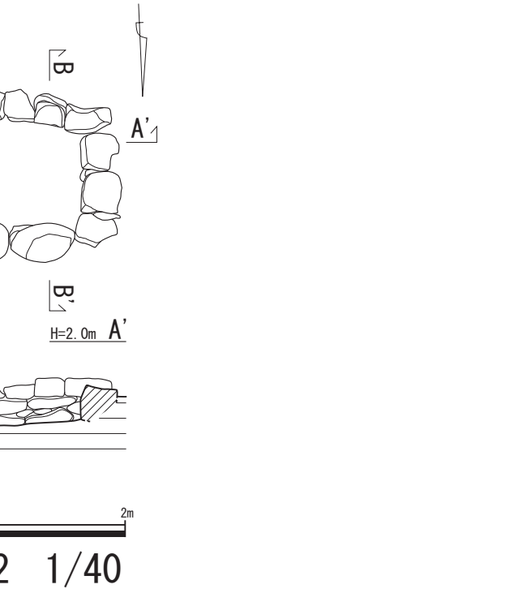


SH92　1/40



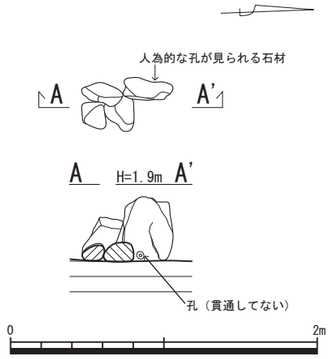
SV93　1/40

SE95　1/40

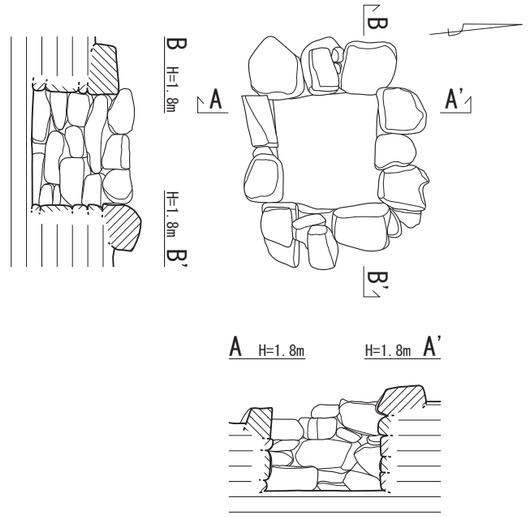


SH94　1/40

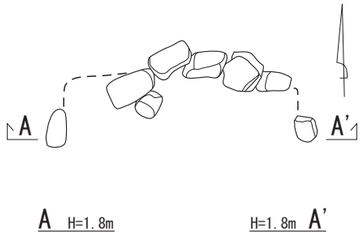
図48　遺構詳細図㊴



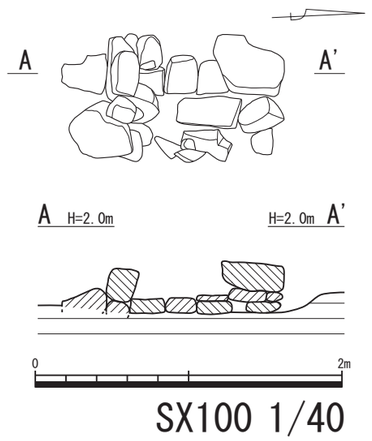
SX96　1/40



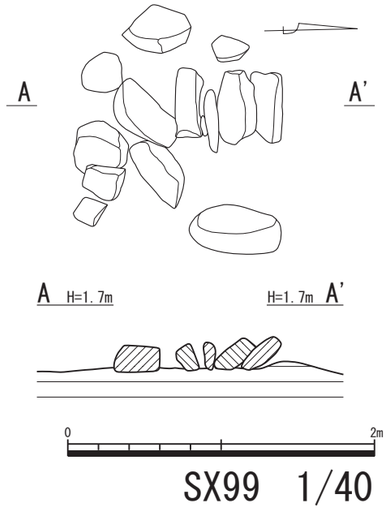
SH97　1/40



SH98　1/40



SX100　1/40



SX99　1/40

図49　遺構詳細図㊵

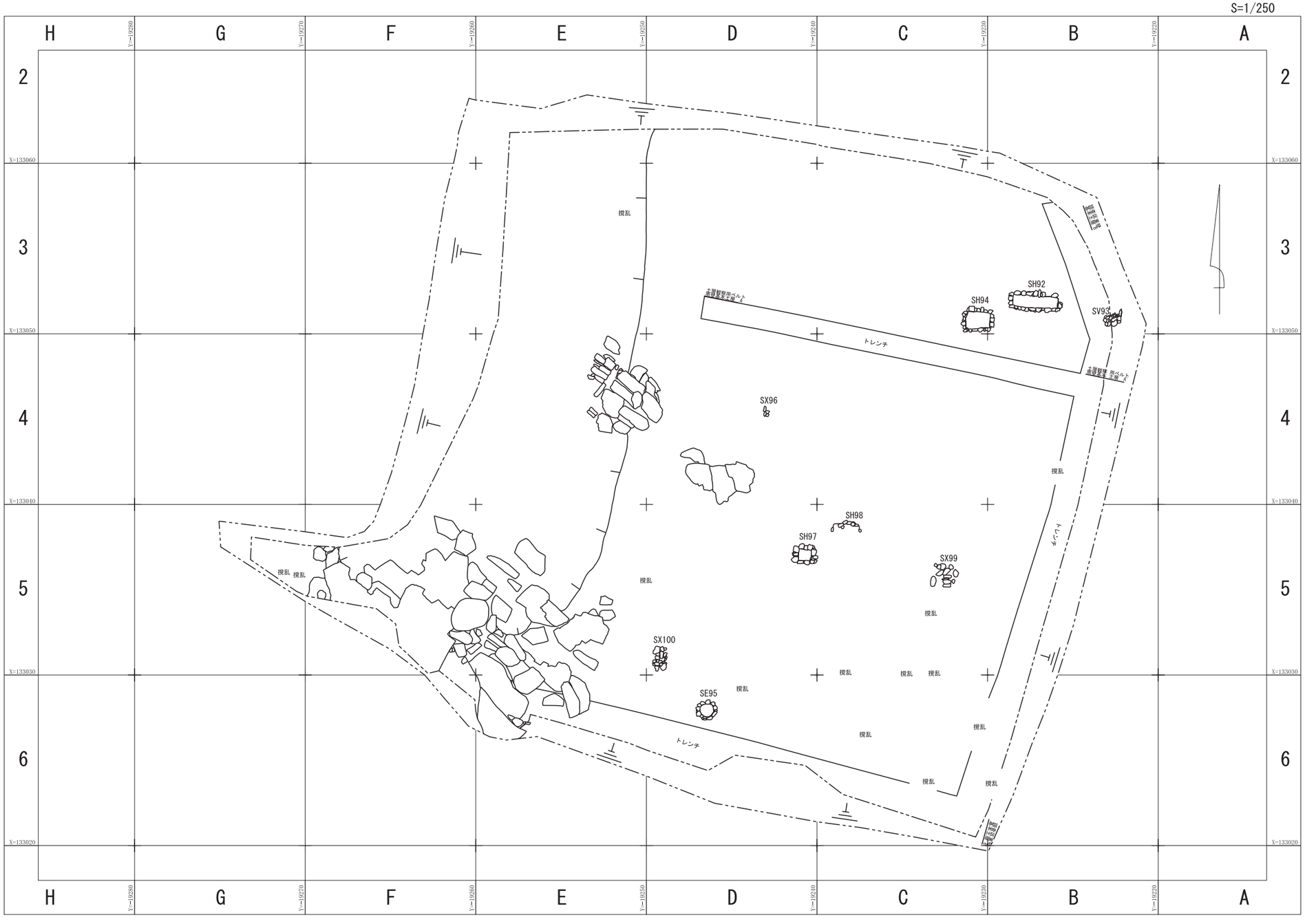
SX99

C－５グリッドで検出した不明遺構である。人工的に作出された石材が集中し、中央には平らな石材が並んでいて、その内南側４石は立った状態となっている。遺構の性格は不明である。遺物は検出できなかった。

SX100

D－５グリッドで検出した不明遺構である。人為的に石材が並べられている。石材は主に砂岩を用いていて１～３段積んでいるが、西側の下部１段目には並び積まれている箇所があるため、石組遺構である可能性もあるが明確ではない。遺物は検出できなかった。

S=1/250



日本測地系

図50　遺構配置図④（4面目　1/250）

第３節　遺構面別出土遺物

今回の調査では、総数約9,900点が出土した。内訳は、陶磁器が全体の85％にのぼる約8,900点、金属製品が約230点、土器が約70点、石器約30点、他約670点である。全体のほとんどをしめる陶磁器について、その一部を出土した層順に詳述する。

第１項　近代～現代

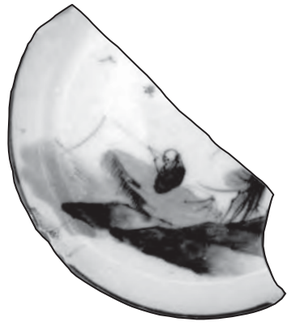
１a・b 層

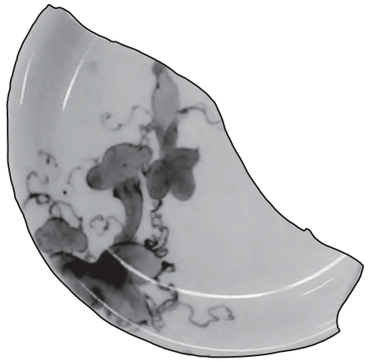
近代～現代にかけての攪乱層である。この層からは、陶磁器が1034点出土した。その一部を詳述する。

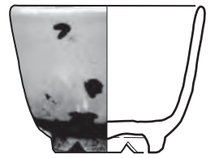
1は対州窯の灰釉陶器小杯である。高台は切り高台で、腰から高台にかけて露胎となる。胎土は磁器質である。文様は外面に立鶴象嵌が施されている。**2**も対州窯の黄釉陶器小杯である。高台は切り高台である。内～口縁まで施釉され、外～高台まで露胎となる。文様は、外面に立鶴象嵌が施されている。**3**は対州窯と思われる染付芙蓉手龍文皿である。高台畳付が露胎となる。**4**は対州窯と思われる染付人物文皿である。呉須の発色が良く完全に磁器化している。高台内は薄く削られている。文様は外面には判読不明の文字文が描かれ、内面には釣人の人物文が描かれている。**5**は肥前系もしくは対州窯と思われる染付草花文皿である。見込は輪状に釉薬が剥がされ、見込・高台畳付にはアルミナが付着する。**6**は肥前系の染付皿である。高台畳付は露胎となる。　高台内には渦福が描かれている。文様は内・外面ともに蔓文が描かれている。**7**は上野・高取系と思われる灰釉陶器鉢である。口縁部に泊釉が施され、高台は露胎となる。**8**は朝鮮の白磁鉢である。口縁部は端反りとなっている。高台は露胎となり、円盤状高台である。見込に福物が描かれている。**9**は朝鮮と思われる灰釉陶器小皿である。口縁から高台まで露胎となる。平高台である。灯明具に転用されていたと考えられる。**10**は肥前系の灰釉陶器小杯である。灰釉もしくは藁灰釉が施されている。体下部から高台にかけて露胎となる。**11**は肥前系の灰釉陶器小杯である。体下部から高台にかけて露胎となる。見込に胎土目跡が３箇所残る。**12**は朝鮮の粉青沙器碗である。高台畳付が露胎となる。内面に連続文が描かれている。**13**は越州窯系の青磁碗である。体下部から高台にかけて露胎となる。円状高台である。見込に目跡が残る。**14**は国産の瓦質火鉢である。文様は外面に雷文のスタンプが施されている。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	灰釉陶器小杯(立鶴)	対州	18C～19C	6.2	4.8	3.1	立鶴(象嵌)		1a･b 層		切り高台、腰から高台は露胎、胎土は磁器質
2	黄釉陶器小杯(立鶴)	対州	18～19C	7.1	4.4	3.6	立鶴(象嵌)	－	1a･b 層		切り高台、内～口縁まで施釉、外から高台まで露胎
3	染付芙蓉手龍文皿	対州か	18C～19C	13.5	2.5	6.3	－	芙蓉手見込龍文	1a･b 層		高台畳付露胎、半磁器
4	染付人物文皿	対州か	18C～19C	12.8	2.0	7.2	文字(不明)	人物(釣人)、文字(不明)	1a･b 層		呉須発色良く完全に磁器化、高台内薄く削る
5	染付草花文皿	肥前か対州	18C か	13.7	4.2	5.8	－	草花文	1a･b 層		見込み輪状釉剥ぎ、見込み･高台畳付にアルミナ
6	染付皿	肥前	17C 終～18C 前	15.1	2.7	8.2	草文(蔓文)	蔓文	1a･b 層		高台畳付露胎、高台内渦福
7	灰釉陶器鉢	上野・高取系か	17C 前	17.4	7.6	10.2	－	－	1a･b 層		口縁部に白釉、高台露胎、(朝鮮唐津)
8	白磁鉢	朝鮮	16C～17C	11.0	4.5	4.6	－	－	1a･b 層		端反り、高台露胎,円盤状高台、見込みに福物
9	灰釉陶器小皿	朝鮮か	16C～17C	7.9	2.3	3.9	－	－	1a･b 層		口縁～高台露胎、胎土精成、平高台、灯明具に転用
10	灰釉陶器小杯	肥前	16C 末～17C 初	8.0	5.5	4.2	－	－	1a･b 層		灰釉もしくは藁灰釉か、体下部～高台露胎
11	灰釉陶器小杯	肥前	16C 末～17C 初	7.9	3.9	4.2	－	－	1a･b 層		体下部～高台露胎、見込に胎土目跡３ヶ所
12	粉青沙器碗	朝鮮	15C～16C	8.8	4.5	3.0	－	連続文	1a･b 層		高台畳付露胎
13	青磁碗	越州窯系	9C～10C	－	(2.5)	(8.5)	－	－	1a･b 層		体下部～高台露胎、円状高台、粗製品、見込目跡
14	瓦質火鉢	国産		－	－	－	スタンプ(雷文)	－	1a･b 層		赤褐色

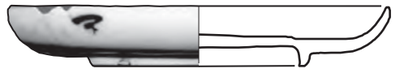
表２　出土遺物観察表①

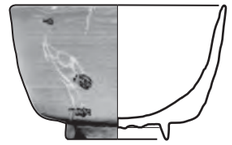




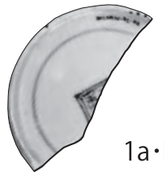


1a・b 層 -1



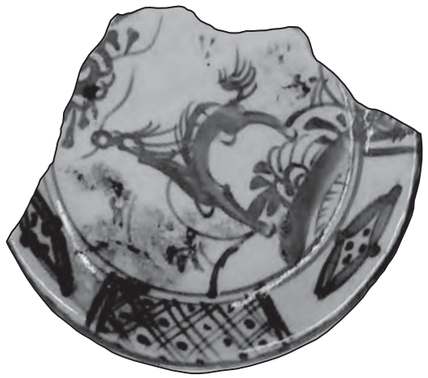


1a・b 層 -4

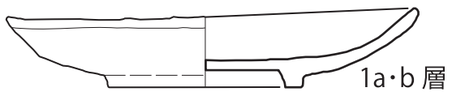


1a・b 層 -6

1a・b 層 -2



1a・b 層 -5



1a・b 層 -3

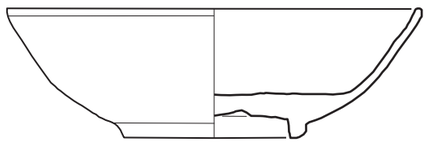
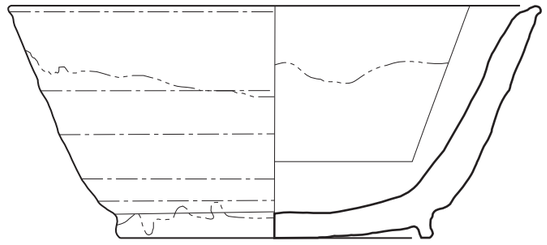
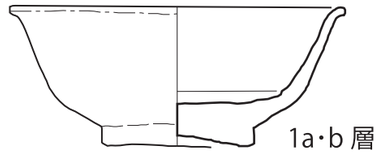


図51　出土遺物実測図①

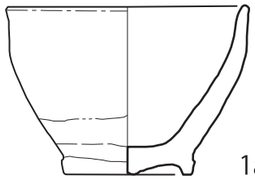


1a・b 層 -7

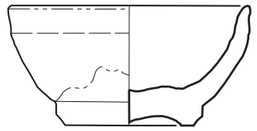


1a・b 層 -8

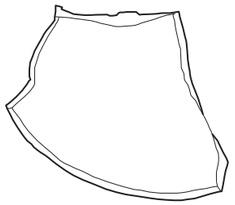
1a・b 層 -9

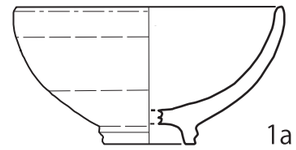


1a・b 層 -10

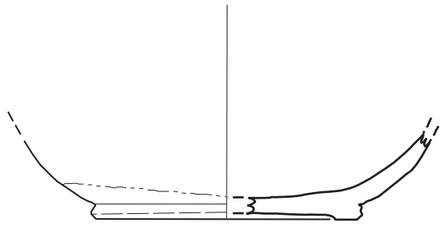


1a・b 層 -11

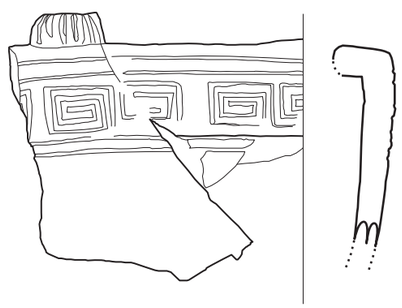




1a・b 層 -12



1a・b 層 -13



1a・b 層 -14

図52　出土遺物実測図②

第２項　江戸時代後期

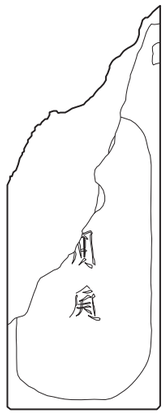
１．２ａ層

江戸時代後期の整地層である。この層からの陶磁器の出土は1,729点で、その一部について詳述する。

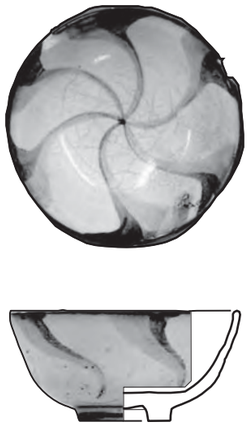
1は赤間ヶ関産と思われる硯である。裏面に刻字があり、「□間関」とある。**2**は朝鮮の灰釉碗である。見込及び高台に砂目が残り、胎土には黒色粒を含んでいる。**3**は瀬戸系の染付小杯である。外面にコバルト呉須で草花文を描いている。SX14から出土した。**4**は肥前もしくは対州と思われる染付小杯である。輪状高台で、内外面にねじ花文が描かれる。コバルト呉須で描かれたものと思われる。**5**は肥前の染付碗（くわらんか碗）である。文様は外面に草木文と格子文が描かれる。SD02から出土した。**6**は肥前の青磁輪花小皿である。高台畳付が露胎となる。内面に輪花文が型押しされている。**7**は肥前の白磁水滴である。底面が露胎となり、布目が残る。外面の上面に人物文が陽刻で描かれている。**8**は肥前の染付鳥文皿である。口縁部には鉄釉が施され、高台畳付は露胎となる。高台内には「大明成化年製」の銘がある。文様は内面に鳥文が描かれ、外面には唐草文が描かれている。**9**は肥前系の染付碗である。高台畳付が露胎となる。外面は花、野菜文が描かれ、内面に雷文が描かれている。SD13から出土した。**10**は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎となる。外面には唐草文、内面には草花文が描かれている。SH16から出土した。**11**は肥前系の染付碗である。高台畳付が露胎となる。外面に丸文が描かれている。SD22から出土した。**12**は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎となり、高台内に「大明年製」の銘がある。灯明具として使用されていた可能性がある。外面に草文、内面に草花文、虫文が描かれている。SD22から出土した。**13**は産地不明の白釉陶器脚付鉢である。内野山系かとも思われる。**14**は肥前系の刷毛目陶器碗である。胎土は灰色で、高台畳付が露胎となる。内外面ともに刷毛目文様が施されている。SD22から出土した。**15**は肥前の灰釉陶器碗である。見込が露胎となる。SD02から出土した。**16**は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎となる。外面には草花文と思われる文が描かれている。SH16から出土した。**17**は対州窯の灰釉陶器碗である。高台が露胎となる。SB01から出土した。**18**は肥前系の灰釉陶器皿である。折縁皿で、高台が露胎となる。見込に砂目が残る。SH08から出土した。**19**は肥前系の鉄絵陶器鉢である。絵唐津向付と思われる。透明に近いガラス質釉が貫入している。内面には草花文が描かれている。**20**は肥前系の灰釉陶器碗である。見込に圏線が引かれている。暗緑灰色ガラス質釉が施され、体下部から高台まで露胎となる。**21**は朝鮮の白地粉青陶器である。胎土は青灰色で黒色粒を含んでいる。上半には白化粒子も含まれている。SH28から出土した。**22**は国産の陶器碗である。19世紀から20世紀に作成されたものと思われる。口縁に鉄釉が施され、高台畳付が露胎となる。**23**は対馬産の窯道具（トチン）である。表面は赤褐色で、磁器化している。SD22から出土した。**24**は肥前系の灰釉陶器皿である。高台畳付が露胎となり、砂目が残る。**25**は肥前系の灰釉陶器輪花皿である。**26**は肥前系の染付丸碗である。高台畳付が露胎となる。外面に梅樹文が描かれている。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	硯	赤間ヶ関	近世	13.2	1.8	5.0			2a 層		裏面に文字「□間関」
2	灰釉碗	朝鮮	近世	－	(2.6)	(6.2)	－	－	2a 層		見込み、高台に砂目、胎土に黒色粒含む
3	染付小杯	瀬戸	19C～20C	6.8	4.2	2.9	草花文	－	2a 層	SX14	コバルト呉須
4	染付小杯	肥前か対州	19C～20C	7.6	3.6	3.0	ねじ花文	ねじ花文	2a 層	SX14	輪状高台、コバルト呉須か
5	染付碗	肥前	18C 中～後	10.9	6.2	4.5	草木文／格子文	－	2a 層	SD02	粗製染付（くらわんか）
6	青磁輪花小皿	肥前	18C	8.3	2.2	4.5	－	輪花文(型押し)	2a 層		高台畳付露胎
7	白磁水滴	肥前	18C か	6.7	1.3	4.5	上面に人物文(陽刻)	－	2a 層		底面露胎（布目のこる）
8	染付鳥文皿	肥前	17C 末～18C 前	19.9	3.8	12.9	唐草文	鳥文	2a 層		口縁部鉄、高台畳付露胎、高台内に「大明成化年製」
9	染付碗	肥前	18C	10.1	6.0	4.2	花、野菜か	雷文	2a 層	SD13	高台畳付露胎
10	染付皿	肥前	18C 前	12.0	2.1	7.9	唐草	草花文	2a 層	SH16	高台畳付露胎
11	染付碗	肥前	17C 後～18C	10.6	6.3	4.7	丸文	－	2a 層	SD22	高台畳付露胎
12	染付皿	肥前	17C 後～18C	10.2	2.5	6.0	草文	草花文、虫文	2a 層	SD22	高台畳付露胎、高台内に「大明年製」、灯明具として使用か
13	白釉陶器脚付鉢		17C 末～18C 初	24.8	7.6	20.4	－	－	2a 層		貫入あり　内野山系か
14	刷毛目陶器碗	肥前	17C 末～18C 初	10.8	5.0	3.9	刷毛目	刷毛目	2a 層	SD22	胎土灰色、高台畳付露胎
15	灰釉陶器碗	肥前	17C 終～18C 前	11.3	4.3	4.4	－	－	2a 層	SD02	見込露胎
16	染付皿	肥前	17C 後～18C 前	13.8	3.1	7.3	草花文か	不明	2a 層	SH16	高台畳付露胎
17	灰釉陶器碗	対州	17C	－	(4.8)	(5.5)	－	－	2a 層	SB01	呉器か、高台露胎
18	灰釉陶器皿	肥前	17C 前	13.2	3.7	4.2	－	－	2a 層	SH08	折縁皿、高台露胎、見込に砂目
19	鉄絵陶器鉢	肥前	16C 末～17C 初	－	(2.7)	－	－	草花文	2a 層		絵唐津向付か、透明に近いガラス質釉貫入
20	灰釉陶器碗	肥前	16C 末～17C 初	－	(6.2)	(4.7)	－	－	2a 層		見込に圏線、暗緑灰色ガラス質釉、体下部～高台露胎
21	白地粉青陶器	朝鮮	16C	－	(9.5)	(4.9)	－	－	2a 層	SH28	胎土青灰色、黒色粒含む、上半に白化粒子
22	陶器碗	日本	19C～20C	7.4	4.0	3.2	白砂、金彩	白釉	2a 層		口縁に鉄を塗る、高台畳付露胎
23	窯道具（トチン）	対馬	17C～19C	(11.2)	(3.8)	－	－	－	2a 層	SD22	表面赤褐色、磁器化
24	灰釉陶器皿	肥前	17C 前	11.0	3.3	4.6	－	－	2a 層		高台畳付露胎、砂目残る
25	灰釉陶器輪花皿	肥前	16C 末～17C 初	10.3	3.8	3.7	－	－	2a 層		
26	染付丸碗	肥前	18C	9.6	5.0	3.1	梅樹文	－	2a 層		高台畳付露胎、丸碗

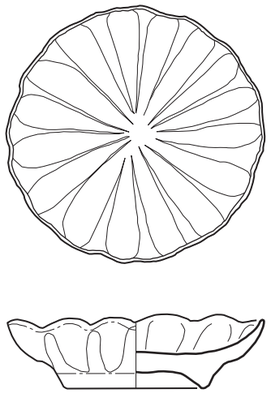
表３　出土遺物観察表②



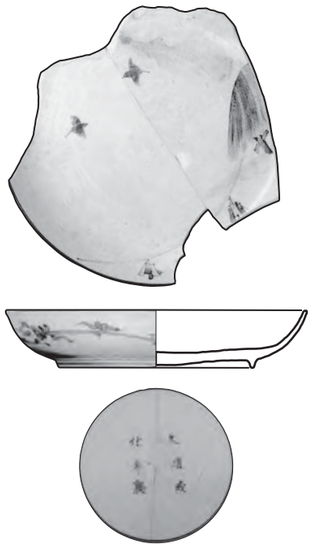
2a 層 -1



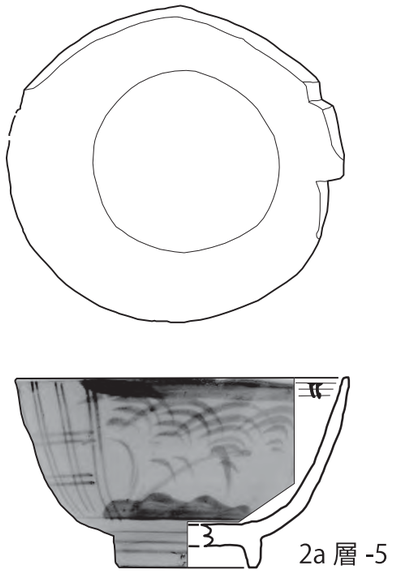
2a 層 -4



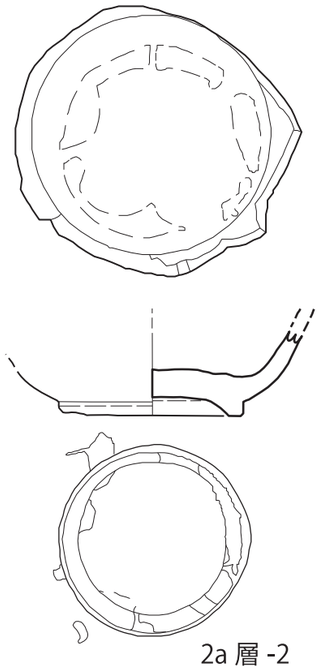
2a 層 -6



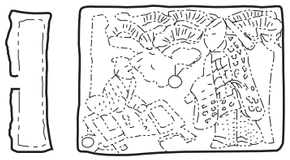
2a 層 -8（1/4）



2a 層 -5



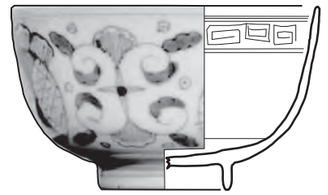
2a 層 -2



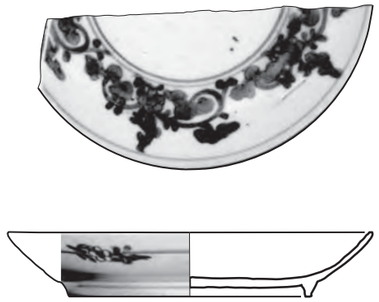
2a 層 -7

2 a 層 -3

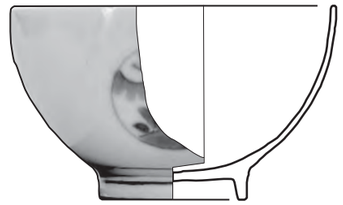
図53　出土遺物実測図③



2 a 層 -9

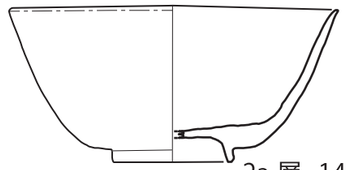


2a 層 -10

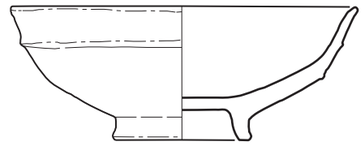


2a 層 -11

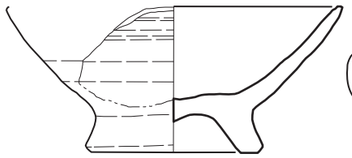
2 a 層 -12



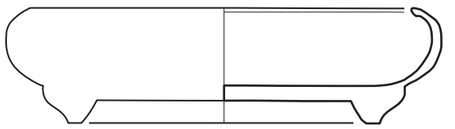
2a 層 -14



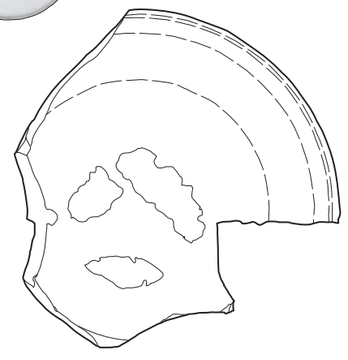
2a 層 -15



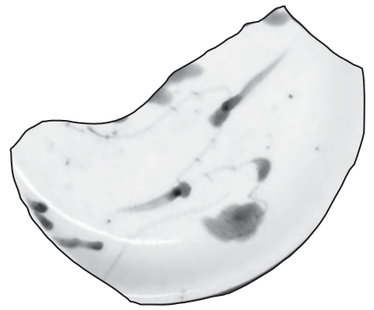
2a 層 -17

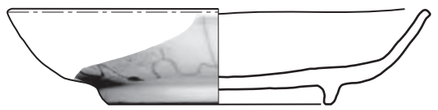


2a 層 -13（1/4）



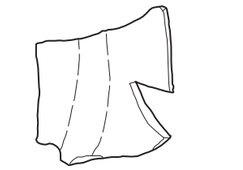
2a 層 -18



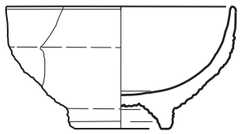


2a 層 -16

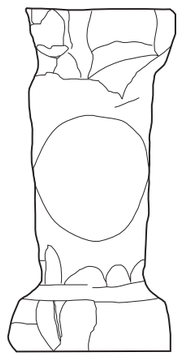
図54　出土遺物実測図④



2a 層 -19

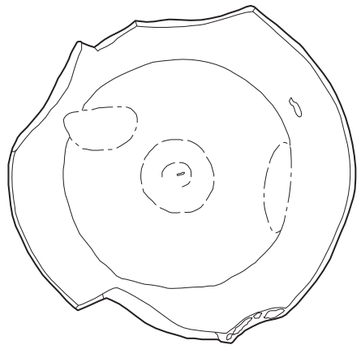


2a 層 -22

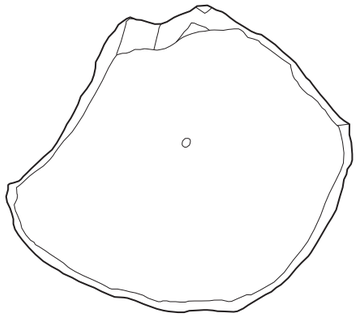


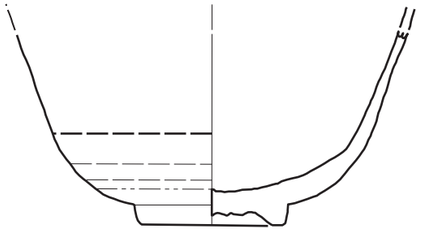
2a 層 -23

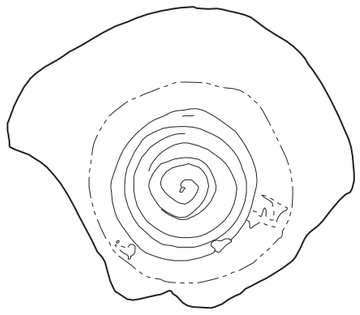
2a 層 -21（1/4）



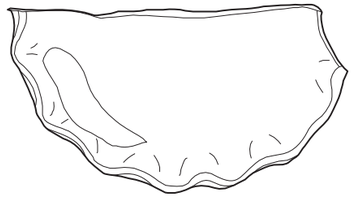
2a 層 -24

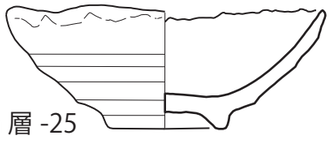




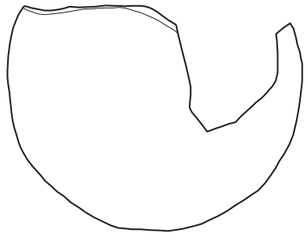


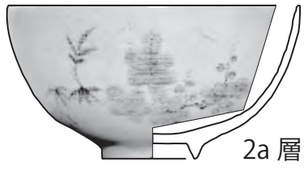
2a 層 -20





2a 層 -25





2a 層 -26

図55　出土遺物実測図⑤

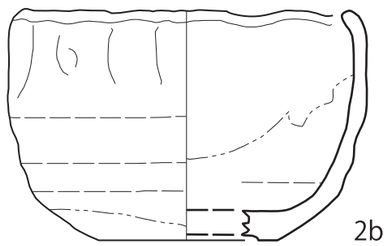
2．2b 層

江戸時代後期の造成土層である。この層からの陶磁器の出土は646点で、その一部を詳述する。

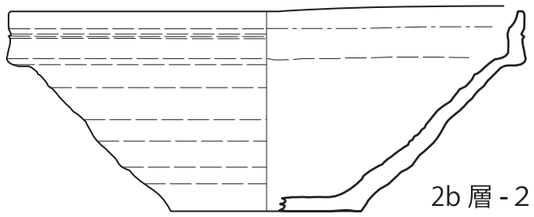
1 は肥前系の灰釉陶器灰落としである。輪花、削り高台である。内面及び高台が露胎となる。**2** は備前の焼締すり鉢である。表面は青灰色で、器肉はあずき色である。**3** は肥前系の灰釉陶器小杯である。外面体下部から高台にかけて露胎し、砂目が残る。**4** は朝鮮の白磁鉢である。口縁は端反りし、見込に目跡が残る。高台畳付が露胎となる。陶器質である。**5** は瀬戸美濃の鉄絵（志野）向付である。大窯製品と思われる。白濁したガラス質釉が施され、胎土は白灰色である。**6** は朝鮮産と思われる白磁皿である。見込に目跡が 4 箇所残る。高台は露胎となる。青味を帯びた白色釉が施されている。**7** は肥前系の黒褐釉壺である。口縁部が露胎となり、内面は轆轤目が残る。タタキ痕が残る。**8** は朝鮮の刷毛目陶器碗である。見込、高台畳付に目跡が残る。胎土は黒灰色である。**9** は肥前の灰釉陶器皿である。体下部から高台にかけて露胎となる。高台に胎土目跡が残る。**10**は肥前系の鉄絵大皿である。透明釉が施されている。胎土は黄灰色である。体下部から高台にかけて露胎している。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	灰釉陶器灰落し	肥前	17C 後～18C 初	10.5	7.5	6.0	－	－	2b 層		輪花、削り高台、内面、高台露胎
2	焼締すり鉢	備前	17C 前	34.0	13.2	12.5	－	－	2b 層		表面青灰色、器肉あずき色
3	灰釉陶器小杯	肥前	17C 初	7.0	4.3	2.7	－	－	2b 層		外面体下部～高台露胎、砂目残る
4	白磁鉢	朝鮮	16C～17C	－	(7.4)	(6.6)	－	－	2b 層		端反り、見込に目跡、高台畳付露胎、陶器質
5	鉄絵（志野）向付	瀬戸美濃	16C 末～17C 初	－	(5.0)	－			2b 層		大窯製品,白濁したガラス質釉,胎土白灰色(多孔質)
6	白磁皿	朝鮮か	16C～17C	14.0	3.5	6.0	－	－	2b 層		見込に目跡(4カ所)、高台露胎、青味をおびた白色釉
7	黒褐釉壺	肥前	16C～17C	(12.6)	(9.5)	－	－	－	2b 層		口縁部露胎、内面は轆轤目、タタキ痕
8	刷毛目陶器碗	朝鮮	16C	16.4	6.2	5.6	刷毛目	刷毛目	2b 層		見込目跡、胎土黒灰色、高台に畳付目跡あり
9	灰釉陶器皿	肥前	16C 末～17C 初	12.5	3.7	4.6	－	－	2b 層		体下部～高台露胎、高台に胎土目跡残る
10	鉄絵大皿	肥前	17C 前	33.6	10.6	11.4	－	草花文	2b 層		透明釉、鉄絃、胎土黄灰色、体下部～高台露胎

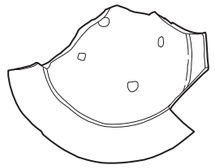
表 4　出土遺物観察表③

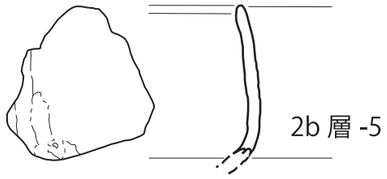


2b 層 -1



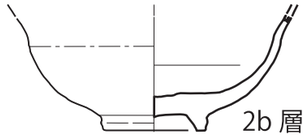
2b 層 - 2 （1/4）



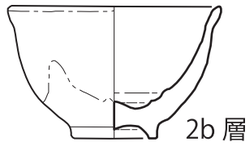


2b 層 -5

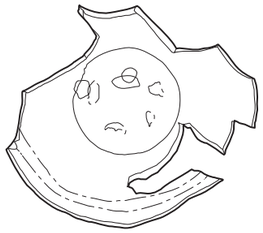
2b 層 -6（1/4）

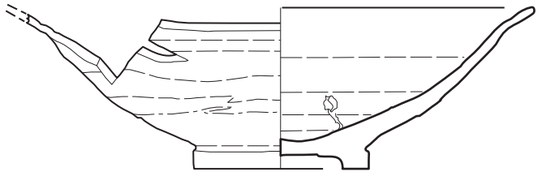


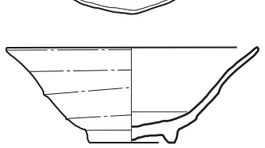
2b 層 -4（1/4）

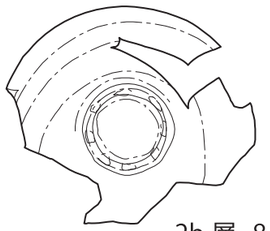


2b 層 -3

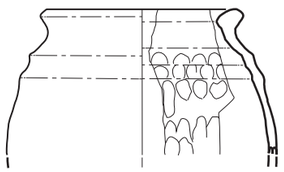




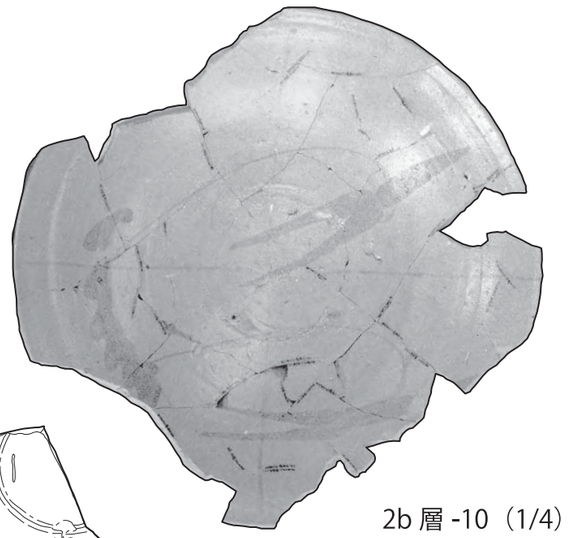




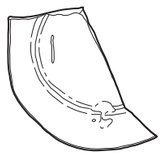
2b 層 -8（1/4）

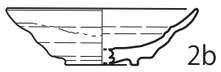


2b 層 -7（1/4）



2b 層 -10（1/4）





2b 層 -9（1/4）

図56　出土遺物実測図⑥

第 3 項　江戸時代前期後半

1．3a 層

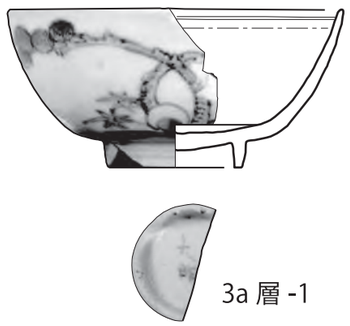
江戸時代前期後半の整地層である。この層からの陶磁器の出土は1,452点で、その一部を詳述する。

1 は肥前系の染付碗である。高台畳付が露胎となる。見込には「太明」の銘がある。外面には草木文、内面見込には花文が描かれている。**2** は肥前系の染付丸碗である。高台畳付が露胎となる。外面には草花文、四方襷文が描かれている。SE30から出土した。**3** は肥前系の染付小碗である。絵付けは型紙摺りと思われる。高台畳付が露胎となる。SE30から出土した。**4** は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎となる。ハリ支え跡が残る。高台内に渦福が描かれている。外面には花文が描かれる。3b・c層で出土した**6**　染付皿と組物と思われる。**5**、**6** は肥前系の刷毛目陶器碗である。どちらもSE30から出土した。**5** は胎土が白灰色で、高台畳付が露胎となる。**6** は胎土が灰色で高台畳付が露胎となる。**7** は肥前系の鉄釉陶器すり鉢である。口縁部に鉄釉を施している。胎土は赤褐色で、内面に1単位5条の摺り目が残る。**8** は肥前系の青磁鉢である。見込は露胎、もしくは蛇ノ目釉剥ぎされている。SH31から出土した。**9** は肥前系の灰釉陶器皿である。口縁部は端反りとなっている。腰から高台にかけて露胎となっている。藁灰釉を施している。SH31から出土した。**10**は肥前系の染付小杯である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付に砂が付着している。**11**は肥前の白磁杯である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付に砂が付着している。**12**は肥前の白磁小杯である。口縁部は端反りとなっている。高台が露胎となっている。**13**はタイの焼締四耳壺である。肩部に沈線が引かれている。自然釉が施されている。**14**は肥前の染付皿である。高台畳付が露胎となっている。砂が少し付着する。初期伊万里と思われる。3b・c層で出土した**18**　染付皿と、4b層で出土した**5**　染付皿と組物と思われる。**15**は中国の青花鉢である。外面には芙蓉手、草花文、宝文が描かれ、内面には芙蓉手、草花文、モンスターマスク、見込には鳥花文が描かれる。SB50から出土した。**16**は肥前系の灰釉陶器皿である。見込に砂目と胎土目と思われる痕跡が残る。外面体部から高台にかけて露胎となる。**17**は肥前系の灰釉陶器皿である。見込に砂目が残る。外面体下部から高台にかけて露胎となっている。SD68から出土した。**18**は朝鮮の雑釉陶器碗である。見込と高台畳付に目跡が残る。本来は灰釉と思われるが、釉がかかっていない。3b・c層で出土した22　雑釉陶器碗に類似している。SV47から出土した。**19**は朝鮮の青磁小皿である。見込に目跡が残る。高台は平高台で、露胎となる。粗製品である。SH31から出土した。**20**は朝鮮の白磁皿である。見込、高台畳付に目跡が残る。胎土は白灰色で、黒色粒子が貫入している。SH31から出土した。**21**は肥前の灰釉陶器皿である。　見込に胎土目跡が残る。体部から高台にかけて露胎となる。**22**は肥前系の灰釉陶器小杯である。平底で、糸切り痕が露胎する。**23**は中国の染付小皿である。見込は釉剥ぎされている。内面には呉須で圏線が引かれている。粗製品である。**24**は肥前系の灰釉陶器小杯である。平底で、糸切り痕が露胎する。**25**は肥前の灰釉陶器皿である。見込に胎土目跡が3箇所残る。高台は露胎となっている。**26**は肥前系の灰釉陶器小杯である。平底で、糸切り痕が露胎する。**27**は肥前系の灰釉陶器鉢である。体下部から高台にかけて露胎となっている。**28**は肥前系の灰釉陶器皿である。見込に胎土目跡が残る。体下部から高台にかけて露胎している。**29**は瀬戸美濃の灰釉陶器小皿である。見込は釉剥ぎされている。高台内に輪状の目跡が残る。胎土は黄灰色である。SB50から出土した。**30**は肥前系の灰釉陶器小杯である。

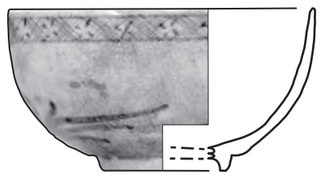
口縁部は端反りとなっている。腰から高台にかけて露胎となっている。SH31から出土した。**31**は肥前系の灰釉陶器碗である。高台が露胎している。SH31から出土した。**32**、**33**は肥前系の灰釉陶器皿である。**32**は見込に胎土目跡が４箇所残る。体下部から高台内にかけて露胎している。**33**は体下部から高台にかけて露胎している。畳付に胎土目跡が残る。どちらもSH31から出土した。**34**は中国の青花皿である。口縁部は端反りとなっている。畳付に砂が残る。内面に人物文・木文が描かれ、外面には花唐草文が描かれている。**35**は中国の青磁輪花皿である。高台内は釉剥ぎされている。見込にスタンプで文様が施されている。内面の口縁下には沈線が３条引かれている。**36**は国産のハソウである。自然釉がかけられている。黒灰色をしている。SH67から出土した。**37**は産地、制作時期ともに不明の石錘である。**38**は備前の焼締すり鉢である。**39**は対州窯と思われる染付碗である。胎土は粗い白灰色、化粧土をかけて呉須で文様を描いている。青味がかったガラス質釉が施されている。器形はいびつである。SE30から出土した。**40**、**41**は国産の土師皿で、いずれも制作地、制作時期は不明である。底に糸切り痕が残る。どちらもSH31から出土した。**42**は肥前系の灰釉陶器小杯である。体下部から高台にかけて露胎している。底に糸切り痕が残り、砂目が残る。SD44から出土した。**43**は肥前系の染付灰落としである。内面、高台が露胎している。外面には唐草文が描かれている。SE30から出土した。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	染付碗	肥前	18C	10.9	5.2	4.3	草木文	見込花文	3a層		高台畳付露胎、見込「太明」
2	染付丸碗	肥前	18C前	10.1	5.3	4.0	草花文､四方襷文	－	3a層	SE30	高台畳付露胎
3	染付小碗	肥前	18C前	8.2	4.9	3.4	雨降文、桐文	－	3a層	SE30	型紙摺り高台畳付露胎
4	染付皿	肥前	17C末～18C初	16.6	2.7	10.4	草文	花文	3a層		高台畳付露胎、ハリ支え跡､高台内渦福､31と組物
5	刷毛目陶器碗	肥前	17C末～18C初	11.1	6.3	4.2	刷毛目	刷毛目	3a層	SE30	胎土白灰色、高台畳付露胎
6	刷毛目陶器碗	肥前	17C末～18C初	10.4	4.8	3.8	刷毛目	刷毛目	3a層	SE30	胎土灰色、高台畳付露胎
7	鉄釉陶器すり鉢	肥前	17C	32.0	12.8	11.8	－	－	3a層		口縁部に鉄釉、胎土赤褐色、内面に１単位５条の摺り目
8	青磁鉢	肥前	17C	(25.6)	(8.5)	－	－	－	3a層	SH31	見込み露胎もしくは蛇ノ目釉剥ぎ
9	灰釉陶器皿	肥前	17C	13.1	3.7	4.2	－	－	3a層	SH31	端反り、腰～高台露胎、薬灰釉
10	染付小杯	肥前	17C後	7.2	4.8	2.9	不明	－	3a層		端反り、高台畳付に砂付着
11	白磁杯	肥前	17C後	11.0	5.8	4.6	－	－	3a層		端反り、高台畳付に砂付着
12	白磁小杯	肥前	17C中	5.2	2.8	2.0	－	－	3a層		端反り、高台露胎
13	焼締四耳壺	ﾀｲ(ﾒﾅﾑﾉｲ)	17C前	－	－	－	－	－	3a層		肩部に沈線、自然釉
14	染付皿	肥前	17C前	13.2	3.0	5.4	－	波文(陰刻)､草花文(見込)	3a層		高台畳付露胎､砂少し､(初期伊万里)72､78と組物
15	青花鉢	中国	17C初	10.2	5.0	4.1	芙蓉手､草花文､宝文	芙蓉手、草花文、見込み花文、モンスターマスク	3a層	SB50	カラック磁器､モンスターマスク(兜鉢)､森毅分類皿Ⅰ
16	灰釉陶器皿	肥前	17C初～前半	13.0	4.0	4.4	－	－	3a層		見込みに砂目と胎土目か､外面体部～高台露胎
17	灰釉陶器皿	肥前	17C前	15.0	3.4	5.0	－	－	3a層	SD68	見込に砂目、外面体下部～高台露胎
18	雑釉陶器碗	朝鮮	16C～17C	14.4	6.0	5.2	－	－	3a層	SV47	見込と高台畳付に目跡、釉がかかっていない（本来は灰釉か)、87に似ている
19	青磁小皿	朝鮮	16C～17C	8.7	2.0	4.2	－	－	3a層	SH31	見込に目跡、平高台露胎、粗製品
20	白磁皿	朝鮮	16C～17C	19.2	5.5	8.0	－	－	3a層	SH31	見込高台畳付に目跡、胎土白灰色、黒色粒子貫入、汚れ
21	灰釉陶器皿	肥前	16C末～17C初	11.0	3.6	3.8	－	－	3a層		見込に胎土目跡、体部～高台露胎
22	灰釉陶器小杯	肥前	16C末～17C初	8.0	3.5	3.3	－	－	3a層		平底、糸切り痕露胎
23	染付小皿	中国	16C～17C	10.0	3.0	4.8	－	－	3a層		見込釉剥ぎ、呉須圏線のみ、粗製品
24	灰釉陶器小杯	肥前	16C末～17C初	7.8	3.6	3.8	－	－	3a層		平底、糸切り痕露胎
25	灰釉陶器皿	肥前	16C末～17C初	13.4	4.1	4.4	－	－	3a層		見込に胎土目跡（３カ所)、高台露胎
26	灰釉陶器小杯	肥前	16C末～17C初	7.8	4.0	4.2	－	－	3a層		平底、糸切り痕露胎
27	灰釉陶器鉢	肥前	16C末～17C初	16.8	9.6	6.7	－	－	3a層		体下部～高台露胎
28	灰釉陶器皿	肥前	16C末～17C初	13.1	4.0	4.2	－	－	3a層		見込に胎土目跡、体下部～高台露胎
29	灰釉陶器小皿	瀬戸美濃	16C末～17C初	11.0	2.1	5.8	－	－	3a層	SB50	見込釉はぎ､高台内輪状目跡､(削ぎ皿)､胎土黄灰色
30	灰釉陶器小杯	肥前	16C末～17C初	7.0	5.8	4.2	－	－	3a層	SH31	端反り、腰～高台露胎
31	灰釉陶器碗	肥前	16C末～17C初	11.9	5.1	5.0	－	－	3a層	SH31	高台露胎
32	灰釉陶器皿	肥前	16C末～17C初	14.0	4.4	5.2	－	－	3a層	SH31	見込に胎土目跡（４カ所)、体下部～高台内露胎
33	灰釉陶器皿	肥前	16C末～17C初	11.0	3.1	4.4	－	－	3a層	SH31	体下部～高台露胎、畳付に胎土目跡
34	青花皿	中国	16C後	12.0	2.5	6.3	花唐草	人物・木	3a層		端反り、畳付に砂、小野正敏分類（1982）B２
35	青磁輪花皿	中国	15C	13.3	3.1	5.8	－	見込スタンプ､口縁下に沈線(３条)	3a層		高台内釉剥ぎ
36	ハソウ	国産	５C～６C	－	(7.5)	(1.6)	－	－	3a層	SH67	自然釉かかる、黒灰色
37	石錘		不明	7.6	－	0.8	－	－	3a層		
38	焼締すり鉢	備前	17C	23.4	9.2	12.0	－	－	3a層		
39	染付碗	対州か		(15.0)	(6.2)	－	不明	－	3a層	SE30	胎土粗く白灰色、化粧土をかけ呉須で文様 青味がかったガラス質釉、器形いびつ
40	土師皿	日本	不明	9.4	1.6	6.8	－	－	3a層	SH31	糸切り底
41	土師皿	日本	不明	12.1	2.8	8.2			3a層	SH31	糸切り底
42	灰釉陶器小杯	肥前	16C末～17C初	8.2	3.7	3.6	－	－	3a層	SD44	体下部～高台露胎、糸切り痕、砂目残る
43	染付灰落	肥前	17C後～18C	12.0	7.3	5.3	唐草文	－	3a層	SE30	内面露胎、高台露胎

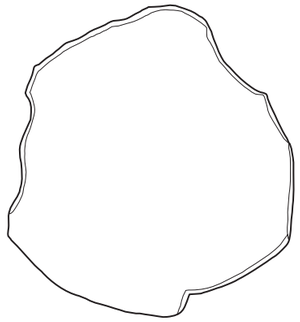
表５　出土遺物観察表④



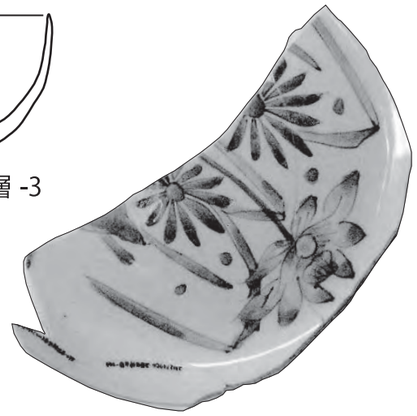
3a 層 -1

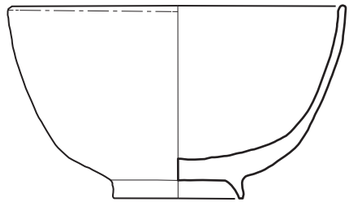


3a 層 -2

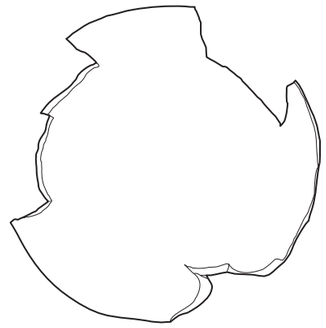


3a 層 -3

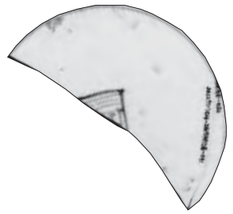


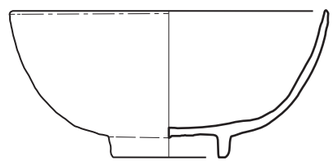


3a 層 -5

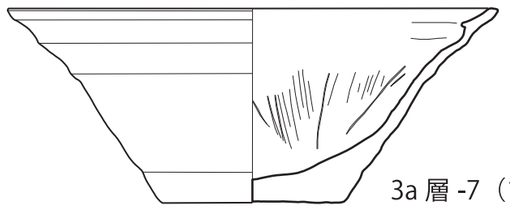


3a 層 -4

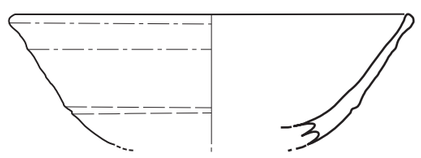




3a 層 -6

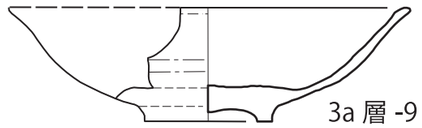


3a 層 -7（1/4）

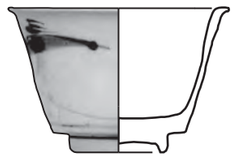


3a 層 -8

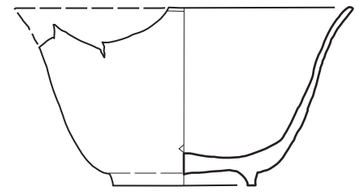
図57　出土遺物実測図⑦



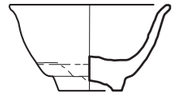
3a 層 -9

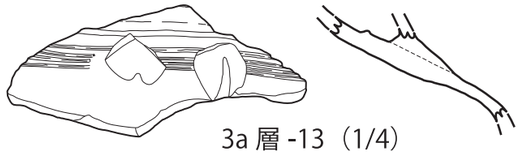


3a 層 -10

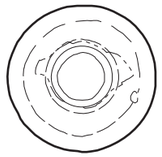


3a 層 -11

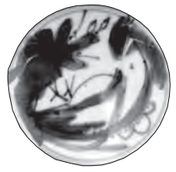


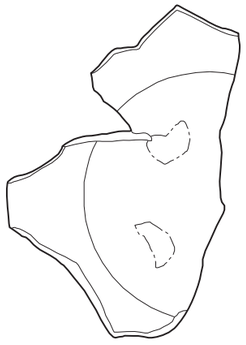


3a 層 -13（1/4）

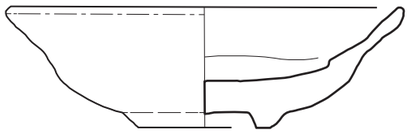


3a 層 -12



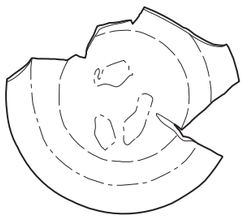


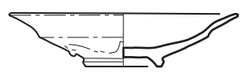
3a 層 -15



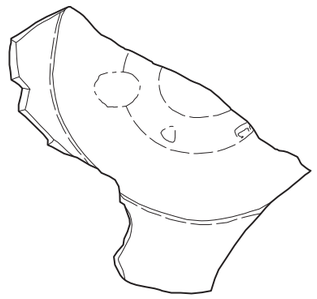
3a 層 -16

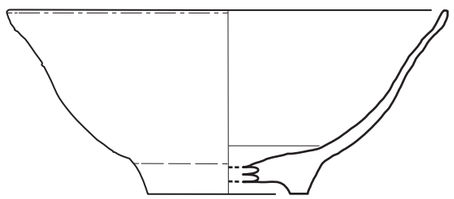
3a 層 -14





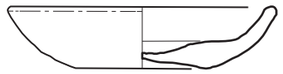
3a 層 -17(1/4)





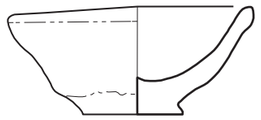
3a 層 -18

図58　出土遺物実測図⑧

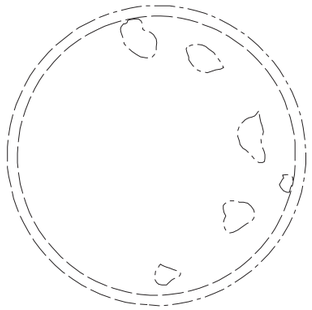


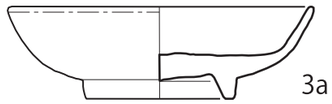
3a 層 -19

3a 層 -21

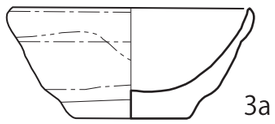


3a 層 -22

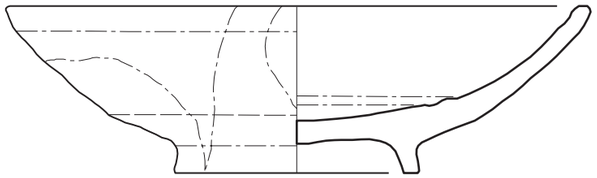


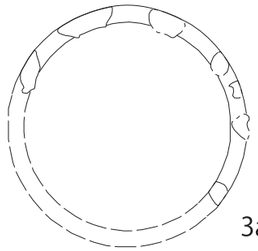


3a 層 -23

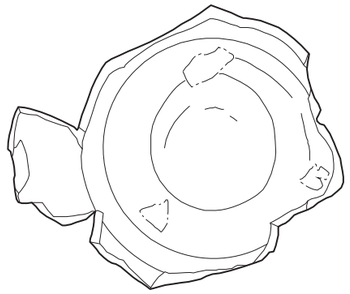


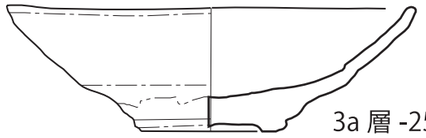
3a 層 -24



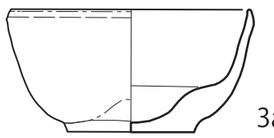


3a 層 -20

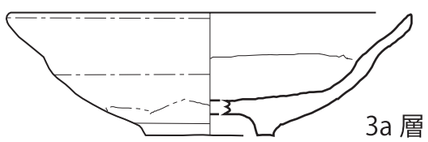




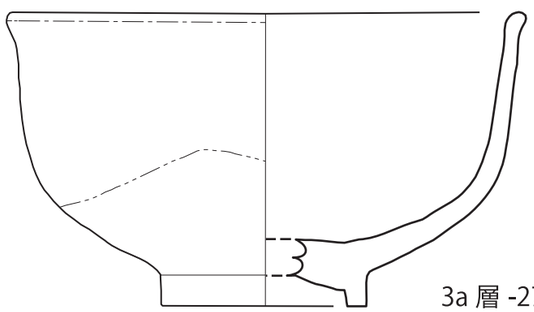
3a 層 -25



3a 層 -26

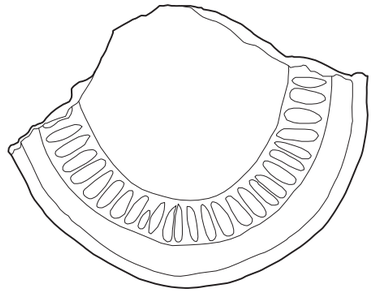


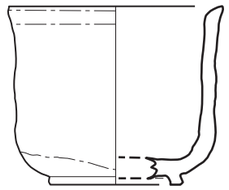
3a 層 -28



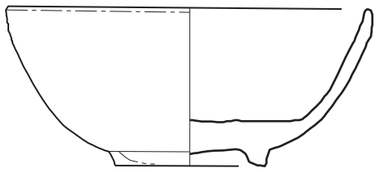
3a 層 -27

図59　出土遺物実測図⑨

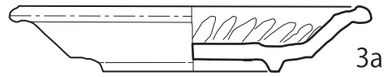




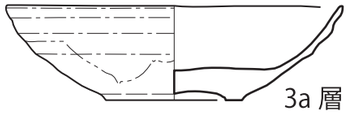
3a 層 -30



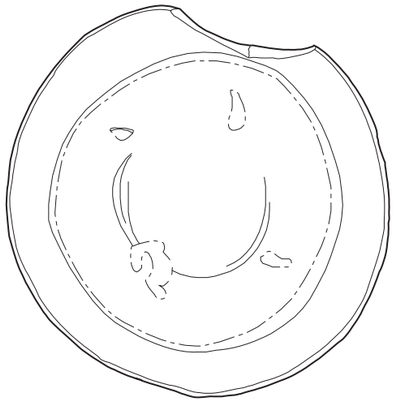
3a 層 -31

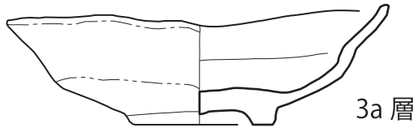


3a 層 -29



3a 層 -33

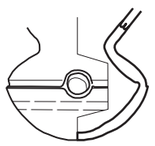


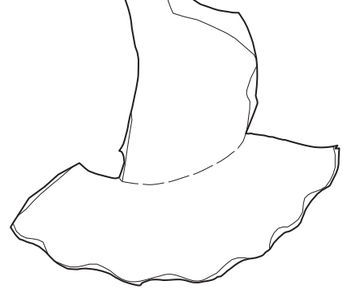


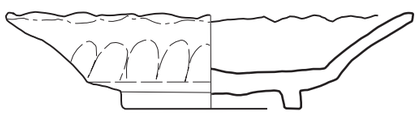
3a 層 -32

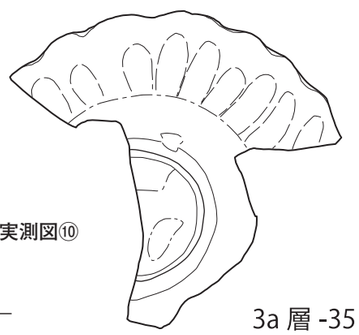
3a 層 -34

3a 層 -36（1/4）



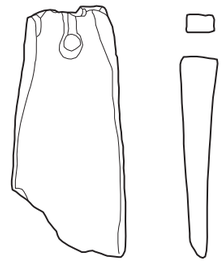




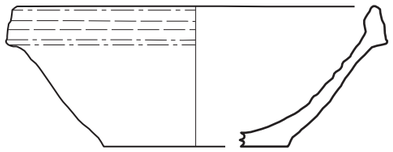


3a 層 -35

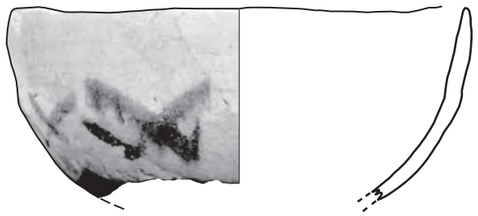
図60　出土遺物実測図⑩



3a 層 -37



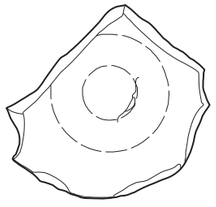
3a 層 -38

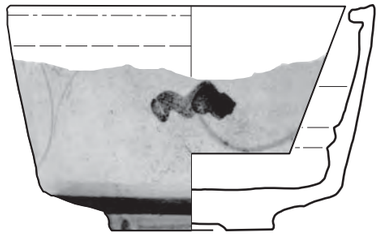


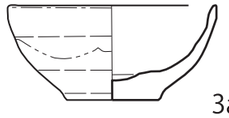
3a 層 -39

3a 層 -41

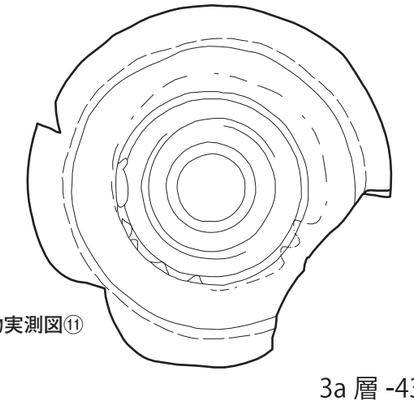
3a 層 -40







3a 層 -42



3a 層 -43

図61　出土遺物実測図⑪

2．3b・c層

江戸時代前期後半の造成土層である。この層からの陶磁器の出土は952点で、その一部を詳述する。

1は国産の黒釉陶器灰落しである。産地は不明である。口縁から外面にかけて黒色釉（鉄釉）が施されている。内面から高台内にかけて露胎している。**2**は肥前系の染付草花文皿である。口縁部に鉄釉が施されている。高台畳付が露胎している。高台内には渦福が描かれている。外面には唐草文が描かれ、内面には草花文が描かれている。**3**は肥前系の染付草木文杯である。高台畳付が露胎している。高台内に「大明年製」との銘がある。外面に草木文が描かれている。**4**は肥前系もしくは対州窯と思われる染付灰落しである。内面及び高台が露胎している。外面には梅樹文が描かれていて、下部には文字が書かれているが判読できない。**5**は肥前系の染付皿である。見込は蛇ノ目釉剥ぎされている。高台が露胎している。内面に一本線が引かれている。**6**は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎している。ハリ支え跡が残る。高台内には渦福が描かれている。外面には草文が描かれ、内面に花文が描かれている。3a層で出土した**4**染付皿と組物と思われる。**7**は肥前系の刷毛目陶器碗である。高台畳付が露胎している。**8**は肥前系の刷毛目陶器である。胎土は灰色で、高台畳付が露胎している。**9**は肥前系の染付皿である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付が露胎している。外面には点文が描かれ、内面に草花文が描かれている。**10**は産地不明の灰釉鉄絵陶器碗である。高台が露胎している。**11**は中国の青花碗である。高台畳付が露胎している。外面に花唐草文が描かれ、見込にも花唐草文が描かれている。**12**は肥前系の灰釉陶器皿である。高台が露胎している。**13**、**14**、**15**はいずれも肥前系の白磁小杯である。いずれも口縁部は端反りとなっている。また、全て高台が露胎している。**16**は肥前系の染付碗である。見込に雲龍荒磯文描かれ、外面にも雲龍文が描かれている。**17**はタイの焼締四耳壺である。**18**は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎していて、高台下に砂が少し残る。初期伊万里の可能性がある。内面には波文（陰刻）が描かれ、見込には草花文が描かれている。3a層から出土した**14**染付皿、4b層から出土した**5**染付皿と組物と思われる。**19**は肥前系の灰釉陶器である。折縁皿で、見込及び高台畳付に砂目が残る。**20**は上野・高取系と思われる黒褐釉陶器の蓋である。上面は施釉されているが、下面は露胎している。底面には糸切り痕がある。**21**は肥前系の灰釉陶器皿である。口縁部内側に沈線が引かれている。見込には砂目が残り、高台が露胎している。**22**は朝鮮の雑釉陶器碗である。釉が係っていないが本来は灰釉と思われる。見込と高台に目跡が残る。**23**は肥前系の灰釉陶器皿である。口縁部が露胎している。**24**、**25**は朝鮮の灰釉陶器壺で、どちらも複合口縁であり、同一個体と思われる。胎土は暗灰色で、暗緑灰色の釉が施されている。よく焼締まっている。**26**は中国の青花小杯である。高台内に「大明成化年製」との銘があり、畳付が露胎している。外面には草木文が描かれている。**27**は肥前系の藁灰釉皿である。見込は三角形に釉剥ぎされている。体下部から高台にかけて露胎している。**28**は瀬戸美濃の灰釉陶器小皿である。削ぎ皿である。緑灰色ガラス質の釉が施されている。胎土は黄灰色で、見込は釉剥ぎされている。高台内に輪状の目跡が残る。**29**は朝鮮の灰釉陶器小皿である。高台畳付に目跡が残る。**30**は朝鮮の無釉陶器壺である。内外面とも叩き成形の跡が残る。器肉はあずき色である。**31**は中国の青磁碗である。高台内は輪状に釉剥ぎされている。外面には細線蓮弁文が描かれ、内面に波状文が描かれている。**32**は東播系の瓦質こね鉢である。**33**は越州窯系の青磁碗である。**34**は中国産と思われる褐釉有耳壺である。胎土は白灰色で、口縁部が露胎している。**35**は中国産と思われる灰釉壺である。胎土は赤褐色で、粗い。肩部に目跡が残る。**36**は肥前系の灰釉陶器小杯である。体下部から高台にかけて露胎している。高台には胎土の目跡が残る。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	黒釉陶器灰落し	日本	18C～19C	13.6	6.8	6.8	－	－	3bc 層		口縁～外面黒色釉(鉄釉)、内面～高台内露胎
2	染付草花文皿	肥前	18C	20.0	3.2	12.3	唐草文	草花文	3bc 層		口縁部鉄、高台畳付露胎、高台内渦福
3	染付草木文杯	肥前	18C	6.9	3.6	2.6	草木文	－	3bc 層		高台畳付露胎、高台内に「大明年製」
4	染付灰落し	肥前か対州	18C	－	(3.4)	(6.2)	梅樹文か、下部に文字「□□□□」	－	3bc 層		内面、高台露胎
5	染付皿	肥前	18C	13.4	3.9	4.5	－	一本線あり	3bc 層		見込蛇ノ目釉剥ぎ、高台露胎（粗製）
6	染付皿	肥前	17C 末～18C 初	16.4	2.8	10.4	草文	花文	3bc 層		高台畳付露胎、ハリ支え跡、高台内渦福、32と組物
7	刷毛目陶器碗	肥前	17C 末～18C 初	12.5	3.5	4.9	刷毛目	刷毛目	3bc 層		高台畳付露胎
8	刷毛目陶器	肥前	17C 終～18C 初	10.0	6.3	4.8	刷毛目	刷毛目	3bc 層		胎土灰色、高台畳付露胎
9	染付皿	肥前	17C 後～18C 前	10.0	3.2	4.8	点文	草花文	3bc 層		端反り、高台畳付露胎
10	灰釉鉄絵陶器碗		17C 後～18C 前	13.0	5.4	4.2	松文	－	3bc 層		高台露胎（京焼風陶器）貫入あり
11	青花碗	中国	17C	10.4	5.4	4.8	花唐草文	花唐草文(見込)	3bc 層		高台畳付露胎
12	灰釉陶器皿	肥前	17C 後	13.4	4.7	5.2	－	－	3bc 層		高台露胎、貫入あり
13	白磁小杯	肥前	17C 中	4.8	2.9	2.0	－	－	3bc 層		端反り、高台露胎
14	白磁小杯	肥前	17C 中	6.0	3.5	2.0	－	－	3bc 層		端反り、高台露胎
15	白磁小杯	肥前	17C 中	6.4	4.1	2.6	－	－	3bc 層		端反り、高台露胎
16	染付碗	肥前	17C 中	14.6	6.7	6.2	雲龍文	見込雲龍荒磯文	3bc 層		見込雲龍荒磯文
17	焼締四耳壺	ﾀｲ(ﾒﾅﾑﾉｲ)	17C 前	－	－	－	－	－	3bc 層		
18	染付皿	肥前	17C 前	13.6	2.6	5.0	－	波文(蛸唐)、草花文(見込)	3bc 層		高台畳付露胎、砂少し、(初期伊万里)70、78と組物
19	灰釉陶器	肥前	17C 前	14.0	4.0	5.2	－	－	3bc 層		折縁皿、見込、高台畳付に砂目
20	黒褐釉陶器フタ	上野・高取系か	17C 前	9.2	2.8	4.2	－	－	3bc 層		上面施釉、下面露胎、底面糸切り痕
21	灰釉陶器皿	肥前	17C 前	16.0	4.2	5.9	－	－	3bc 層		口縁部内側に沈線巡る、見込みに砂目、高台露胎
22	雑釉陶器碗	朝鮮	16C～17C	13.5	5.9	5.8	－	－	3bc 層		釉がかかっていない(本来は灰釉か)、見込みと高台に目跡
23	灰釉陶器甕	肥前	16C～17C	(16.0)	(7.0)	－	－	－	3bc 層		口縁部露胎
24	灰釉陶器壺	朝鮮	16C～17C	(22.0)	(6.4)	－	－	－	3bc 層		複合口縁、胎土暗灰色、暗緑灰色釉、よく焼締まっている、90と同一個体か
25	灰釉陶器壺	朝鮮	16C～17C	(27.0)	(3.4)	－	－	－	3bc 層		複合口縁、胎土暗灰色、暗緑灰色釉、よく焼締まっている、89と同一個体か
26	青花小杯	中国	16C～17C	9.4	5.2	4.3	草木文	－	3bc 層		高台内「大明成化年製」、畳付露胎
27	藁灰釉皿	肥前	16C 末～17C 初	23.0	5.4	6.8	－	－	3bc 層		見込に三角形の釉剥ぎ、体下部～高台露胎
28	灰釉陶器小皿	瀬戸美濃	16C 末	11.1	2.5	5.8	－	－	3bc 層		削ぎ皿、緑灰色ガラス質釉、胎土黄白色、大窯製品、見込釉剥ぎ、高台内輪状目跡
29	灰釉陶器小皿	朝鮮	16C	9.6	3.0	4.3	－	－	3bc 層		高台畳付に目跡あり
30	無釉陶器壺	朝鮮	16C か	(16.5)	(6.8)	－	－	－	3bc 層		内外面叩き、胎土精成、器肉あずき色
31	青磁碗	中国	15C 後	－	(3.5)	(5.0)	細線蓮弁文	見込ｽﾀﾝﾌﾟ、波状文	3bc 層		高台内輪状釉剥ぎ
32	瓦質こね鉢	東播系	13C～14C	(23.4)	(4.3)	－	－	－	3bc 層		
33	青磁碗	越州窯系	9C	(15.0)	(4.4)	－	－	－	3bc 層		粗製品　ＣⅠ類
34	褐釉有耳壺	中国か	不明	(8.4)	(5.6)	－	－	－	3bc 層		胎土白灰色、口縁部露胎
35	灰釉壺	中国か	不明	－	－	－	－	－	3bc 層		胎土赤褐色（粗い）、肩部に目跡
36	灰釉陶器小杯	肥前	16C 末～17C 初	9.0	4.8	3.9	－	－	3bc 層		体下部～高台露胎、高台に胎土目跡

表 6　出土遺物観察表⑤

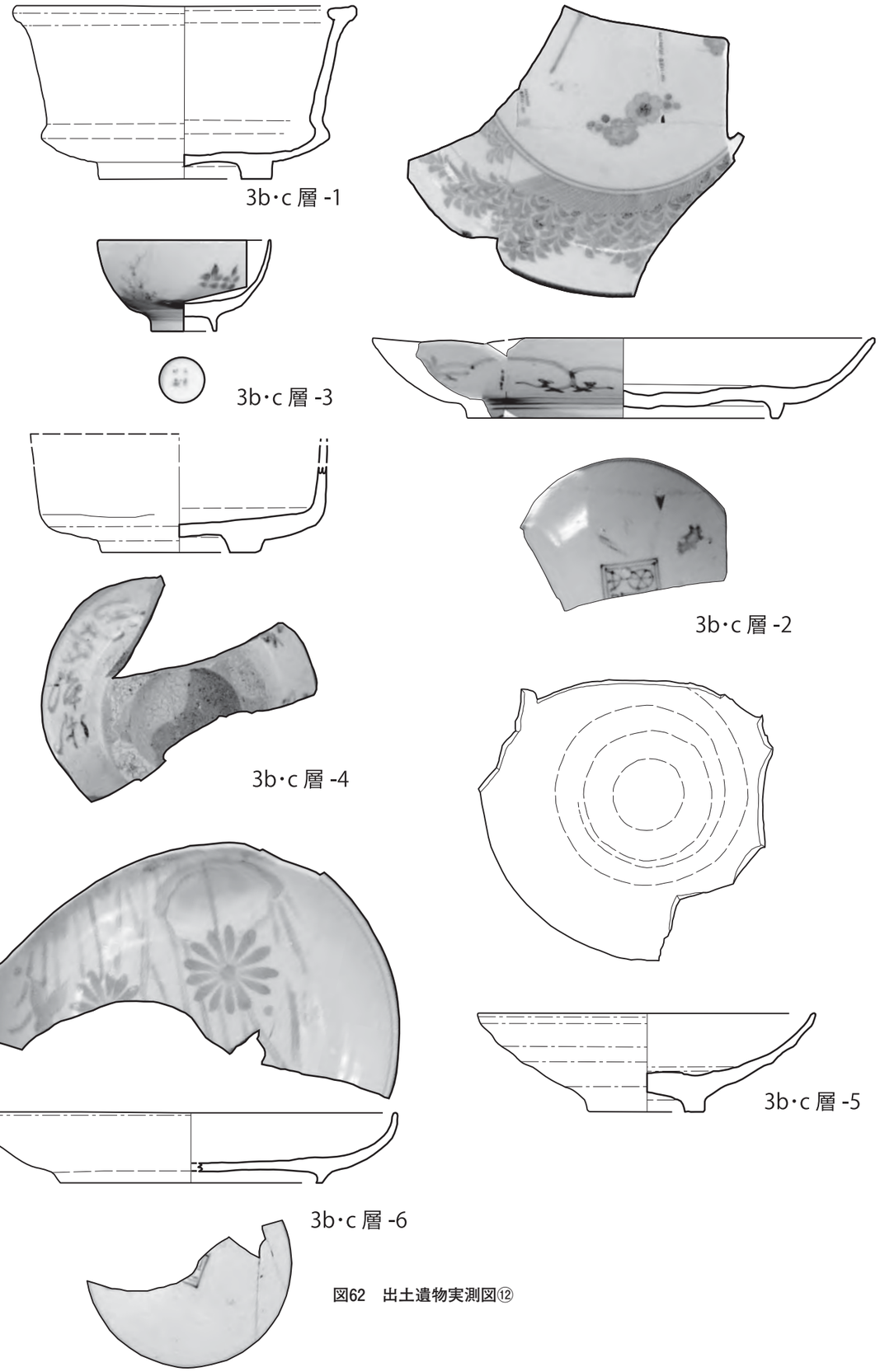
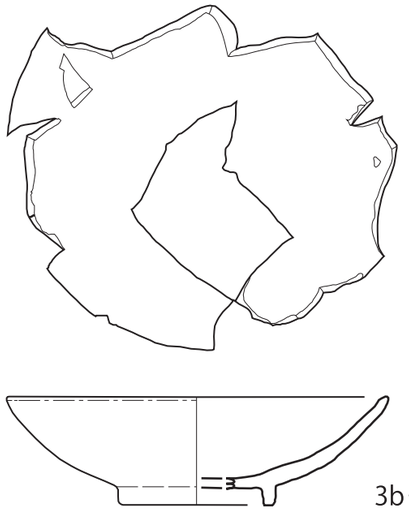
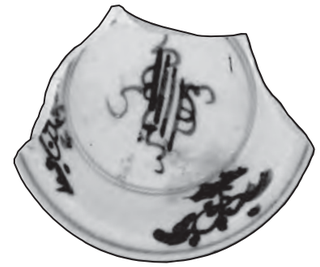
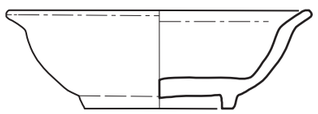


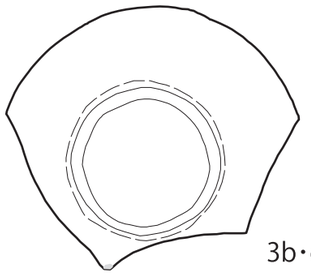
図62　出土遺物実測図⑫



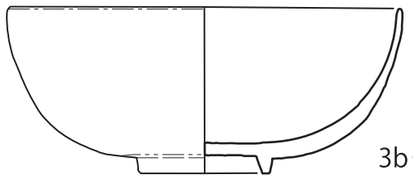
3b･c 層 -7



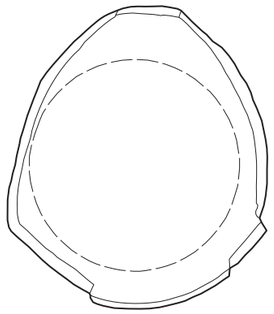


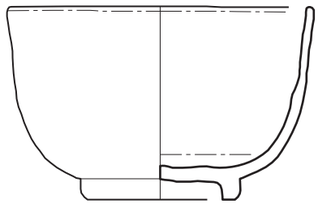


3b･c 層 -9

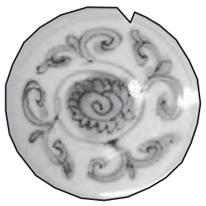


3b･c 層 -10

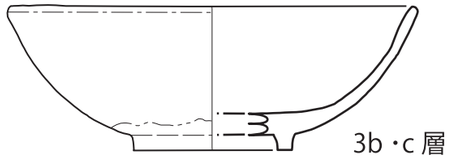




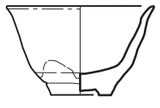
3b･c 層 -8



3b･c 層 -11

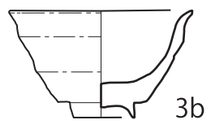


3b ･c 層 -12

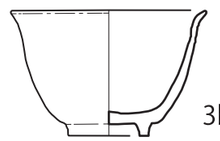


3b･c 層 -13

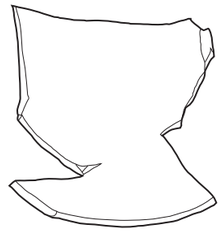
図63　出土遺物実測図⑬

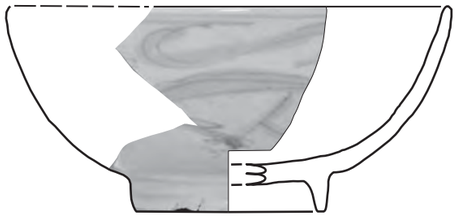


3b･c 層 -14

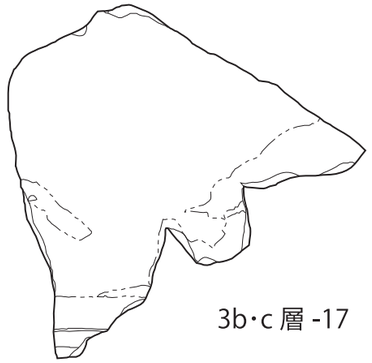


3b･c 層 -15

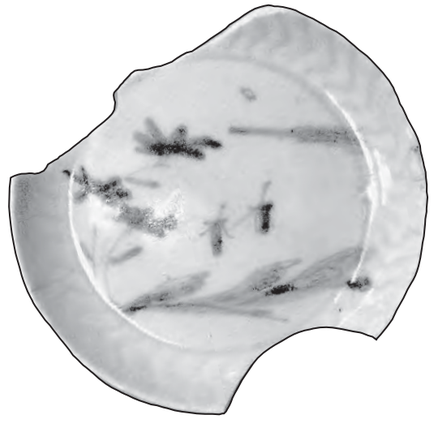


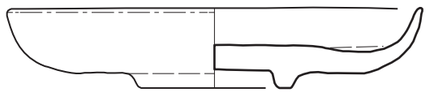


3b･c 層 -16

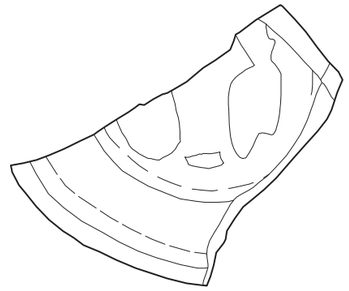


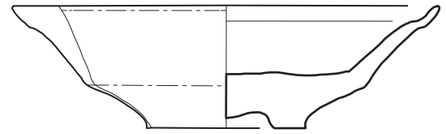
3b･c 層 -17



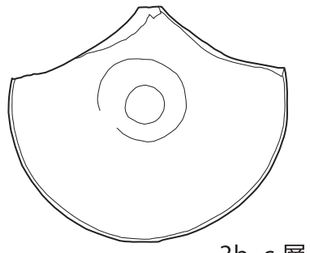


3b･c 層 -18

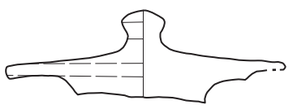


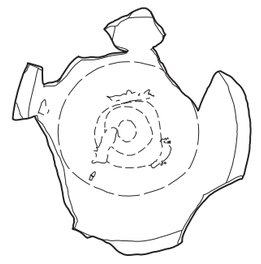


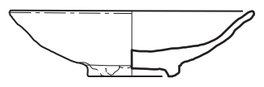
3b･c 層 -19



3b･c 層 -20

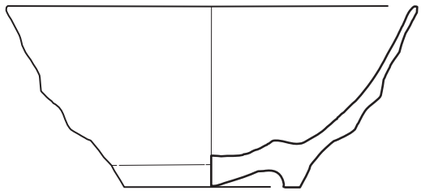




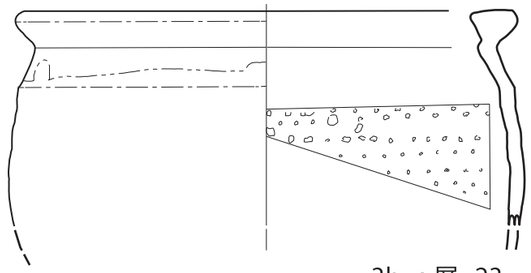


3b･c 層 -21（1/4）

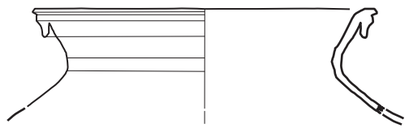
図64　出土遺物実測図⑭



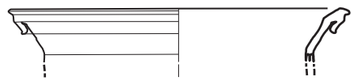
3b･c 層 -22



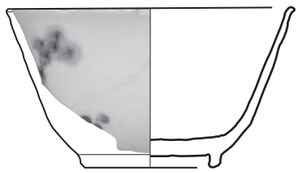
3b･c 層 -23

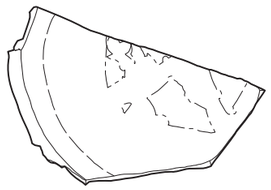


3b･c 層 -24（1/4）

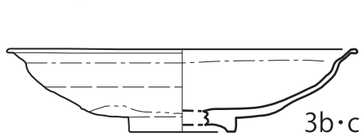


3b･c 層 -25（1/4）

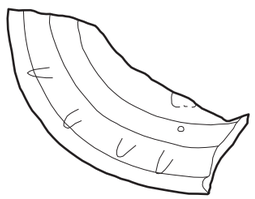


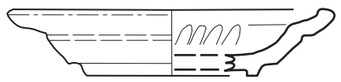


3b･c 層 -26

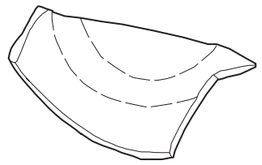


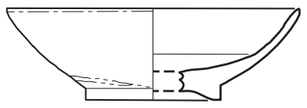
3b･c 層 -27（1/4）

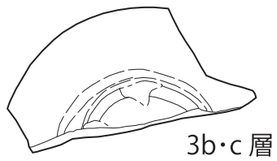




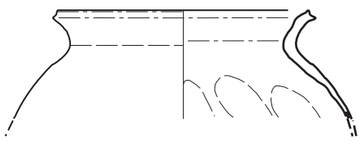
3b･c 層 -28





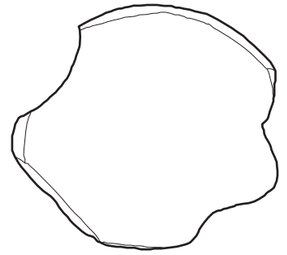


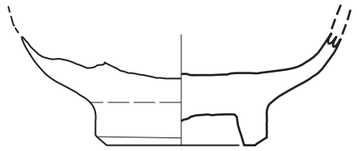
3b･c 層 -29

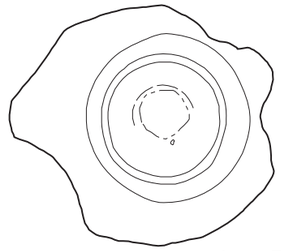


3b･c 層 -30(1/4)

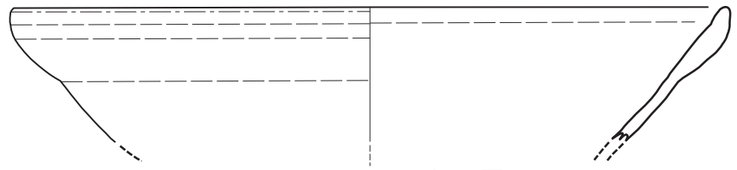
図65　出土遺物実測図⑮



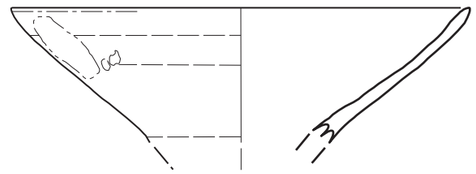




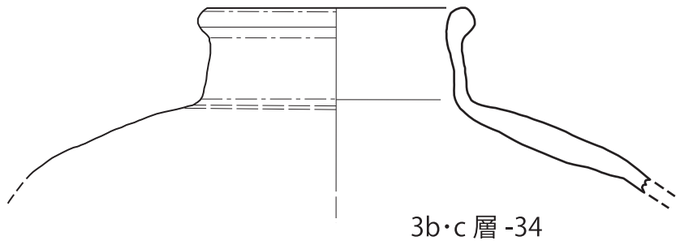
3b･c 層 -31



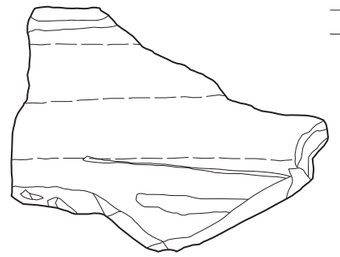
3b･c 層 -32

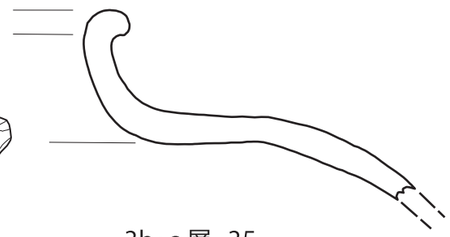


3b･c 層 -33

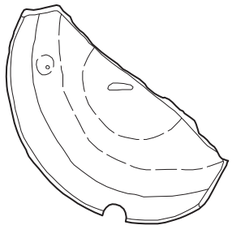


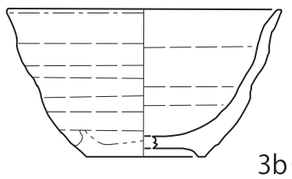
3b･c 層 -34





3b･c 層 -35





3b･c 層 -36

図66　出土遺物実測図⑯

第４項　中世末～江戸時代前期前半

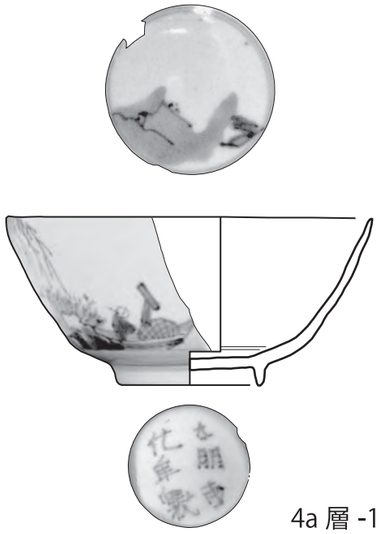
１．４ａ層

中世末から江戸時代前期前半の整地層である。この層からの陶磁器の出土は1,010点で、その一部を詳述する。

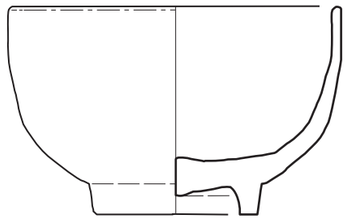
1は肥前系の染付碗である。高台畳付が露胎しており、高台内には「大明成化年製」との銘がある。外面には屋敷、木、人物、船などが描かれており、内面にも判別不能ながら文様が描かれている。SD68から出土した。**2**は肥前系の染付碗である。高台畳付から高台内まで露胎している。外面には唐草文が描かれているSD68から出土した。**3**は肥前系の緑灰釉陶器碗である。高台畳付が露胎している。**4**は朝鮮もしくは肥前系と思われる灰釉陶器皿あるいは白磁である。高台畳付に目跡が残る。胎土は白灰色である。**5**は肥前系の灰釉陶器鉢である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付が露胎している。SD39から出土した。**6**は肥前系の染付小杯である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付が露胎しており、高台内に渦福が描かれている。見込に草花文が描かれている。SE74から出土した。**7**は肥前系の染付小杯である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付に砂が付着している。口縁下には圏線が引かれている。SD68から出土した。**8**は肥前系の灰釉陶器小杯である。腰から高台まで露胎しており、腰部に目跡が残る。**9**は肥前系の染付皿である。高台畳付に砂が付着している。内面には草花文が描かれている。**10**は肥前系の染付碗である。高台畳付が露胎し、砂が付着している。外面には唐草文が描かれている。**11**は中国の青花碗である。高台畳付に砂が付着している。外面には花唐草文が描かれ、内面には草花文が描かれている。**12**は朝鮮の白磁皿である。見込と高台畳付に目跡が残る。やや緑がかったガラス質釉が施されている。胎土には黒色粒が混じる。SD39から出土した。**13**は朝鮮の灰釉陶器皿である。緑灰色ガラス質釉が施されている。高台に砂が付着している。胎土は灰色である。SH72から出土した。**14**、**15**は肥前系の灰釉陶器皿である。いずれも体下部から高台にかけて露胎している。**14**はSD41から出土した。**15**はSH69から出土した。**16**は肥前系の灰釉陶器小杯である。体下部から底部にかけて露胎している。平底で、糸切り痕がある。SH78から出土した。**17**は朝鮮の灰釉陶器杯である。高台内が露胎しており、目跡が残る。**18**は朝鮮の白磁小皿である。見込は釉剥ぎされている。高台が露胎している。**19**は中国の白磁梅花皿である。腰折れをしていて、口が剥げている。陶器質が貫入している。高台畳付が露胎している。**20**は肥前系の染付輪花小皿である。型押し菊花皿で、手塩皿として利用されていたと思われる。畳付が露胎している。見込に草花文が描かれ、内面に蓮弁文が描かれている。SD39から出土した。**21**は対州窯もしくは朝鮮と思われる灰釉陶器碗である。高台が露胎しており、畳付に目跡が残る。呉器の可能性がある。

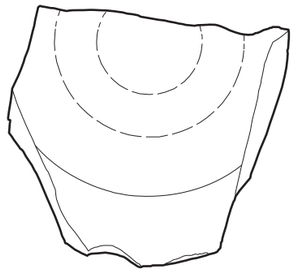
番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	染付碗	肥前	18C	12.0	5.4	4.6	屋敷、木、人物、船か	不明	4a 層	SD68	高台畳付露胎、高台内「大明成化年製」
2	染付碗	肥前	18C	10.4	6.9	4.4	唐草	－	4a 層	SD68	高台畳付～高台内露胎
3	緑灰釉陶器碗	肥前	17C 終～18C 前	10.8	6.8	5.2	緑彩	－	4a 層	SE74	高台畳付露胎（内野山か）
4	灰釉陶器皿 or 白磁	朝鮮か肥前	17C	－	(2.6)	(7.2)	－	－	4a 層		高台畳付に目跡、胎土白灰色
5	灰釉陶器鉢	肥前	17C 後	10.6	5.6	4.7	－	－	4a 層	SD39	端反り、高台畳付露胎、貫入あり
6	染付小杯	肥前	17C 後	7.4	4.7	3.7	高台内渦福	草花文（見込）	4a 層	SE74	端反り、高台畳付露胎
7	染付小杯	肥前	17C 中	6.6	3.1	2.3	口縁下に圏線		4a 層	SD68	端反り、高台畳付に砂付着
8	灰釉陶器小杯	肥前	17C 前	6.8	3.1	2.6	－	－	4a 層	SH70	腰～高台露胎、腰部に目跡
9	染付皿	肥前	17C 前	14.6	3.6	5.4	－	草花文	4a 層		高台畳付砂付着、（初期伊万里）
10	染付碗	肥前	17C 前	12.1	6.3	4.9	唐草文	－	4a 層		高台畳付露胎、砂付着
11	青花碗	中国	17C 初	－	(3.2)	(5.7)	花唐草	草花文	4a 層		森毅分類(1995)F、高台畳付に砂、磁器質の粗製品
12	白磁皿	朝鮮	16C～17C	14.9	3.7	5.5	－	－	4a 層	SD39	見込、高台畳付に目跡、やや緑がかったガラス質釉、胎土に黒色粒
13	灰釉陶器皿	朝鮮	16C～17C	10.1	3.2	4.3	－	－	4a 層	SH72	緑灰色ガラス質釉、高台に砂付着、胎土灰色
14	灰釉陶器皿	肥前	16C 末～17C 初	12.6	3.4	4.6	－		4a 層	SD41	体下部～高台露胎
15	灰釉陶器皿	肥前	16C 末～17C 初	14.0	4.5	6.1	－	－	4a 層	SH69	体下部～高台露胎
16	灰釉陶器小杯	肥前	16C 末～17C 初	8.2	3.4	3.8	－	－	4a 層	SH78	体下部～底部露胎、平底（糸切り痕）
17	灰釉陶器杯	朝鮮	16C	9.1	3.5	4.6	－	－	4a 層		高台内露胎、目跡あり
18	白磁小皿	朝鮮	15C～16C	9.8	2.4	4.5	－	－	4a 層		見込釉剥ぎ、高台露胎
19	白磁梅花皿	中国	14C	19.0	4.0	6.0	－	－	4a 層		腰折れ、口剥げ、陶器質貫入、汚れ、高台畳付露胎
20	染付輪花小皿	肥前	17C 後～18C	8.0	2.5	2.4	－	見込草花文、蓮弁文	4a 層	SD39	型押し菊花皿、手塩皿、（初期伊万里）、畳付露胎
21	灰釉陶器碗	対州か朝鮮	17C	－	(4.5)	(6.2)	－	－	4a 層		高台露胎、呉器手か、畳付に目跡

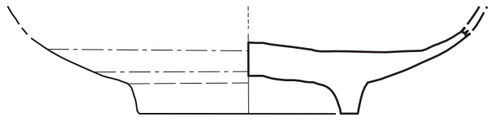
表７　出土遺物観察表⑥

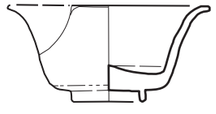

4a 層 -1

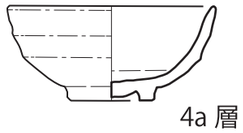
4a 層 -2


4a 層 -3


4a 層 -5


4a 層 -4


4a 層 -7


4a 層 -8

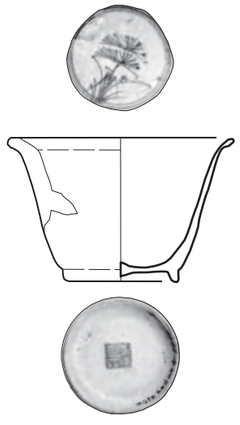
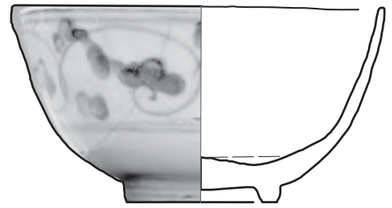
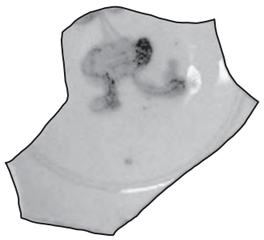
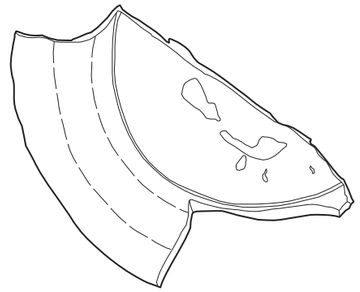

4a 層 -6

図67　出土遺物実測図⑰

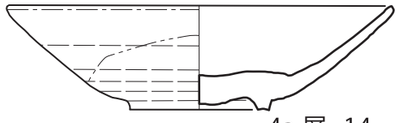
4a 層 -9

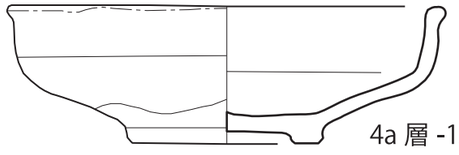

4a 層 -10

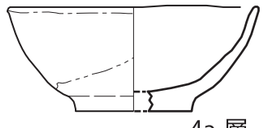

4a 層 -11


4a 層 -12

4a 層 -13


4a 層 -14


4a 層 -15


4a 層 -16

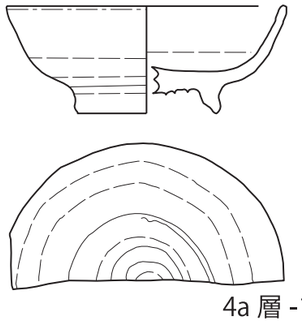
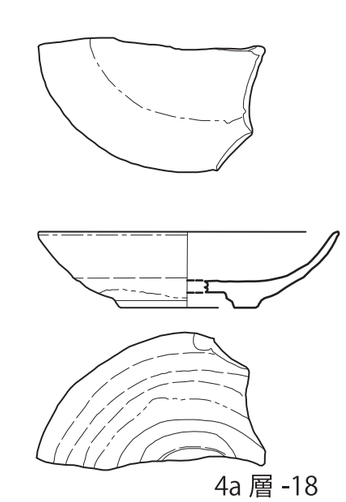
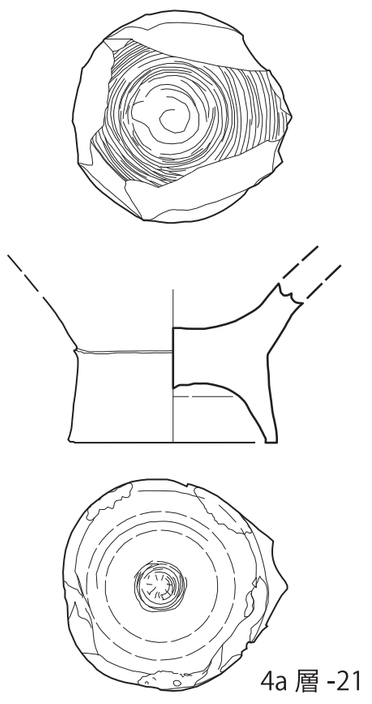

4a 層 -17

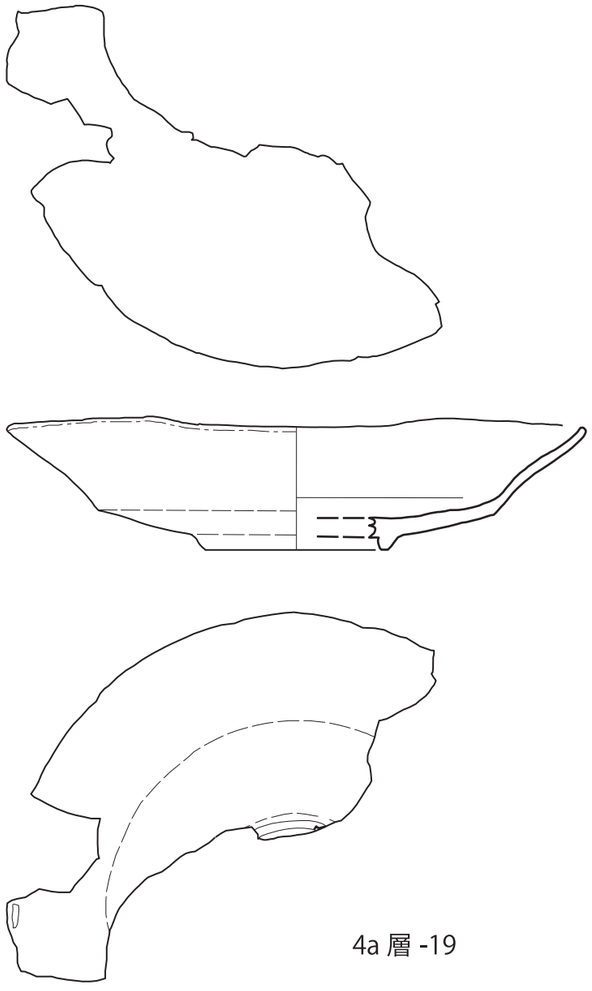
図68　出土遺物実測図⑱



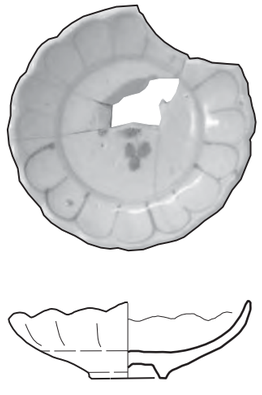
4a 層 -18



4a 層 -21



4a 層 -19



4a 層 -20

図69　出土遺物実測図⑲

2．4b層

中世末から江戸時代前期前半の造成土層である。この層からの陶磁器の出土は1,827点で、その一部を詳述する。

1は生産地不明の焼塩壺の蓋である。内面に布目が残る。2は中国の青花杯である。口縁部は端反りとなっている。高台畳付が露胎している。外面には梵字文と思われる文字が書かれているが、はっきりしない。清朝福建の磁器である可能性がある。3は中国の青花鉢である。畳付が露胎している。外面に文様が描かれているがはっきりせず、内面も見込に描かれているのは花文であると思われる。4は肥前系の白磁小杯である。口縁部は端反りとなっている。高台が露胎している。外面に鎬（陰刻）がある。5は肥前系の染付皿である。高台畳付が露胎しており、砂が少し付着している。3a層の14染付皿と、3b・c層の18染付皿と組物と考えられる。見込には花文が描かれている。6は朝鮮の灰釉手付瓶である。暗緑灰色釉が施されている。胎土は薄く、焼締まっている。外面に波状文（陰刻）が描かれている。7は朝鮮の白磁皿である。見込及び高台畳付に砂目が残る。胎土は白灰色に黒色粒子が混じる。8は朝鮮の白磁俵壺である。やや青味をおびた白色釉が施されおり、ガラス質が貫入している。内面には轆轤目が残り、炭化物が付着している。数層から出土し接合された層混在1の白磁俵壺に特徴が類似している。ただし、同一個体ではない。9は朝鮮の白磁皿である。見込と高台畳付に目跡が残る。胎土は白灰色で陶器質である。10は朝鮮の白磁碗である。見込に目跡が残り、高台は露胎している。青味を帯びた白灰釉が施されている。11は肥前系と思われる黒褐釉耳付瓶である。口縁部が露胎している。胎土は灰色である。内面には叩き成形の跡が残る。12は中国の青花碗である。高台畳付に砂が付着している。外面には草花文が描かれており、見込には福字が書かれている。13は肥前系の灰釉陶器碗である。高台が露胎している。ガラス質の緑灰色釉が施されている。14は肥前系の灰釉陶器甕である。口縁部が露胎しており、内面には叩き成形の跡が残る。15は瀬戸美濃の灰釉陶器小皿である。削ぎ皿である。緑灰色ガラス質釉が施されている。胎土は黄白色で、見込は釉剥ぎされており、高台内には輪状の目跡が残る。16は中国の青花皿である。底部が露胎している。外面の文様は不明であり、内面の文様もはっきりしないが、文字と思われる。17は朝鮮の灰青陶器瓶である。胎土は青灰色である。底部は平底で露胎している。18は中国の色絵碗である。赤絵で緑彩が施されている。外面には草花文が描かれているが、内面の文様ははっきりしない。19は中国の白磁皿である。徳化窯系と思われる。口が剥げている。20は朝鮮の灰青陶器碗である。内面に蓮弁文（陰刻）が描かれている。21、22は磁州窯系の白地鉄絵陶器鉢である。21は外面口縁下に黒釉が施されている。胎土は黄灰色である。22は見込に鉄絵で圏線と不明文様が描かれている。底部が露胎し目跡が残る。21、22は同一個体である可能性がある。23は龍泉窯の青磁碗である。高台内は釉剥ぎされている。見込に花文（スタンプ）が描かれている。24は朝鮮の粉青象嵌皿である。胎土は青灰色である。高台畳付が露胎している。外面には圏線が引かれ、内面には花唐草文が描かれている。25、27は東播系の瓦質こね鉢である。26は中国の白磁皿である。口が剥げている。28は越州窯系の青磁碗である。体下部から高台にかけて露胎しており、高台は円状である。見込に目跡が残る。29はベトナム産と思われる褐釉輪花碗である。胎土は白灰色である。内面に文様が描かれているがはっきりしない。30は朝鮮の青磁皿である。胎土は黄灰色である。オリーブグリーンの釉が施されている。高台は削り出されており、畳付に目跡が3箇所残る。見込には蓮弁文が描かれ、内面には花文が描かれている。31は国産の土師皿である。底には糸切り痕がある。内面が黒化していることから灯明具として使用されていたと推察される。32は朝鮮半島産の陶質土器である。内外面は黒褐色で、器肉はあずき色で、焼締められている。33は備前の焼締積花盤である。表面は赤褐色で、器肉は黒灰色である。34は備前の焼締筒型碗である。表面は暗赤褐色で、器肉は灰色である。内面には轆轤目が残り、底部に窯記号がヘラ書きされている。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	焼塩壺（フタ）		18C	7.6	2.3	7.8	−	−	4b 層		内面に布目
2	青花杯	中国	18C	8.4	4.2	2.4	梵字文か	−	4b 層		端反り、高台畳付露胎、清朝磁器（福建か）
3	青花鉢	中国	17C	10.6	5.7	4.8	不明	見込　花文か	4b 層		畳付露胎
4	白磁小杯	肥前	17C 中	5.3	3.7	2.1	鎬（陰刻）	−	4b 層		端反り、高台露胎
5	染付皿	肥前	17C 前	13.3	2.6	5.0	−	波文（陰刻）、草花文（見込）	4b 層		高台畳付露胎、砂少し、（初期伊万里）70、72と組物
6	灰釉手付瓶	朝鮮	16C〜17C	−	−	−	波状文（陰刻）	−	4b 層		暗緑灰色釉、胎土薄く、焼締る
7	白磁皿	朝鮮	16C〜17C	13.0	3.6	5.2	−	−	4b 層		見込、高台畳付に砂目、胎土白灰色、黒色粒子
8	白磁俵壺	朝鮮	16C〜17C	(12.1)	−	−	−	−	4b 層		特徴は9に同じ、同一個体ではない、内面に炭化物付着
9	白磁皿	朝鮮	16C〜17C	18.4	4.5	6.0	−	−	4b 層		見込高台畳付に目跡、貫入汚れ、胎土白灰色で陶器質
10	白磁碗	朝鮮	16C〜17C	17.0	8.4	6.1	−	−	4b 層		見込に目跡、高台露胎、青みをおびた白灰釉
11	黒褐釉耳付瓶	肥前か	16C 末〜17C 初	−	−	−	−	−	4b 層		口縁部露胎、胎土灰色、内面叩き
12	青花碗	中国	16C〜17C	14.0	6.0	5.3	草花文	見込に「福」	4b 層		高台畳付に砂付着、陶器質の粗製品
13	灰釉陶器碗	肥前	16C 末〜17C 初	11.8	5.8	5.2	−	−	4b 層		高台露胎、緑灰色釉（ガラス質）
14	灰釉陶器甕	肥前	16C 末〜17C 初	(28.0)	(11.7)	−	−	−	4b 層		口縁部露胎、内面叩き
15	灰釉陶器小皿	瀬戸美濃	16C 末	10.6	2.2	5.6	−	−	4b 層		削ぎ皿、緑灰色ガラス質釉、胎土黄白色、大窯製品、見込釉剥ぎ、高台内輪状目跡
16	青花皿	中国	16C 中〜後	10.1	2.5	4.3	不明	文字か	4b 層		小野分類C群、粗製、底部露胎
17	灰青陶器瓶	朝鮮	16C	−	12.6	9.4	−	−	4b 層		胎土青灰色、底部平底で露胎
18	色絵碗	中国	16C	−	−	−	草花文	不明	4b 層		赤絵、緑彩
19	白磁皿	中国	16C か	17.1	3.1	6.1	−		4b 層		口剥げ、（徳化窯系か）
20	灰青陶器碗	朝鮮	15C〜16C	−	(2.7)	(5.8)	−	−	4b 層		陰刻による蓮弁文
21	白地鉄絵陶器鉢	磁州窯系	15C〜16C	−	−	−	−	−	4b 層		外面口縁下に黒釉、胎土黄灰色、155と同一個体の可能性あり
22	白地鉄絵陶器鉢	磁州窯系	15C〜16C	−	(4.5)	(15.6)	−	見込に文様（不明）	4b 層		内面見込に鉄絵で圏線と不明文様、底部露胎目跡あり、154と同一個体の可能性あり
23	青磁碗	龍泉窯	14C〜15C	12.1	5.9	4.8	−	見込　花文スタンプ	4b 層		高台内釉剥ぎ
24	粉青象嵌皿	朝鮮	14C	−	(2.9)	(6.0)	圏線	花唐草文	4b 層		胎土青灰色、高台畳付露胎
25	瓦質こね鉢	東播系	13C〜14C	(27.6)	(4.3)	−	−	−	4b 層		
26	白磁皿	中国	13C〜14C	10.6	2.2	5.8	−	−	4b 層		口剥げ
27	瓦質こね鉢	東播系	13C〜14C	24.6	4.4	−	−	−	4b 層		
28	青磁碗	越州窯系	9C〜10C	−	(2.0)	(7.8)	−	−	4b 層		体下部〜高台露胎、円状高台、粗製品、見込目跡
29	褐釉輪花碗	ベトナムか	14C〜15C	−	−	−	−	陰刻（文様不明）	4b 層		胎土白灰色（ザックリ）
30	青磁皿	朝鮮	14C〜15C	−	(1.4)	(4.7)	−	見込　陰刻蓮弁文、陽刻スタンプ花文	4b 層		胎土黄灰色（ザックリ）、オリーブグリーンの釉、高台削り出し、畳付に目跡３ヶ所
31	土師皿	日本	不明	11.6	2.6	6.8	−	−	4b 層		糸きり底、内面黒化（灯明具として使用か）
32	陶質土器	朝鮮半島	4C〜5C	10.4	7.6	6.1	−	−	4b 層		内外面黒褐色、焼締め、器肉あずき色
33	焼締積花盤	備前	16C〜17C	28.2	6.1	24.0	−	−	4b 層		表面赤褐色、器肉黒灰色
34	焼締筒型碗	備前	17C か	10.7	10.7	6.0	−	−	4b 層		表面暗赤褐色、器肉灰色、内面轆轤目、底部窯記号ヘラ書き

表 8　出土遺物観察表⑦

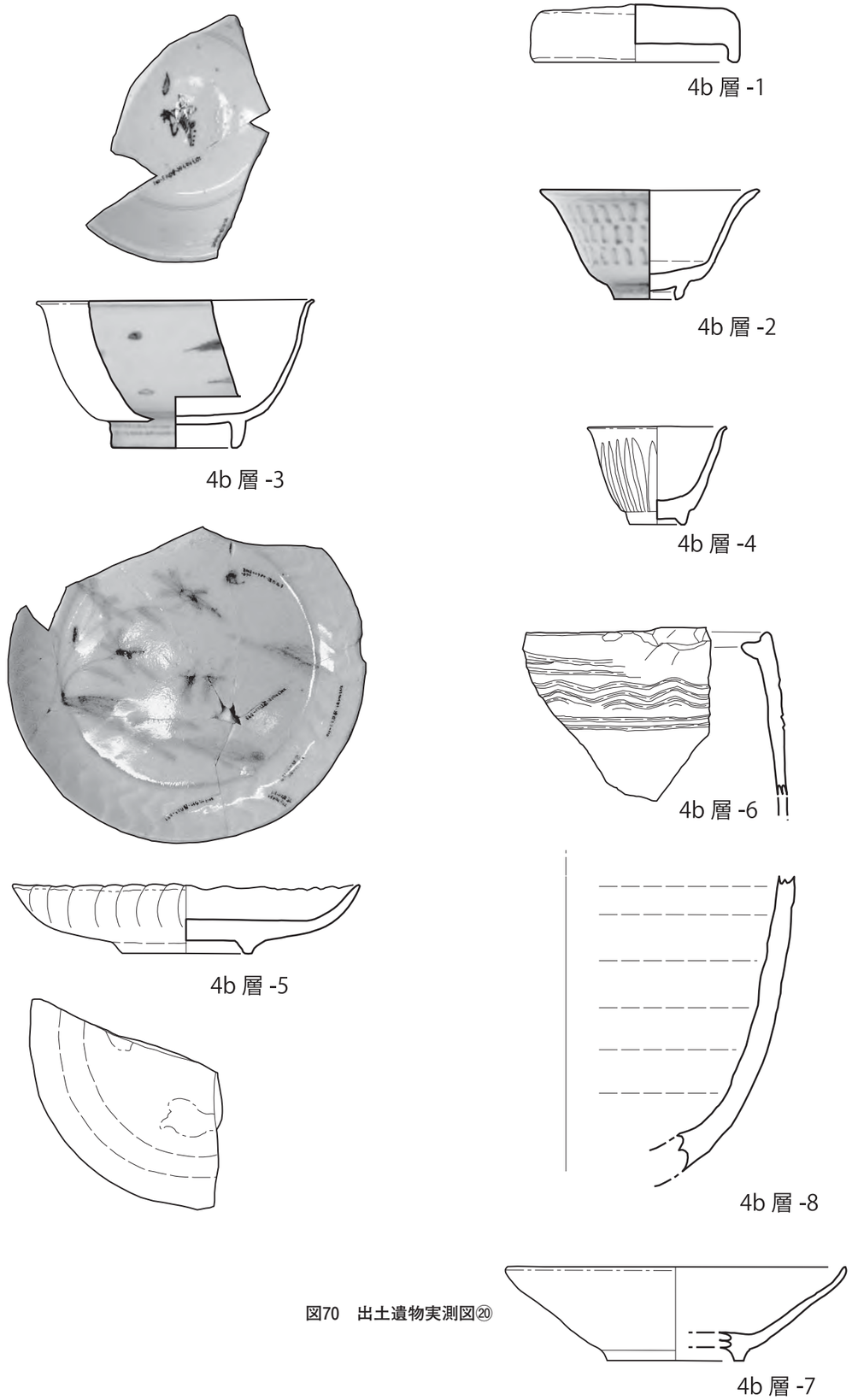
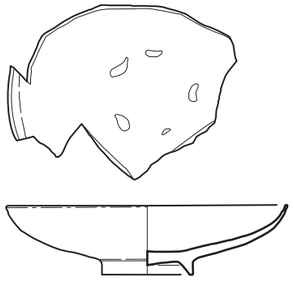
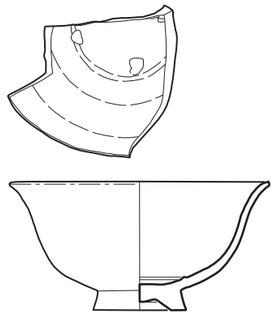


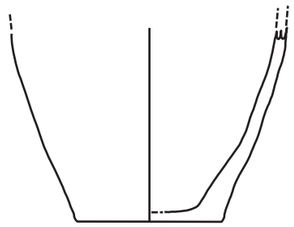
図70　出土遺物実測図⑳



4b 層 -9（1/4）

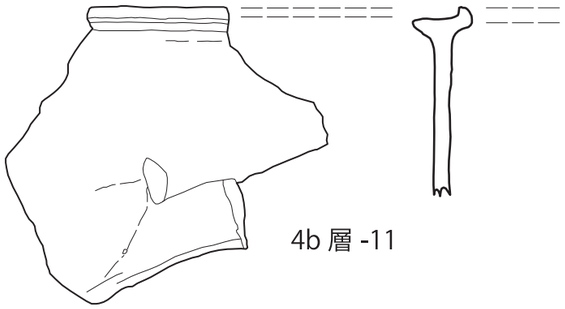


4b 層 -10（1/4）



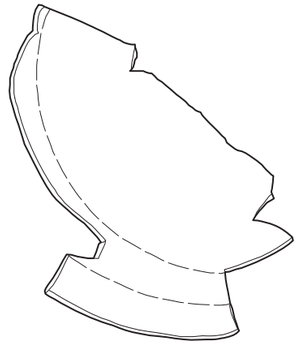
4b 層 -17（1/4）

4b 層 -18

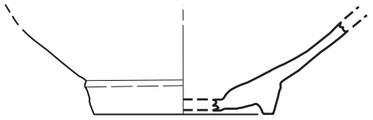


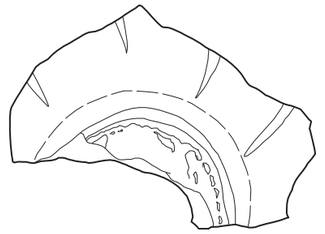
4b 層 -11

4b 層 -12

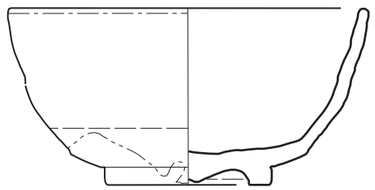


4b 層 -19

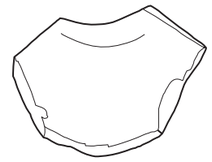


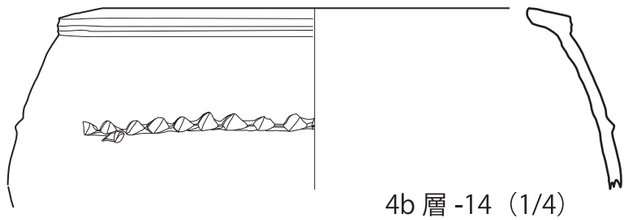


4b 層 -20

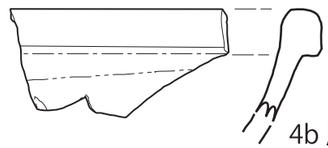


4b 層 -13

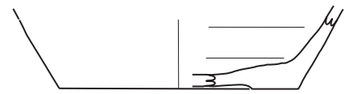




4b 層 -14（1/4）

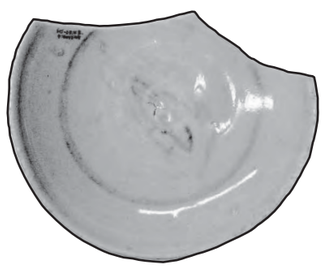


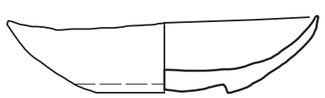
4b 層 -21



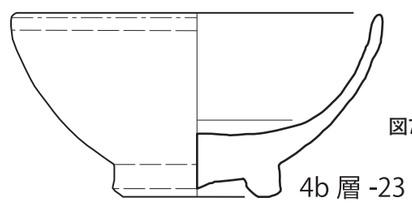
4b 層 -22（1/4）

4b 層 -15

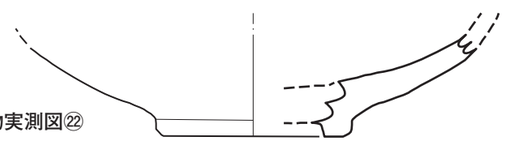




4b 層 -16



4b 層 -23

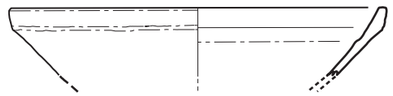


4b 層 -24

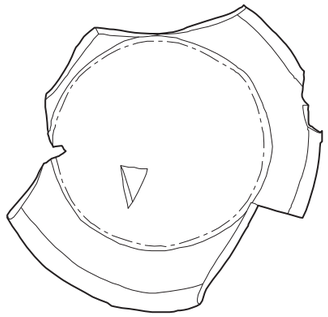
図71　出土遺物実測図㉑

図72　出土遺物実測図㉒

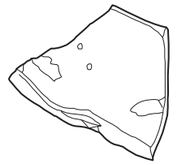
4b 層 -25（1/4）

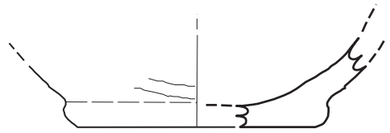


4b 層 -27（1/4）

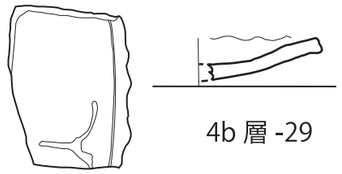


4b 層 -26

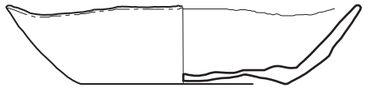


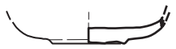


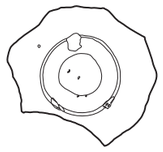
4b 層 -28



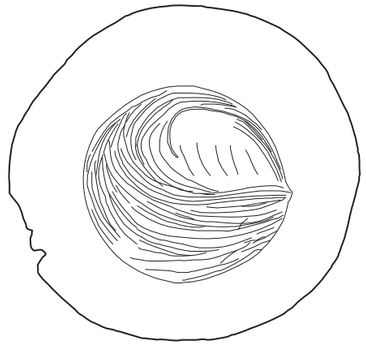
4b 層 -29





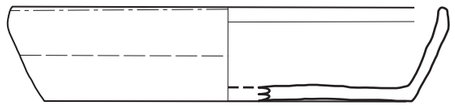


4b 層 -30（1/4）



4b 層 -31

4b 層 -32（1/4）



4b 層 -33（1/4）

4b 層 -34（1/4）

図73　出土遺物実測図㉓

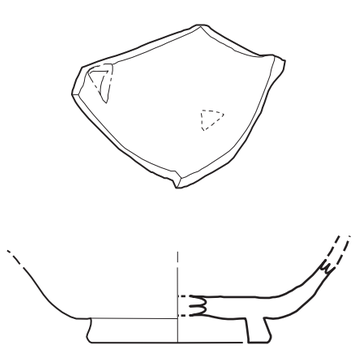
第5項　中　　世

中世の遺物包含層（5a層）である。この層からの陶磁器の出土は315点で、その一部を詳述する。

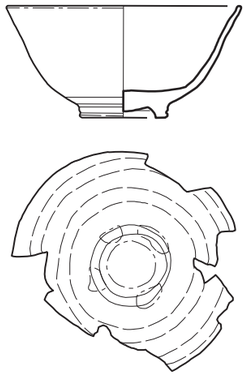
1は朝鮮の白磁碗である。見込に目跡が残り、高台が露胎している。緑味をおびたガラス質釉がほどこされている。**2**は朝鮮の白磁碗である。口縁部は端反りとなっている。やや緑がかった白色釉（ガラス質）が施されている。高台畳付が露胎し、目跡が残る。SH92から出土した。**3**は中国の青花皿である。外面には花唐草文が描かれ、見込には花籠文が描かれている。**4**は朝鮮の陶器である。見込と畳付に目跡が残る。**5**は朝鮮の白磁碗である。高台畳付が露胎している。外面には蓮弁状波文が描かれている。**6**は中国の粉青沙器碗である。胎土は青灰色で、見込に象嵌花文が描かれている。**7**は中国の青磁碗である。高台内は釉剥ぎされている。見込に花文（スタンプ）が描かれている。**8**は中国の白磁皿である。口が剥げており、底部は露胎している。**9**は龍泉窯系の青磁碗である。高台内は釉剥ぎされている。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	白磁碗	朝鮮	16C～17C	－	(2.4)	(5.8)	－	－	5a層		見込に目跡、高台露胎、緑味をおびたガラス質釉
2	白磁碗	朝鮮	16C～17C	15.4	7.3	5.6	－	－	5a層	SH92	端反り、やや緑がかった白色釉（ガラス質）高台畳付露胎、目跡あり
3	青花皿	中国	16C	－	1.1	6.5	花唐草	(見込み)花籠文	5a層		小野分類皿B2か
4	陶器	朝鮮	16C	12.4	5.6	5.4	－	－	5a層		見込、畳付に目跡あり
5	白磁碗	朝鮮	15C～16C	－	(3.4)	(5.2)	蓮弁状波文(除刻)		5a層		高台畳付露胎
6	粉青沙器碗	中国	15C～16C	11.6	5.0	5.6	－	花文（象嵌）	5a層		胎土青灰色
7	青磁碗	中国	14C～15C	－	(2.8)	(5.3)	－	見込　花文スタンプ	5a層		高台内釉剥ぎ
8	白磁皿	中国	13C～14C	10.9	2.5	6.6	－	－	5a層		口剥げ、底部露胎
9	青磁碗	龍泉窯系	13C	－	(4.5)	(6.2)	－	カッ花文	5a層		龍泉窯系、高台内釉剥ぎ

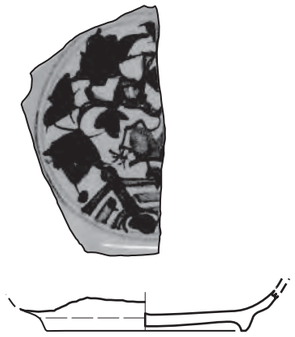
表9　出土遺物観察表⑧



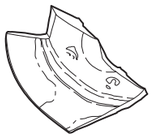
5a 層 -1

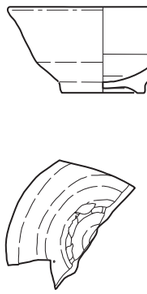


5a 層 -2（1/4）

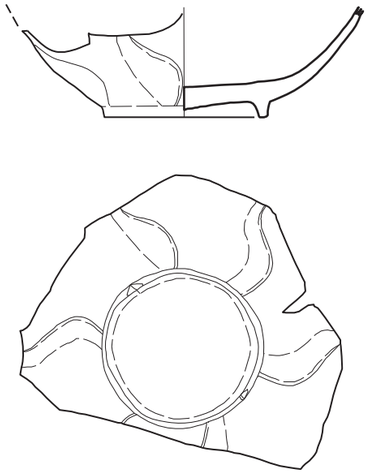


5a 層 -3

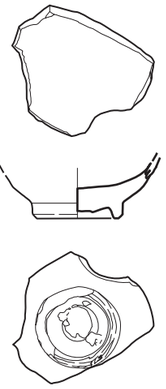




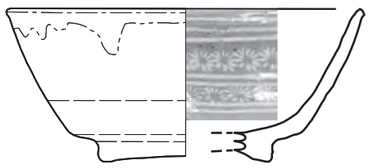
5a 層 -4（1/4）



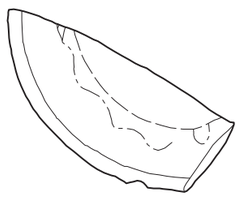
5a 層 -5

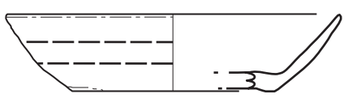


5a 層 -7（1/4）

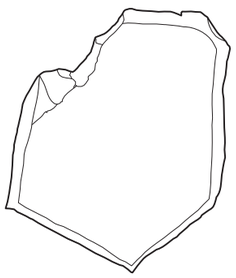


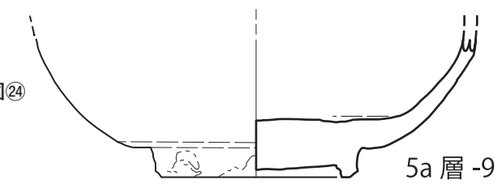
5a 層 -6





5a 層 -8





5a 層 -9

図74　出土遺物実測図㉔

第６項　複数層からの出土遺物

最後に、検出時は別々の検出面から出土したものの、整理時に接合することができた遺物について掲載する。

1 は朝鮮の白磁俵壺である。２a 層、２b 層、４a 層、４b 層からそれぞれ破片が出土した。やや青味を帯びた白色釉（ガラス質が貫入する）が施されている。内面には轆轤目が残る。**2** は肥前系の灰釉陶器皿である。３a 層、３b・c 層からそれぞれ破片が出土した。なお３a 層出土の破片は SB50 から検出された。見込に胎土目が残る。体下部から高台にかけて露胎する。**3** は中国産と思われる壺である。１a・b 層、２a 層からそれぞれ破片が出土した。なお２a 層から出土した破片は SX04及び SX05から検出された。**4** は備前の焼締すり鉢である。３a 層、３b・c 層、４a 層からそれぞれ破片が出土した。表面は茶褐色から赤褐色をしており、器肉は青灰色である。

番号	種別	生産地	年代	寸法			文様		層位	遺構	備考
				口径	器高	底径	外面	内面			
1	白磁俵壺	朝鮮	16C～17C	(11.8)	(7.6)	－			2a, 2b, 4a, 4b 層		やや青味をおびた白色釉（ガラス質貫入）内面轆轤目
2	灰釉陶器皿	肥前	16C 末～17C 初	13.5	4.0	4.8	－	－	3a, 3b-c 層	SB50	見込胎土目、体下部～高台露胎
3	壺	中国か	不明	－	52.4	25.8			1a-b, 2a 層	SX04, SX05	
4	焼締すり鉢	備前	17C	30.5	12.9	12.4	－	－	3a, 3b-c, 4a 層		表面茶褐色～赤褐色、器肉青灰色

表10　出土遺物観察表⑨

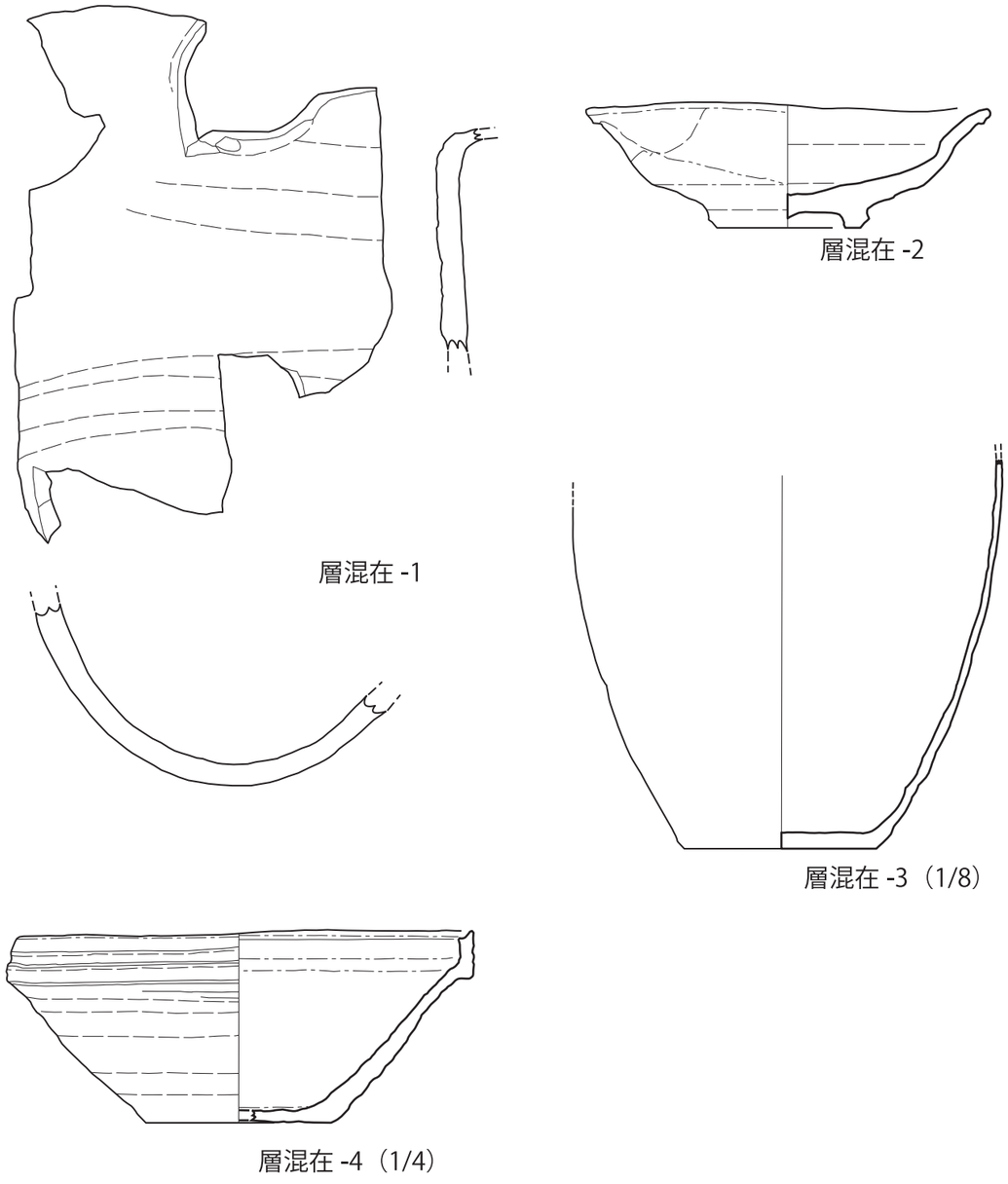


図75　出土遺物実測図㉕

第４節　まとめ

はじめに述べたとおり、今回の調査地点今屋敷家老屋敷跡は、対馬藩家老古川家の屋敷地だった場所である。屋敷地は対馬藩の政庁であり藩主居館の一つでもあった金石城に最も近い場所に位置していた。屋敷地には、平成４年に解体されるまでこの古川家の長屋門が所在しており、平成14年度に長崎県教育委員会が実施した発掘調査で長屋門跡が検出され、続いて平成16年度に対馬市教育委員会が実施した発掘調査では庭園跡と思われる池や鏡積み技法を用いた石塀など、厳原城下町の様相を解明する上で貴重な遺構が発見されていた。

今回の発掘調査では江戸時代後期の整地層（１面目遺構検出面）から家老古川家の屋敷と推定される建物跡（SB01、24、25）が検出され、対馬藩上級家臣の屋敷規模や構成を解明する手がかりになると思われる。

また、中世末から江戸時代前期前半の整地層（３面目遺構検出面）で検出された溝（SD39、68）は、建物跡（SB85）を中心に、溝（SD41）、石列（SV83）、石組遺構（SH80）、不明遺構（SX65、89）で構成する屋敷地を取り囲んでいた「区画溝」と推定され、金石屋形造営後に整備が始まった金石城下町の様相を解明していく上で極めて重要な遺構を検出することが出来た。

なお、江戸時代前期後半の整地層（２面目遺構検出面）からは、２棟の蔵跡が検出されており、これらの遺構の検証を通じて、金石城下町の様相の変遷を解明することに繋がると思われる。

過去の今屋敷家老屋敷跡においても検出していた方形あるいは長方形を呈する石組遺構（SH08ほか）が今回の調査では31箇所も検出された。これは今回検出した遺構のおよそ３分の１に相当する数であり、特定の整地面に偏ることなくすべての遺構検出面で平均的に検出された。

この石組遺構は過去の調査においても、その用途は不明とされており、今回の調査でもその解明には至らなかったが、遺跡地が金石川に隣接していること、清水山からの伏流水に恵まれる場所に位置していること、地名の由来からも分かるように今屋敷地区が池地（あるいは潟地）を埋め立てて形成された場所であることなどから総合的に考慮すると、あるいは排水機能などを持たせた遺構の可能性も検討されるが、その解明については今後の調査に期待するところである。

なお、水に関わる遺構として溝（SD02ほか）が20本、井戸（SE30ほか）が６基検出された。溝は今回の調査で検出された遺構の４分の１を占めている。特に中世の遺物包含層（４面目遺構検出面）から出土した井戸（SE95）は、深さが40cm～50cm 程しかなかったが、海抜１m 程度であることからこの深さでも井戸としての機能を持っていたことが考えられるなど、調査地が水の豊富な場所であったことを示していることが分かる。

一方、出土遺物は9, 893点が出土し、その９割を占める8, 965点が陶磁器類であった。

各層すべてから朝鮮の陶磁器が出土しており、中世の遺物包含層である５a 層や中世末から江戸時代前期前半にかけての４b 層、４a 層あたりまでは朝鮮や中国産の割合が高く、江戸時代前期後半以降（３b・c 層より上層）にかけては、肥前を中心とした国産の割合が高まる傾向が読み取れる。

特に、５a 層から４a 層にかけての朝鮮陶磁器の割合の高さからは、朝鮮との貿易を主な収入源としていた対馬宗家の経済活動の一端を読み取ることができる。

今回の調査で出土した遺物の量が膨大であったことと筆者の力量不足もあり、本報告書では、特に陶磁器類に焦点を当てて図面の作製と検証を行ったため、掲載に至らなかった遺物が多数ある。その

中でも特筆すべき遺物として朝鮮瓦が全17点出土しており、過去の今屋敷家老屋敷跡における調査で出土した朝鮮瓦と共に、他の金石城跡出土などとの比較作業が求められており、今後の課題である。

発掘調査の終了後、今屋敷家老屋敷跡には対馬市観光情報館ふれあい処つしまが建設され、古川家の長屋門を模した長屋門が建てられ観光客を出迎えており、対馬市内全域への観光案内拠点としてはもちろんのこと、史跡金石城跡や対馬藩主宗家墓所、清水山城跡などの厳原城下町への案内拠点としても、市民・観光客に大いに利用されている。

参考文献

長崎県教育委員会2004『今屋敷家老屋敷跡－都市計画道路厳原豆酘美津島線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告－』　長崎県文化財調査報告書第178集
対馬市教育委員会2004『都市計画道路横町線道路改築工事に伴う今屋敷家老屋敷跡発掘調査』（概要版）
対馬市教育委員会2006『町内遺跡発掘調査事業報告書－長崎県対馬市厳原町－』対馬市文化財調査報告書
対馬市教育委員会2011『旧金石城庭園－金石城跡保存整備事業に係る保存整備工事報告書』
厳原町教育委員会1985『金石城－長崎県下県郡厳原町所在－』厳原町文化財調査報告書第１集
厳原町誌編集委員会1997『厳原町誌』
新対馬島誌編集委員会1964『新対馬島誌』
鈴木棠三1977『対馬叢書第三集　十九公實録　宗氏家譜』村田書店
長節子1987『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館
永留久恵2009『対馬国志　中世・近世編　武門の興亡と対馬の交隣』対馬国志刊行委員会

写真図版

写真１　１a・b 層-１

写真２　１a・b 層-３

写真３　１a・b 層-４

写真４　１a・b 層-８

写真５　１a・b 層-11

写真６　１a・b 層-14

写真１～６　１a・b 層出土遺物

写真７　２ａ層－２

写真８　２ａ層－４

写真９　２ａ層－６

写真10　２ａ層－７

写真11　２ａ層－９

写真12　２ａ層－11

写真７～12　２ａ層出土遺物①

写真13　２ａ層－12

写真14　２ａ層－13

写真15　２ａ層－14

写真16　２ａ層－15

写真17　２ａ層－18

写真18　２ａ層－20

写真13～18　２ａ層出土遺物②

写真19　2 a 層-21

写真20　2 a 層-22

写真21　2 a 層-23

写真22　2 a 層-24

写真23　2 a 層-25

写真24　2 a 層-26

写真19～24　2 a 層出土遺物③

写真25　2 b 層- 1

写真26　2 b 層- 2

写真27　2 b 層- 4

写真28　2 b 層- 6

写真29　2 b 層- 8

写真30　2 b 層-10

写真25～30　2 b 層出土遺物

写真31　3a層-2

写真32　3a層-4

写真33　3a層-5

写真34　3a層-7

写真35　3a層-8

写真36　3a層-12

写真31～36　3a層出土遺物①

写真37　3a層-13

写真38　3a層-15

写真39　3a層-17

写真40　3a層-18

写真41　3a層-21

写真42　3a層-23

写真37～42　3a層出土遺物②

写真43　3 a 層-24

写真44　3 a 層-27

写真45　3 a 層-29

写真46　3 a 層-32

写真47　3 a 層-33

写真48　3 a 層-35

写真43～48　3 a 層出土遺物③

写真49　3 a 層-36

写真50　3 a 層-38

写真51　3 a 層-39

写真52　3 a 層-41

写真53　3 a 層-42

写真54　3 a 層-43

写真49～54　3 a 層出土遺物④

写真55　3b・c層-2

写真56　3b・c層-3

写真57　3b・c層-8

写真58　3b・c層-10

写真59　3b・c層-11

写真60　3b・c層-13

写真55～60　3b・c層出土遺物①

写真61　3b・c層-17

写真62　3b・c層-18

写真63　3b・c層-20

写真64　3b・c層-21

写真65　3b・c層-23

写真66　3b・c層-28

写真61～66　3b・c層出土遺物②

写真67　3b・c層-29

写真68　3b・c層-30

写真69　3b・c層-31

写真70　3b・c層-32

写真71　3b・c層-34

写真72　3b・c層-36

写真67～72　3b・c層出土遺物③

写真73　4a層-2

写真74　4a層-3

写真75　4a層-5

写真76　4a層-7

写真77　4a層-10

写真78　4a層-12

写真73～78　4a層出土遺物①

写真79　4a層-14

写真80　4a層-15

写真81　4a層-16

写真82　4a層-17

写真83　4a層-20

写真84　4a層-21

写真79～84　4a層出土遺物②

写真85　4b層-1

写真86　4b層-2

写真87　4b層-4

写真88　4b層-6

写真89　4b層-7

写真90　4b層-8

写真85～90　4b層出土遺物①

写真91　4ｂ層-10

写真92　4ｂ層-12

写真93　4ｂ層-13

写真94　4ｂ層-17

写真95　4ｂ層-18

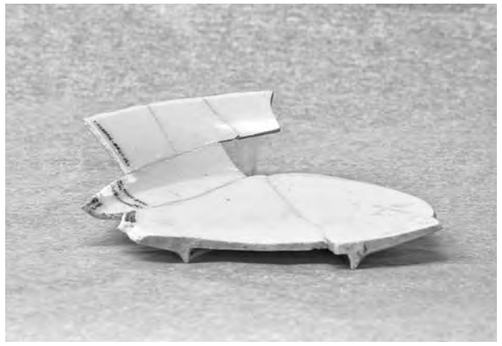


写真96　4ｂ層-19

写真91～96　4ｂ層出土遺物②

写真97　4ｂ層-20

写真98　4ｂ層-22

写真99　4ｂ層-23

写真100　4ｂ層-24

写真101　4ｂ層-26

写真102　4ｂ層-27

写真97～102　4ｂ層出土遺物③

写真103　4ｂ層-28

写真104　4ｂ層-30

写真105　4ｂ層-31

写真106　4ｂ層-32

写真107　4ｂ層-33

写真108　4ｂ層-34

写真103～108　4ｂ層出土遺物④

写真109　5ａ層- 1

写真110　5ａ層- 3

写真111　5ａ層- 5

写真112　5ａ層- 6

写真113　5ａ層- 8

写真114　5ａ層- 9

写真109～114　5ａ層出土遺物

写真115　混在- 1

写真116　混在- 2

写真117　混在- 4

写真115～117　層混在遺物

写真118　SB01検出（東から）

写真119　SB01検出（東から）根固め石遺構（東から）

写真120　SD02土層（東から）

写真121　SD02完掘（東から）

写真122　SD03土層西側（東から）

写真123　SD03完掘（東から）

写真124　SX04, 05完掘（東から）

写真125　SX06完掘（東から）

写真118～125　1面目遺構写真①

写真126　SX07完掘（南から）

写真127　SH08完掘（東から）

写真128　SH08完掘（南から）

写真129　SD09土層（北から）

写真130　SD09完掘（北から）

写真131　SD10完掘（北から）

写真132　SD11土層及び完掘（北から）

写真133　SD12土層（北から）

写真126～133　1面目遺構写真②

写真134　SD12完掘（北から）

写真135　SD13土層（北から）

写真136　SD13完掘（北から）

写真137　SX14土層（北から）

写真138　SX14完掘（東から）

写真139　SX15完掘（東から）

写真140　SH16立面及び完掘（北から）

写真141　遺構検出（西から）

写真134～141　1面目遺構写真③

写真142　SX17完掘（南から）

写真143　SD18土層（東から）

写真144　SD18完掘（東から）

写真145　SD19土層（北から）

写真146　SD19完掘（東から）

写真147　SD21, 22土層（東から）

写真148　SD21, 22完掘（東から）

写真149　SD23完掘（東から）

写真142～149　1面目遺構写真④

写真150　SB24検出（西から）

写真151　SB24根固め遺構（北から）

写真152　SB25検出（西から）

写真153　SB25根固め遺構（東から）

写真154　SH26検出（西から）

写真155　SH26立面及び完掘（北から）

写真156　SH27検出（西から）

写真157　SH27立面及び完掘（北から）

写真150～157　1面目遺構写真⑤

写真158　SH28検出（南から）

写真159　SH28立面及び完掘（南から）

写真160　SD29土層（東から）

写真161　SD29完掘（東から）

写真162　遺構検出（西から）

写真163　遺構検出（西から）

写真164　1面目完掘（北から）

写真165　1面目完掘（西から）

写真158～165　1面目遺構写真⑥

写真166　SE30検出（東から）

写真167　SE30立面及び完掘（東から）

写真168　SH31検出（西から）

写真169　SH31立面及び完掘（南から）

写真170　SC32立面及び完掘（西から）

写真171　SH33検出（西から）

写真172　SH33立面及び完掘（南から）

写真173　SH34検出（西から）

写真166～173　2面目遺構写真①

写真174　SH34立面及び完掘（西から）

写真175　SX35検出（南から）

写真176　SD36土層（東から）

写真177　SD36完掘（西から）

写真178　SH37立面及び完掘（西から）

写真179　SC38立面及び完掘（南から）

写真180　SB40検出（北から）

写真181　SB40土層（北から）

写真174～181　2面目遺構写真②

写真182　SV42, SA43完掘（南から）

写真183　SD44検出（南から）

写真184　SD44土層（南から）

写真185　SC49立面及び完掘（北から）

写真186　SB50完掘（北から）

写真187　SB50完掘（西から）

写真188　SV51完掘（東から）

写真189　SH52検出（南から）

写真182～189　2面目遺構写真③

写真190　SH52立面及び完掘（西から）

写真191　SH53検出（東から）

写真192　SH53立面及び完掘（北から）

写真193　SC54立面及び完掘（西から）

写真194　SC55立面及び完掘（北から）

写真195　SC56立面及び完掘（北から）

写真196　SC57立面及び完掘（東から）

写真197　SV58, SH59検出（東から）

写真190～197　2面目遺構写真④

写真198　SH59立面及び完掘（西から）

写真199　SB60（SV42, 45, 47）, SA43, 48完掘（南から）

写真200　SV64立面及び完掘（西から）

写真201　SH66検出（北から）

写真202　SH66完掘（北から）

写真203　SH67検出（北から）

写真204　SH67立面及び完掘（北から）

写真205　SD02と2面目の溝との関係（西から）

写真198～205　2面目遺構写真⑤

写真206　2面目遺構検出（東から）

写真207　焼土・炭化物・瓦集中域（南から）

写真208　2面目遺構検出（東から）

写真209　2面目遺構検出（南から）

写真210　2面目完掘（北から）

写真211　2面目完掘（北から）

写真212　2面目完掘（西から）

写真213　土層観察用ベルト南壁土層（南から）

写真206～213　2面目遺構写真⑥

写真214　SD39, 63土層（南から）

写真215　SD39, 41, 61～63, 68完掘（西から）

写真216　SD41土層（西から）

写真217　SH46立面及び完掘（北から）

写真218　SD61土層（北から）

写真219　SD62土層（東から）

写真220　SX65検出（南から）

写真221　SD68土層（西から）

写真214～221　3面目遺構写真①

写真222　SH69検出（東から）

写真223　SH69立面及び完掘（西から）

写真224　SH70検出（北から）

写真225　SH70立面及び完掘（北から）

写真226　SH71立面及び完掘（西から）

写真227　SH72立面及び完掘（北から）

写真228　SH73立面及び完掘（西から）

写真229　SE74検出（東から）

写真222～229　3面目遺構写真②

写真230　SE74立面及び完掘（南から）

写真231　SH75検出（北から）

写真232　SH75立面及び完掘（北から）

写真233　SV76立面及び完掘（北から）

写真234　SC77立面及び完掘（東から）

写真235　SH78検出（南から）

写真236　SH78立面及び完掘（南から）

写真237　SC79立面及び完掘（東から）

写真230～237　3面目遺構写真③

写真238　SH80立面及び完掘（北から）

写真239　SH81検出（東から）

写真240　SH81立面及び完掘（東から）

写真241　SE82検出（西から）

写真242　SE82立面及び完掘（東から）

写真243　SV83立面及び完掘（南から）

写真244　SK84, SB85検出（東から）

写真245　SK84完掘（西から）

写真238～245　3面目遺構写真④

写真246　SB85土層（西から）

写真247　SB85内出土遺物（南から）

写真248　SH86立面及び完掘（北から）

写真249　SE87検出（西から）

写真250　SE87立面及び完掘（西から）

写真251　SH88検出（東から）

写真252　SH88立面及び完掘（南から）

写真253　SX89検出（北から）

写真246～253　3面目遺構写真⑤

写真254　SH90, SC91検出（北から）

写真255　SH90, SC91立面及び完掘（西から）

写真256　3面目遺構検出（東から）

写真257　3面目完掘（北から）

写真258　3面目完掘北側（西から）

写真259　3面目完掘（南から）

写真260　3面目完掘東側（南から）

写真261　土層観察用ベルト南壁土層全体（南東から）

写真254～261　3面目遺構写真⑥

写真262　SH92立面及び完掘（北から）

写真263　SV93立面及び完掘（北から）

写真264　SH94立面及び完掘（南から）

写真265　SE95立面及び完掘（南から）

写真266　SX96立面及び完掘（東から）

写真267　SH97立面及び完掘（南から）

写真268　SX99立面及び完掘（南から）

写真269　SX100立面及び完掘（東から）

写真262～269　4面目遺構写真①

写真270　4面目完掘（北東から）

写真271　5a層検出（東から）

写真272　5a層完掘（北東から）

写真273　調査区北壁土層西側（南から）

写真274　調査区北壁土層全体（西から）

写真275　調査区東壁土層南側（西から）

写真276　調査区東壁土層全体（北から）

写真277　完掘北側（西から）

写真270～277　4面目・5面目完掘写真

報告書抄録

ふりがな	いまやしきかろうやしきあと
書名	今屋敷家老屋敷跡
副書名	対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告
巻次	
シリーズ名	対馬市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第9集
編著者名	尾上博一・村瀬達郎
編集機関	対馬市教育委員会
所在地	〒817-0322　長崎県対馬市美津島町雞知甲1287番地1
発行年月日	西暦2016年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
いまやしき 今屋敷 かろうやしきあと 家老屋敷跡	ながさきけん 長崎県 つしまし 対馬市 いづはらまち 厳原町 いまやしき 今屋敷	42209	042	34°11′58″	129°17′31″	20121009 ～ 20120412	1584.05	対馬市観光情報館ふれあい処つしま建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
今屋敷 家老屋敷跡	屋敷跡	中世 近世	建物跡・溝跡・石列 石組遺構・石壁遺構	近世陶磁器・瓦類 輸入陶磁器・土師器	

対馬市文化財調査報告書　第９集
今屋敷家老屋敷跡
2016年３月31日　発行

編集・発行　対馬市教育委員会
〒817-0322　長崎県対馬市美津島町雞知甲1287番地１
TEL 0920－54－2341　FAX 0920－54－4046

印　　刷　株式会社　昭和堂
〒854-0036　長崎県諫早市長野町1007－２
Tel 0957－22－6000　Fax 0957－27－0003

PDF 作成：平成28(2016)年３月28日　株式会社 昭和堂